
魔王との冒険記

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王との冒険記

【Nコード】

N0474M

【作者名】

天見酒

【あらすじ】

英雄の親を持つ才能溢れる非凡な青年刀士が、優しき魔王な女の子を召喚してしまったことにより巻き込まれる異世界の英雄物語。

世界を渡り歩く彼らが行き着く先とは？

どんな違いが有っても、人は繋がっていく！

天見酒、『冒険記シリーズ』第二弾！

出来れば第一弾の『勇者との冒険記』を読んでからの方が分かりやすいと思います。

逆に、この小説を読んだ後に第一弾を読んだ方が面白いかも知れません。

賢者と勇者の出会いの地

出会いの森。20年前、この地で賢者ライシス・ネイストと勇者アレ・レイフォートは出会った。

魔物によって薬草の生える泉を占拠されてしまい、困り果てた村人達を救う為にその魔物退治を引き受けたライシス・ネイスト。

数百を越える魔物の群れに流石の賢者も危機に陥る。その危機を救ったのは後に勇者となる男だった。

偶然に通りかかった残虐非道な“同士殺し”と呼ばれたアレ・レイフォートだった。しかし、その賢者が村人達の為に奮闘する姿を見たアレ・レイフォートは改心し、賢者とともに数多の魔物を退治する。

それがこの地に残る父上とアレさんの伝説である。

しかし、俺はこの伝説が大いに間違っていることを知っている。

それは、あのアレさんが極悪非道だったという事実は全く無かったと言う点だ。あんなお人好しな人が極悪非道に走っていたなんて事がある訳が無い。

この点だけは父上の嘘話の中で信じられる。

父上はこの森で魔物から逃げただけでアレさんに命を救われただけと言う。アレさんの活躍を立ててはいるが、あの人は自分の偉業について謙遜して語る癖があるので、父上が自分の事を語る時だけはあまり信用が出来ない。

ともかくにも、今、俺はその父上達の伝説が始まった地にいるのだ。少し気分が高揚している。

俺は仕事で来たのだ。少しは落ち付かねばいけないな。

「おつと、坊主。どこに行くんだ？」

木の影から現れる三人の男達。やっと出たか。

「悪いがここからは素っ裸になって帰って貰うぜ」

こういう輩は20年前から増えたらしい。父上達が魔王を還した後、ガンデア連邦国が崩壊した。ガンデアは当時の貴族領がシーベルエの庇護により独立し、シーベルエのノースと現ドーヌ自治領間にあつた国境は撤廃された。

そうしたことだガンデアから大量の人が流れ込み、人口増加による就職難が犯罪の増加をも引き起こしてしまったのだ。

「俺はシーベルエ騎士団准尉リセス・ネイストだ。抵抗せずにお縄に付け」

激しく笑われた。まあ仕方ないだろう。俺も青年騎士団員ただ一人。大した敵には見えないだろう。

仕方がない。カタナに手を掛ける。

「おつ、坊主やるつてのか？」

三人の中で一番大柄な男もにやけながら腰の剣を抜く。

それと同時に俺はその男の懐に入り、喉元に鞘に収まったままの力

タナを叩き込む。全く隙だらけな奴だな。

倒れた男に驚く残り二人。一人が慌てて拳銃を俺に向ける。遅いな。しかも、銃ならばもう少し間合いを取るべきだったな。

拳銃の引き金が引かれる前に拳銃の上半身が地面に落ちる。そして、怯む男の鳩尾に蹴りを入れる。

俺から距離を取った最後の男が火魔法を放った。俺に当たる筈がない速さと威力だった。その男への返しに雷魔法をお見舞いする。避ける間もなく紫電に貫かれて男は悲痛の叫びをあげて気を失った。

その後、この森の近くの村に駐留している騎士団員にこの山賊どもを引き渡した。

騎士団員の一人が俺に馴れ馴れしく話し掛けてくる。

「いやあ、さすがは賢者殿の息子様はお強いですね」

「父上はもつと強いですよ」

それだけ言つと俺はこの地を後にする。煩わしい世辞は嫌いだ。

それにしても、山賊三人ごときにあんなに時間をかけるとは、俺はまだ父上やアレンさんには及ばないらしい。もっと己を鍛えなければな。

あの人達のような英雄になるために！

英雄の終焉の地で始まった

ナールスエンド。かつて、初めて魔王を倒した大勇士リンセン・ナールスが眠る地。

『えー、リセス君はナールスエンドに居るのか？良いなあ。彼処には美人が多いらしいじゃないか！よし、僕も視察を目的に今からナールスエンドに行こうじゃないか？』

「陛下、そろそろレッドライト総長にお代わり下さい」

この魔導話機は騎士団総長執務室に繋がった筈なのだが、何故かクーセリング・シーベル工国王に繋がってしまい、無駄話を聞く羽目になってしまった。

『もう少しぐらい良いじゃないか、リセス君。僕にジンサが冷たい仕打ちをするのだよ。忙しい僕がせっかくこうして遊びに来てやってるのに全然構ってくれないんだよ、アッ』

『すまないな、リセス。少し部屋を離れていた。ナールスエンドに着いたんだな？』

魔話機の向こうから聞こえる不機嫌そうに感じる声。この人は普段からこんな感じの声を出すから別に不機嫌という訳では無いのだが。

「はい、着きました。今からバックス邸を調べて参りますが、何か追加情報はあるでしょうか？」

今回の任務は、このナールスエンドの大商人バックス邸にて、何やら良からぬ武装集団が集まっている情報を得たから調べて来いと言

うことだった。

『その事だが、お前はそこで増援が来るまで待機だ。明日には着く筈だ』

一人で仕事をする気でいた俺は少しこの命令が気に障ったが、ジンさんの判断が間違っ誤は無い。何かあるのだろう。

『この件に関して何か新たな情報が入ったのですか？』

俺一人では無理だと言う理由を聞いておきたい。

返答が無い。息を吐く音が魔法機に向こうから漏れて来る。煙草を吸いながら話すべきか話さるべきかを考えていると推察する。しばらくして応答があった。

『…オルセン・ハシユカレらしき人間がナールスエンドで目撃された』

俺は息を飲んだ。オルセン・ハシユカレ。魔王の再臨を望み、奸雄クレサイダに従った男。今なお、魔鎗エウレクイと共に姿を消し、世界的に指名手配されている大罪人。

『分かるな？オルセン・ハシユカレがお前がライから譲り受けたセレミスキーを手に入れたらどうなるか』

俺は無意識にベルトに提げている小鞆に触れる。

「分かりました。大人しくしています」

『早ければ増援が今夜には着くはずだ。…一つ頼みたいことがある』

「何ですか？」

ジンスさんの真剣味を帯びた声に俺の胸は高鳴った。ただ待つよりは良い。

『実はルクが増援部隊に勝手について行ってしまった』

俺の胸の高鳴りは急激に治まった。

『そちらに着いたら危険な事をしないように見張ってくれ。そして早めにシーベルエンスに連れて帰ってくれ』

魔話機の方こうで陛下の“親バカ”という単語が聞こえた。俺も言っ
てやりたいところであるが止めておく。

「…はい、分かりました」

『言っまでも無いと思うが、絶対に手を出すなよ』

魔話機の方こうから伝わる威圧感。流石は歴戦を制して来た騎士団
総長。しかし、その威圧感を有効活用するべきではないだろうか…。

魔話機を切り、ナールスエンドの街中を歩きながら、今後の行動を
検討するために提供された情報を整理して置くことにする。

溜め息が漏れた。

あの性悪女が来るのか。昔は可愛かった。とても大人しく照れ屋で父親であるジンさんにべったりだった。しかし、ある時期を境にルクの性格は急変した。性格は逞しく、陰険になり、人をからかうことが生き甲斐となっていた。

子は親に似ると言うが、あの少し親バカではあるが謹厳実直なジンさんとあの心が澄み渡るほど綺麗な聖女ニーセさんという素晴らしい両親から、どうしてルクのような性悪が育つのかが全く分からない。本当にルクは誰に似てしまったのだろうか？

下らんことを考えてしまった。

俺の目の前には、バークス邸。あのオルセン・ハシユカレがここに居る可能性がある。

父上やアレンさんの好敵手だったと言われるオルセン・ハシユカレ。是非、自分の実力を試す為に闘ってみたい。

そんな俺の隠しきれなかった欲求がジンさんの命令に打ち勝ってしまった。

少し情報を集めるだけならば良いだろうと言いつくを作る。

俺のこの軽はずみな行動が父が守った世界を危機に陥る騒動に巻き込まれる結果になるとは思っていなかった。父上よりも長き旅路になることも。

そして、これが彼女との出会いになるということも

英雄の終焉の地で始まった（後書き）

さて、主人公リセス・ネイストの名前ですが、気付いている方もいると思いますが、設定上、リセスの父上が大好きな英雄を略して付けたということでございます。

では、問題です。名前だけ登場したルクちゃんは、母親の尊敬する人の名前から取ったという設定です。さて、誰でしょう？

『魔王との冒険記』からの新規読者の皆様には分からないだろう問題失礼しました。

魔王の降臨　そして彼女と出逢う

バークス邸。潜入したは良いが拍子抜けだった。オルセン・ハシユカレどころか人っ子一人いない。

しかし、それが異質さを物語る。こんな大きな屋敷に誰も居ない。更には既に日が暮れているのに明かりを灯さない。まだ、良い子が寝る時間だぞ。屋敷全体が静まりかえるには早すぎる。

暗い屋敷の中を歩き回る中で唯一つ床から昇る光を見つける。

そして、その僅かに漏れる光に映し出される床に積まれた数々の血にまみれた人形。おそらくここで生活をしていただろう人間だったもの。

血が沸き立つ。俺は今、怒っているんだ。冷静になれ。怒りで行動すればミスを犯すぞ。

地下へと導く階段。足音を消して降りていく。階段は三十段程、そこまで深くは無い。

行き着いた先にそいつらは居た。まだ魔写真機が開発されていない時に行方不明になった為、未だに手書きの手配書だが、絵師の腕の良さを評価せざるを得ない。オルセン・ハシユカレだ。他に伸びる影で、他に二人の人間がここから確認出来る。

「では、始めます」

女性の高い声。何を始める気だ？

「ああ、やっとだ。やっとこの世界を変えられる。待っていてくだ

さい。ニーセ様」

オルセン・ハシユカレの言っていることが分からない。どういうことだ。ニーセさんが関わっていると言うのか？

「チツ、オルセン。ネズミが居るぞ」

しまった。話に聞き入り過ぎた。その男が俺を視界に捉え、その男がカタナを抜くのを確認した俺も抜刀する。

黒髪の黒目、併せてカタナ。カイナ人か？顔には斜めに古傷が入っている。

速い！基礎動作を繰り返すカイナの剣術。大陸式の剣術と違い力と技だけに頼らず、体技を用いた剣術。

その鋭い攻撃には守備に回るしかない。

同じカイナ剣術の俺の師である母上と同等、もしくは母上を越えるかも知れない。

とにかく足場が悪すぎる。段差が俺の足さばきを邪魔する。相手もその段差で攻めきれないが、このままではジリ貧で負ける。

俺がわざとカタナを大きく弾かれる。相手が俺に止めを差そうと僅かに大振りになる。その隙を狙っていた。

相手の足の横を通り部屋へと転がり込んだ。

相手の背中を取る。俺の虚を付いた行動に振り返ったところを横っ腹に一閃。

相手を殺るには少々浅かった。しかし、相手の猛攻を止める一撃を加えた。

自分にも敵にも死角の無い場所に立った。

この地下室は予想より幅が広がった。影と声のみで確認した人数より三人多かった。

中央で何かを胸に抱きながら祈る女性、おそらく魔力を何かの魔具に溜めているのだらう。その背中を守るように立つオルセン・ハシユカレ。

そして、壁際に立つ三人。

シーベル工人はカイナ人を見たらニンジャと思う偏見があるらしいが、カイナ人の血を半分引く俺ですら、先程の顔傷の男を含めてこいつらがニンジャであると思った。気配の消し方が出来ている。

そして、そのニンジャ共は侵入者である俺を排除しにかかる。

しかし、剣術はお粗末だ。先程殺り合ったニンジャ男に比べて剣速、太刀運び、何に關しても劣っている。その三人が血を流しながら床に倒れるのに大した時間はかからなかった。

俺の後ろに腹を斬られたばかりの顔傷の男が立ち上がり、カタナを振るう。一撃目は避ける。一撃目を利用した切り返し。その鋭い刃をカタナで受ける。急に顔傷が俺から一度距離を取る。

俺の腹部を貫く鎗先。オルセン・ハシユカレは一步も動いてなく手に持つ鎗の間合いの外だった。俺がその鎗が魔鎗だということを失念していなければ。

「それで、君は何者何だい？」

俺から引き抜かれる鎗。足の力が抜けて地面に倒れ落ちる。このままではカタナを振るえそうに無い。

ここで俺は終わるのか？いや、諦めまい！

「俺の名前は、リセス・ネイスト。あんたの宿敵の息子だ」

気付かれないように魔力を練る。何としても話を伸ばす。腰のセレミスキーに手を伸ばす。

「ネイスト…。貴様、ライシス・ネイストの息子か！」

七つのセレミスキー。今は、確認している暇も気力も無い。どの世界の鍵かは賭けだ。頼むからファイフレかクーレであってくれ。

「貴様の親父は俺の一番嫌いな人間だったよ。今は、ジンサ・レットライトが一番嫌いだがね。あのクソ男は俺のニーセ様を！」

ジンさんをクソ男呼ばわりとは随分人を見る目が無いことだ。こんなことを考えると、思考能力が落ちて来ているようだ。

「まあ良い。それも今日で終わりだ。この世界は変わる。魔王の降臨だ。クレサイダのようなミスはやらない。ヘブヘルから最強で凶悪なる者を喚ぶ。君も見ていくが良い。ライシス・ネイストが如何に無駄な時間稼ぎをしたただったかを！」

そんな馬鹿な話があるか！セレミスキーを用いずにヘブヘルに繋がられる筈は無い。

しかし、その定説は打ち破られる。祈り続けていた女性の前に現れた召喚門。

門が開くと同時に召喚された青年。外見はこの世界の人間に似ている。大きな違いは赤毛に赤い瞳と言うこの世界ではまず見ない髪と目、背中から生える漆黒の羽が有る。

「ここは異界なのか？我は召喚されたということか？」

すでに何日も着替えて無いような服装。髭の手入れもしてないだろ
う顔。しかし、その風貌とは異なる何かの脅威をこの男は持っていた。
た。

「私の名はオルセン・ハシユカレです。ここはクーレ。陛下にこの
世界を支配して頂きたくお喚び申し立てました。対価として私は貴
方様にこの世界を捧げます」

オルセン・ハシユカレが頭を下げる。

その青年はその言葉を聞き笑った。

「あの魔王に負け、牢に幽閉されたこの我が陛下とはな。面白い。
まずはこの世界を落としてみるとしよう。フッフ、久しぶりに暴れ
られるな」

危険だ。こいつらを何とか止めなければいけない。世界が危ない。
悔しい。俺にこいつらを止める手が無いことが。父上のような強さ
があれば…。

だから、父上から受け継いだこのセレミスキーに最後の希望を託す。

どうか、対価は身体の一部だろうが命だろうが何でも良い。この世
界の為にアイツを倒せる奴を喚んでくれ！

腕に力を込める。俺の真横に召喚門が出現する。

「何、貴様セレミスキーを持っていたのか！」

気付くのが遅いな。すでに門は開く。
出てこい。この世界を救う救世主。

「私、もしかして君に召喚されちゃた？」

まだ成長途中だろう女性の声が響く。俺を見つめる赤い瞳。華奢な
体つきに白い翼がゆっくり上下している。愛くるしく笑う笑顔が戦
いを知らない子供に見える。歳は俺と同じぐらいか？

失敗したのか？いや、人を外見で判断してはいけない。これでも凄
い戦闘能力を持っているのかも知れない。腰に帯剣している。凄い
剣士かもしれない。

「どうして、今喚んだの？」

とても悲しそうな目で俺を見てくる。その彼女の悲痛な瞳に俺は罪
悪感を覚える。

「すまない。手を貸してくれ！」

そして、頷くと彼女は手を俺の腹部に当てる。傷が塞がる。速い。
この世界の医術士ではこんなに速い治療は無理だ。こいつ、凄い医
術士だ。同じくらい高度な魔法を扱えるのかもしれない。
直ぐに立ち上がりカタナを向ける。敵はこの被召喚者を黙って観察
していてくれたようだ。

「フォローを頼む」

「うん…」

とても元気の無い彼女を横目で見る。もしかしたら、この少女には、いきなり異世界に喚ばれて戦えは酷なのかもしれない。しかし、今はそんな同情を懸けてはいられない。

何かとても辛いのだろう彼女が顔を俯き加減に今にも泣きそうに眼を潤めて俺に向かって言った。

「夕ご飯の前だったのに……。仕事が終わって、やっと楽しみにしてた夕ご飯だったのに……。何で今なの？」

彼女のお腹の虫が騒ぐ。

俺は召喚する相手と時間をとっても間違えてしまったらしい。

魔王の降臨　そして彼女と出逢う（後書き）

物語の中核を担うヒロインが格好良く登場、とはさせません。

それが天見酒クオリティです。

腹が減るって生きてる中で一番の苦行ですよ。

魔王 vs 魔王

「後で夕飯を死ぬほど食わせてやるから手を貸せ」

これが対価ならば安い上がりだ。実力は未知数だが俺一人よりはマシだろう。

「死ぬほどは食べたくないよ。生きてるほど食べたい！」

今はそんなおふざけはいらない。

何故か俺たちの行動を見守る敵がいる。さすがに無事に帰してくれはしないだろうが。

「今は敵が前にいる！前を見る！」

いきなり喚び出して手伝えと言っておきながら、少し強く言い過ぎたか？無言になる彼女の驚愕の顔。そして、彼女は剣を抜いた。

「久しぶりだな。魔王イルサテカ」

俺にやられた奴からカタナを拾い上げこちらへ向ける赤髪の男。しかし、あいつが魔王ではなく、こいつが魔王なのか？

「誰がそいつを喚んだの？」

声、雰囲気は冷淡へ豹変していた。彼女から伝わる重い感覚。俺の顔に流れる冷や汗。俺は危険な奴を喚んでしまったかも知れん。

赤髪の男曰く、魔王イルサテカ。先程までの威厳の欠片も無い姿は

今は無い。本当にこいつは魔王なのか？

「そいつは、…カイムはとても危険な奴なんだよ。何で喚んだの？だから牢に入れてたんだよ。誰が喚んだの？」

俺の隣から来る強い圧迫感。彼女はかなり頭に来ているらしい。

「だから、我を殺しておけと言ったのだ。甘過ぎる自分を悔いるのだな、イルサ」

どうやら因縁深き仲と言うことが。少なくともカイムという男の危険性は分かった。

「素直に牢に帰る気は…無いよね、カイム？」

「フッフ、我がそんな柔順な人間に思えるのか。せつかく出れたのだ自由に暴れさせてもらいたいな」

彼女の翼が一回羽ばたく。

「…分かったよ」

その言葉が開戦の合図だった。

イルサテカがカイムへと一気に距離を詰める。カイムも同じく突き進む。二人の刃が合わさる。

「ウウ、クウー！」

「やはり、純粹な筋力では我が上か」

鏑迫り合いに対して力む呻くイルサに、カイムは涼しい顔を見せている。二人の顔が近付いて漸く分かった。

この二人は似ている。ヘブヘルでは在り来たりかもしれないが赤髪と赤い瞳、そして端正な顔立ちが何処と無く似ている。

力の均衡が解かれる。カイクが彼女の腹部へ蹴りを入れる。彼女が俺の側へと床を跳ねながら転がった。

呆けてこの二人の関係について考えている場合では無かった。

素早くカタナを鞘へ収め、右足を前に出し、腰を少し落とす。彼女へ止めを差そうとするカイクを見る。

一撃必殺。これを使うしかない。鞘走りの勢いを利用した最高速度と最高威力を誇る刀技。必殺。しかし、外せば出来るその隙は大きい。母上に下手に使うなと言われた手段。タイミングを外すなよ、リセス・ネイスト。

「居合いだな」

横から急に現れたカタナ。それを防ぐのに俺のカタナは使われる。傷顔の男。くそ、邪魔だ。カイクを倒せるだろうイルサを失う訳にはいかんというのに…

向かって来るカイク。痛みに咳き込みながらイルサが手のひらから光の玉を売った。

止まるカイクと爆発。その隙に傷顔の男に鞘を叩き込んでやる。

その近距離からの魔法にカイクがやられてくれれば良かった。魔法防壁か、あの高威力でピンピンしてやがる。

イルサの魔法は別の効果を産んだ。

カイムの頭上から落ちる砂と石くれ。この地下室が軋みをあげる。こんなところで高威力の魔法を使った結果だ。

「チヨ、何するのオー！カイムー！」

うるさい。お前の馬鹿のせいだ。樽担ぎされ騒ぐ彼女を無視して階段をかけ上る。後ろからは倒壊していく地下室の音。彼女の翼が中々触り心地が良かったのは、この場では関係無いと割り切ることにする。

崩れる可能性のあるバークス邸から外へ出たところで彼女を下ろす。あいつらは出て来ない。

「…生き埋めか？」

本当に生き埋めなのだろうか？これで終わりなのだろうか。

「怪我をしたのか？」

イルサは隣で自分の身体を隈無く手で確認している。

「お父様がね、男の人に余り密着しちゃうと身体が腐っちゃうから、男の人には余り触れたらいけないって言ってた。ねえ、私の身体腐って無いよね？」

それはそのお父様とジンさんを会わしてみたいものだな。

これから、どうすべきか？増援を待ってからあいつらの生死を確

認するか？

バークス邸を眺めながら煙草を一本取り出し口に加える。

「何それ、食べ物？」

興味津々な彼女の言葉に張り詰めていた俺の気が緩む。こいつの住む世界には煙草は存在しないらしいな。

この楽しみを邪魔されたくは無い。彼女の顔を見ながら火を付ける。

轟音。バークス邸に炎が上がり、崩壊が始まる。

「凄い！その白い棒は魔道具なの！」

彼女の勘違い通りならば良かった。しかし、これは俺や煙草の為に術では無い。

炎の中から現れたカイル。その後ろには、ハシユカレと顔傷の男、謎の女。そう簡単にくたばる奴等では無かったか。

俺はこいつらに勝てるのか？

魔王VS魔王（後書き）

書けない！戦闘描写が全く上手く書けないよぉ！

番外編 幕開けに間に合わなかった大名優

ここに来るのは20年ぶりか。あの人とあの時、訪れて以来は来ていなかった。

僕の大きく変えた。あの時からもう20年が経ったんだ。本当に大きく変わった。

このナールスエンドに初めて訪れた時に、また僕が騎士団に入り、まさか一隊を任される隊長になるとは思ってもみなかった。一人で感慨に耽ってはいけけないな。僕は今、隊長だ。

「レクス君、宿を探してくれ。僕はリセスを探して来るよ」

この時間ならば彼も宿で休んでいるかもしれない。いや、彼の真面目な性格からすると勝手に動いているかもしれない。頼むから、無理をしてないでくれよ。

ルクが僕の手を掴んだ。僕が上から覗くと顔色が悪い。ジン隊長に無断で付いてきたとはいえ、もう少し彼女の足にペースを合わせるべきだっただろうか？

ルクは街中の一方を指で示す。

「あつちで何か大きな魔力を持った動くモノが二つあります。この世界の生物だとは思えませんよ」

彼女が真剣な面持ちで指を差す方向で異変は起きた。

爆発音。そして、暗い空を照らす炎。

「レクス、テド、周辺住民の避難の誘導と救護を！」

「ハイ、隊長！」

うちの医術隊士と銃隊士は直ぐに動き出した。

「ミシャとルートは僕の援護を頼む。行くぞ！」

「私はあー？」

「ルクはここで待機！君に怪我をさせたらジン隊長に殺される」

走り出した僕の命令にルクが素直に従ってくれるとは全く予想していない、予想したように彼女は僕に後れて走っている。

今はルクに構ってる場合では無い。頼むから怪我をしないでね。君に怪我をさせたら、ジン隊長どころかニーセさんに顔向け出来ない。

僕の頭に巡る二人の人名。

オルセン・ハシユカレ、何をしたんですか、貴方は！

リセス・ネイスト、頼むから無事でいてくれよ！

僕らが目指す場所に彼は居るだろう。確信を持ってしまふ。この騒動の中心にいる。

この場面に合わない苦笑いが溢れた。

大舞台の中央へ立ってしまふ主役。
それがあの人から受け継いだリセス・ネイストの宿命のように感じ
た。

勇者、再来す

炎を背景に地上に現れた4人の影。絶望を見た。

「イルサテカよ。中々頭を使うようになったではないか。しかし、あんなことで我が倒せると？」

へブヘル人は化け物なのか？

「思ってないよ。そんなこと」

剣を構えられる彼女が羨ましい。

カタナに触る右手も震えている。カタナを握れない。

闘えない。

逃げたい。

怖いんだ。俺は。

こんな奴等は無謀に立ち向かえって言うのか。

無理だ。俺には無理だ！

父上に憧れた。魔王に勇敢に立ち向かう父上。ライシス・ネイスト、勇敢なる父を持つその息子とはんだ腰抜けだ。

身体だけ強くなったつもりだった。こんなに怖い相手と会ったことが無かった。

「無理しなくて良いよ。付き合わせてごめんね」

イルサの言葉。俺は怯えを隠しきれてさえいなかった。

イルサが光の弾丸を放つ。カイムの前でそれは弾かれる。

先程のイルサの物言いに、カタナが握れた。

その要因は廃棄すべきちっぽけなプライドだ。

無理をするなどと。あいつの相手に手一杯の癖に。一人でやらせられるか！

付き合わせて悪い。付き合わせたのは俺の方だ。

悪いが俺のプライドに反する。

女一人で戦わせられるか！破れかぶれでやってやる！

俺はどうやら父上のような崇高な精神は持ち合わせていないらしい。

カイムが此方へ来る。

速い。だが、母上のカタナよりは遅い！身構えるイルサの前に俺は出る。

一撃を繰り出す。

反応した。カイムのカタナと合わさる。

それで良い。俺では無理でも盾ぐらいになつてやる。

イルサのカイムを貫く風の矢。カイムが僅かな傷を追いながらも俺と離れる。

「どうだ！」

何を誇っているんだ、俺は。かすり傷を与えただけだ。しかも、俺ではなくイルサの功績だ。

俺一人では何も出来なかった。イルサが居たから出来ただけだ。なのに、何故俺はこんなに気分が良いんだ。

「フム、やってくれるな。ハシユカレとやら手を貸せ」

顔傷は俺の一撃による出血が徐々に効いているようで戦線不可能だ。カイムを召喚した謎の女に抱えられている。

魔鎗エレウキイは侮れない。二対二か、不利には変わらないが何とかしなくてはな。父上のように世界を守る為に！

「イルサ、やるぞ！」

「うん！」

心強い、隣にこいつが居るだけで。

あの一人でも強い父上が、アレンが居なければ俺はダメダメだ、と言っていた気持ちに謙遜では無いと今は分かる。どんなに自分が強くて隣にこいつが居ないと心が弱くなる。

そういう事だろ、父上！

カイルが仕掛けて来る。イルサが迎え討とうとする。イルサへと魔鎗が伸びる。俺はハシユカレの攻撃を防ぐ為に動き出す。

「そこの子お、退いてえー」

聞き覚えのある間を抜けさせる独特な声だ。イルサが身を翻す。カイルが声の方を見た。

カイルの足を貫く銃弾。

カイルが危機を感じ空へとその翼で逃げようとする。

俺の横を通り抜ける風に靡く金の髪。

カイルを襲う輝く剣、魔剣ペグレーション。

カイルは交わした。左翼を犠牲にして。

「カイル様！」

その女がカイルの側に寄る。ハシユカレと傷顔も集まる。

「本当にやってくれる…。大丈夫だ。この程度そのうち治る」

立場が逆転した。勇者が来たのならば負ける訳がない。

「全員大人しくしてください」

「また貴様か。また邪魔をするかアレン・レイフォート！」

ハシユカレが怒鳴る。

その時、謎の女の手から光が現れる。

そして、その女は消えた。顔傷の男、ハシユカレ、カイクも。残ったバークス邸の瓦礫。

「カイクー！」

この女の叫びだった。

「ルク、近くに居る？」

「居ませんよー。転移魔法ですかねえー」

楽に言ってくれる。転移魔法なんて簡単に出来る代物では無いだろう。成功例は数件しか無いぞ。

アレんさんがそんなことを考え込む俺を見た。この人では見たことの無い弱々しい顔だった。

「リセス。勝手に動くな。心配したよ」

心配をおかけしながら、申し訳なく思うより嬉しく思ってしまった。

「それでえー、そちらの異常に魔力の高い翼の生えた子はリセ君のコレエ？」

小指を立てながら如何にも愉しそうに聞くルク・レッドライト。

「彼女は危険では無いよね？」

アレンさんに彼女を召喚した経緯を説明する。

「危険かどうかは計りかねています。しかし、無闇に攻撃をしてくるような奴では無いです」

イルサには悪いと思うがかなり強力な力を持っているのは確かだ。

そういえば、先程からイルサが静かだ。イルサは地面に仰向けに倒れていた。

「おい！イルサ、どうした！」

まさか、何らかの怪我を負っていたのか？

「死ぬほどでも良いから御飯食べさせてえ」

この涙声が周囲の人々の警戒心を根刮ぎ消した。

魔王の語る事情

「これは、何？」

何故にスプーンとフォークを知らんのだ。おい、それは食い物じゃない。ええい、飯を手で食うな！ バターはそのまま食うものじゃない。パンに付けろよ。いや、パンにフォークは使わんど。それは手で食って良いんだ。

俺が飯を食べる暇が無い。

「リセス君、何かとっーても楽しそうだね」

ニヤつくルクほどでは無い。今まで弟妹が欲しいという願望が合ったから少しは楽しく感じてしまうが…

「少しはお前が教えろ」

イルサの食事マナーはあまりよろしいものでは無かった。というよりもイルサにとってここには見たことも無いものが多すぎるということか。

「それでイルサちゃん。そろそろ、君のことについて聞いても良いかな？」

今まで俺たちの同行を温かく見守っていたアレンさんが、ステーキにかぶりつき始めたイルサに聞く。

「良いよー！」

イルサは腹が満たされてきて大分ご機嫌なようだ。

「君はヘブヘル出身でリセス君に召喚された。間違い無いよね？」

イルサはステーキを頬張りながら頷く。

「イルサちゃんはヘブヘルで何をしていたのかな？」

「魔王」

イルサは一言で答える。また、隣のレクス兄さんがナイフで丁寧に切り分けたステーキヘフォークを刺す。レクス兄さんはまるで妹を見守るようにステーキを頬張るイルサを見ている。

見られているイルサ、自称魔王様はとてもご満悦だ。

「それなら、シールテカさんはどうしたんだい？僕はあの人に会ったことがあるんだけど？」

アレンさんと父上の魔王退治の話だ！是非、聞きたい！

俺の胸は高鳴る。

しかし、イルサは…。

「…お父様は殺された。カイクに…。お母様も」

彼女の一筋流れる涙が俺の昂った気を鎮める。申し訳無い気がしてきた。

「カイクは危険。止めなくちゃいけない。リセス、私は帰らないよ。」

それだけ言つとフォークを動かし出すイルサ。泣きながらステーキをもの凄い速さで平らげる。

ミシャさんが自分のステーキを差し出す。

「イルサちゃん、ゆっくり食べてね？お姉さんが奢つてあげるから一杯食べて良いよ！」

ミシャさんには分かるのだろう。親を失う気持ちが…。

「そうか…。君のお父様はとても良い人だったよ。とても奥さんと君を愛していたよね？」

涙で顔を崩しながらもステーキを食べながら一つ頷くイルサ。

勇者が魔王をととても良い人と評価するほど、その魔王は善人なのか？

「それでどうしますう？」

ルクはこの重い空気を恐れることを知らないのか。

「カイムを見つけないといけない。居所は全く分からない。取り敢えずシーベルエンスに戻つてジン隊長の指示を仰ぐよ」

アレンさんの判断に賛成だ。一人を除いて。

「ええー！嫌ですよー。お父様に捕まつたらシーベルエンスから出れなくなっちゃいますよ」

ルクはジンさんに首に紐でも付けて貰え。

「シーベルエンス？それどこ？面白いものある？美味しいものはある？」

先程までの落ち込みようは何処へ行つたやら、魔王様はこの世界に興味津々な御様子だ。

こいつは本当に魔王かと思えてしまつがまあ良しさ。凶悪な魔王より扱い易い。

「おい、イルサ。ピーマンを残すな」

子供か、お前は。いや、こいつは子供か。

「だって、これ苦いんだもん」

「そのピーマンは農家の人が魂を込めて育て、料理人が魂を込めて調理したものだ。しっかり食べる！」

「リセ君、ライシスおじ様みたい」

その何が悪い。父上の言葉が正しい。

「これに人の魂が……。これの為にその人達が死んじやつたんだ。分かったあ。食べるう」

いや、死んでは無いだろう、だから泣くな。

魔王は涙脆くても勤まるのだろうか。

俺の魔王像は今日から、長き旅を共にするこいつに徹底的に破壊されていくことになる。

魔王の語る事情（後書き）

ダメだ。シリアスが書けない。

イルサ、リセスよ。

なぜ、お前たちはそんなに素晴らしきボケとツツコミのコンビに脳内変換されてしまうのだ。

まあ、序盤は気楽にコメディ多めでいきましょう。

騒ぎ立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 1

うるさい。

この世界を代表する貿易港。世界中から様々な物品が集まり、世界中から様々な人々が集まる地。

往来に溢れかえる人々が喧騒を極めている。

そして、一人で喧騒を極めるこいつ。

「あれ！あれは何？」

ヘブヘルでは見たことの無い世界中の物が溢れるこの都市はイルサに飽くことの無い好奇心を与えた。

この好奇心に支配されたイルサを見て、アレんさんが宿や船の手配を済ませてくれるから街を見て来なと勧めた。

俺もイルサを一人で解き放す訳にいかず付き合うこととなった。

おい、勝手にそっちに行くな。怪しい人に関わるんじゃない。だから目立つ行動をするな！

結果、俺とレクス兄さんはこの無尽蔵に動き回る女が腹を鳴らすまで振り回されることになった。

「リセスは食べないの？」

がつつくイルサの前にはいくつかの皿が並んでいる。俺の前にはコ

ーヒー一杯。疲れて食う気にもならない。

「お疲れ様、リセス」

俺の向かいの席で笑って俺たちを眺めているレクス兄さん。

「レクス兄さんもな」

本当に俺たちは親切すぎる。少しは労れ人の金で食いまくるイルサ。

「リセスとレクスさんは兄弟なの？」

そう言えばまだ話してなかったな。何せルクがイルサに質問するか、イルサの興味を満たすのに忙しかったからな。

「従兄弟ですよ。母の兄がリセスのお父さんです。まあ、一緒に生活していましたから本当の兄弟みたいなものですけどね」

俺もこの従兄弟を本当の兄として慕っている。昔は二人でつるんで色々悪さをしては、お祖母様や母上、叔母上に散々叱られたものだ。その中でお祖母様が一番怖かった。

「良いな、良いお兄ちゃんが居て…」

「お前には兄弟は居ないのか？」

この何気なく発したこの質問を後悔した。イルサが忙しく動かしていた食器が止まる。

「双子のお兄ちゃんが居たよ。今は…居ない」

また、こいつに聞いてはいけない事を聞いてしまったか。

「ちょっと待ってくれ！もしかしてその双子の兄って」

レクス兄さんが慌てて言おうとした言葉は途切れる。

甲高い悲鳴。

何事かが起きた。

まるで、津波のように動く人波。

人垣越しに現れた魔熊。ガンデアグリズリ！。

「うわぁ、熊さんまで観光に来るんだ。凄いね、ターシーって！」

「馬鹿言え！そんな訳あるか。止めるぞ」

寒冷地に生息するはずのこの魔物がこんなところに出現する訳が無い。

誰かが連れて来なければ来るはずが無いんだ。

突然の来訪者はガンデアベアーだけでは無かった。

魔狼の群れまで居やがる。

「うわぁ、狼さんまで観光に……」

「少し黙ってろ」

そのお花畑思考は何処から来るんだ。

統率されているだと。ただ、人を襲っているだけでは無い。攻撃を仕掛けて来る人間を中心に襲っているのか？

まあ、良い。ならば、俺たちが的になってやる。

俺が敵陣に深く斬り込む。イルサがやつと事態を重く見出したのか俺に続いて来るのが分かる。

まずはガンデアベアーからだ。俺は中心に切り進む。魔狼の牙と振り下ろされるその豪腕を交わす。

俺の刃がその魔熊に深く突き刺した。

その時、急に俺へ飛び掛かる魔狼。何だ、この動きは！こいつは魔狼らしくない。

そいつをレクス兄さんの魔法が貫いた。助かったよ、兄さん。

周囲を見る。イルサの魔法で魔狼は全滅していた。

これで終わりか。

しかし、俺の足元で動く気配。

先程のおかしな動きをした魔狼。

「リセス！離れて！」

イルサの声が遅ければ危なかった。

俺の頭上に降り注いだ氷の刃。

「魔狼が魔法を使っただと！」

有り得ない。有り得なすぎる。

俺の隣へとやって来たイルサはその理解出来ない事象に答えた。

「あの狼さんはシャプトが乗っ取ってる」

「あのヘブヘルの魔力構成体生物か？魔法が強いとは聞いたことがあったが生物の身体を乗っ取るとは聞いたことが無いぞ」

この俺の疑問に答えたのは魔狼の背中から黒い物質。その蠢く生物は硬そうにも見えて、軟らかそうにも見える。

「この世界の生物がこのように軟弱過ぎて取り付く価値があまり無いだけです。ヘブヘルでは様々な生物に取り付きますよ」

魔狼から完全に分離したシャプト。

「お久しぶりですね、イルサテカ様。魔王の証を頂戴しにヘブヘルより参りました」

そのシャプトは、イルサにはっきりと敵意表明をした。

「これはとっても大変だなあ……」

そのイルサのぼやきは虚しく響いた。

騒ぎ立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 2

魔力構成体生物シャプト。その脅威は計り知れない。あの大奸雄クレサイダを始めとして、異界へブヘルから召喚されたこの生物の犠牲になったこの世界の生物は多い。

魔法のプロ。しかも、その相手の十八番である魔法でしか効果あるダメージを与えられないと言われる。俺が相手にするには厄介過ぎる。

だが、こちらには、同世界出身の魔王様がいる。何とかなるか？

「ウニアだよね？」

「そうでございます。イルサテカ様」

異様な物体であるシャプトに平然と話し掛けるイルサという異様な光景。

シャプトあの悪名高きクレサイダで無いだけましなのだろうか。

「よくやった。ウニロイダよ」

「カイム！」

イルサが叫ぶ。翼の羽音。空に羽ばたく男。俺たちはまんまと炙り出された訳か。

「さて、イルサよ。魔王の証を渡して貰おうか？」

「絶対に嫌だ！」

魔王の証。名前からして相当重要なものらしいな。カイムに渡す訳にはいかないな。

「我が儘を言わずに状況を見る。ウニロイダと私を一人で倒すというのか？」

俺は戦力として頭数に入らないようだ。舐めてくれたものだ。しかしカイムの言っていることは正しい。アレンさんが来るまで時間を稼がなくてはいけない。

セレミスキーを使おう。出し惜しみしている場合ではない。

「使わせんよ」

「リセス！」

カイムが手をこちらに向けた。波動。それだけで俺は後ろへ飛ばされた。数個のセレミスキーが地面に散らばる。くそ、ファイフレの鍵が！

「さあ、どうする？あのペグレーションを持つ男はハシュカレが足を止めている。しばらく来んよ」

万事休すか。

この状況に対してイルサは剣を抜いた。全く馬鹿だな。だが、俺も馬鹿な方だ。唯一、手に残るはヘブヘルの鍵。

「レクス兄さん。時間を稼いでくれ」

俺の安否の確認に近付いて来たレクス兄さんに耳打ちする。

カームがイルサに剣撃を繰り出す。カームが一旦引くとすかさずにウニロイダの氷魔法が飛ぶ。それを交わすイルサ。

イルサももう少しだけ踏ん張れ。

「ウニロ！イルサは我がやる。その小僧の相手をしろ！何か喚び出すぞ！」

気付いたか。俺に向けたウニロの魔法。氷の刃が複数放たれた。

レクス兄さんが俺の前に立ち、魔法防壁で守ってくれた。魔法防壁を突き破った幾つかの氷の刃がレクス兄さんの身体を貫く。それは俺には一つも当たることは無かった。

早くしろ！次はレクス兄さんに防ぐ手段はない。イルサの味方ならば誰でも良い。対価も問わない。

現れる召喚門。開け！

頭上には氷の巨塊。日の光を遮るその影は、レクス兄さんだけでなく俺もペシャンコを意味する。

落ちてくる冷たき物体。

俺たちを濡らす冷雨。

「全くさあゝ。僕は忙しくて苛々してるんだよ。そんな最中にいきなり喚び出されてさあ、殺意のある魔法で歓迎かい？」

召喚門から現れし、男は不機嫌そうに語った。

「あんまり僕を怒らせると、この世界、滅ぼすよ!」

蝙蝠の翼手を黒き長髪の男は、その背中越しに後ろの俺へ吼えた。

「クレサイダ!」

イルサが歓喜の声をあげる。

二度に渡りこの世界の歴史にその名を轟かせた大悪漢は再びこの世界に現れた。

騒ぎ立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 2（後書き）

皆様、大変長らく御待たせしました！

遂に待ちに待ったこの男の登場です！
えっ、誰も待ってない？

ヘブヘルよりパワーアップして帰って来たスーパークレサイダが猛
威を奮う！

『クレサイダの世界征服記』

次話“伝説のスーパークレサイダ登場！”

乞うご期待を！

「次回も見てくれないと世界を滅ぼしちゃうぞ！」

（この番組は天見酒の脳内のみで放送されます）

うん、天見酒一人がテンションただ上がりだね。

騒ぎ立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 3

かつて、残虐非道の行いでこの世界に悪名を響かせた男はイルサを見て言った。

「姫！やはり異界にいらつしたのですか！お怪我はありませんでしたか？野蛮なクーレ人に何かされませんでしたか？ああゝ！お召し物がそんなにも汚れて！」

この男が本当に父上と死闘を繰り広げたあのクレサイダなのだろうか。いや、違うと言って欲しい。

「姫を拐ってくれるとはやってくれるな、クーレ人共が！姫、この世界をぶっ壊すご命令をこのクレサイダに下さいます。必ずやクーレ人どもを一人残さずに…」

「絶対ダメ！今はカйм！」

クレサイダの野望を制してイルサが様子を見ていたカймを指指す。

「クレサイダ、久しぶりだな」

様子を窺っていたカймが丁寧にも挨拶をする。

「カймか…。僕が喚ばれた意味が分かったよ」

クレサイダの雰囲気は急に変わる。この男にとってカймはどういう存在なのだろうか。

「クレサイダよ。我と共に来ないか？共にお前に屈辱を与えたこの世界を滅ぼそうではないか。お前もイルサの魔王の証を持たせて置くのは勿体無いと思わんか？」

カイムの勧誘。確かにクレサイダはこの世界を滅ぼす理由は十分にあるだろう。

まずいな、ここでこいつまで敵に回ってしまったら勝ち目は無い。セレミスキーをもう一度使う余裕も無い。

「カイム、僕は別にどうでも良いのさ、こんな世界。シールテカ様亡き後に遺されたイルサテカ様を守ること。それが僕の全てなんだよ」

だからとクレサイダは続けて言い放つ。

「姫を付け狙う輩は全力で始末させてもらうよ！」

クレサイダの手から放たれる火球。カイムが避けることによって後ろの商店に炎が立ち上る。こいつは半端なく強い。

「フム、流石の忠誠心だな。此方の不利か…。ウニロ、一旦退くぞ」「させると思ってるのぉ？」

カイムがウニロの近くへと舞い降り、そこへクレサイダの炎、遅れてイルサの光球が飛ぶ。発生した強風に煽られて辺りに砂塵が舞った。

「チツ、逃げられたか」

クレサイダが結果を語り舌打ちをする。確かにまた逃がしたのは苦だが、今は逃げてくれて俺としては大変ありがたい。

「イルサ！レクス兄さんを治療してくれ！」

「あつ、うん」

イルサが飛んでやって来る。

「なつ、なあにイ！そのガキ！姫を呼び捨てに！」

クレサイダの大激怒。俺にイルサを様付けにしろと？

「クレサイダ。リセスは友達だから良いの」

イルサはレクス兄さんに手を当てながら平然と言う。俺は魔王に友達と認識されていたらしい。

「と、友達！姫、ダメです。姫に男友達はまだ早いです！おい、リセスとか言うガキ！直ぐに姫から離れる。今後一切付きまとうな！」

イルサの方がヘブヘルに帰らず俺たちに付いて来ているんだ。その言い種は気に食わん。

「俺は別にイルサに付きまとは…。イルサ、何してる？」

レクス兄さんの治療を終えたイルサは俺の右腕を両手で引っ張る。捨てられた子猫のような眼を向けて俺に言う。

「リセス、どうか行かないよね？側に居てくれるよね？」

「どこにも行かん…」

その至近距離からの視線に俺は参ってしまった。

「うん！ありがとう、リセス！」

だから手を離せ。後、無邪気に笑うな。少し照れるだろう。

「ハハハ…、リセス君とやら、後で姫抜きで男同士の話し合いをじっくりしよっか？」

急に馴れ馴れしくなり、俺の肩に手を置きにつこり笑うクレサイダ。クツ、これが世界を滅亡に追い込んだ邪悪なる強圧感か？どんな誤解をしているか分からんがその誘いは絶対に断る。お前には敵いそうに無い。色んな意味でだ。

「リセス君、レクス、無事かい？」

ハシユカレも逃げたのか、アレンさんが駆けつけて来た。

「アレン・レイフォートか！あのチビ介がでかくなっちゃって。何で君が居るのさ。姫にちゃん付けとは相変わらず良い度胸だねえ」

浮かない顔をしてアレンさんが立ち止まる。しまった。かつてのこの宿敵同士が出会う。頼むから流血沙汰はやめてくれ。

「何処かでお会いしましたか？見たところイルサちゃんと同族のようですけど」

アレンさんに見覚えは無いようだ。

「隊長。この人はクレサイダだそうです」

レクス兄さんが報告をする。アレンの眼は大きく開かれた。いつかはバレルだろうが今は言うべきで無いのではないか。不安が過る。

「クレサイダ…変わったね、色々と。特に身体がうねうねじゃなくなっただね」

「これだからクレーは。僕はシャプトだよ。この身体を乗っ取ったに決まってるじゃないか。最も此方の世界じゃあ微弱な生物しか居ないから願っただけだね」

アレンさんは旧友に話し掛ける言い方だった。クレサイダも特に敵意は無いらしい。

「とにかくここは目立つから別の場所に行こう」

危険が去り、人が集まって来た。注目的になるのはクレサイダも避けたいのか素直に俺たちに付いてきた。イルサやクレサイダにその目立つ翼を上着で隠してもらい移動する。

俺は勇者とその宿敵の再会にしては緊張感が無く拍子抜けだ。

騒ぎ立つ貿易都市、そして奸雄再び現れる 3 (後書き)

昨日更新出来なかった分今日は二話更新するぞー！

皆様、ご感想を下さりありがとうございます。

お陰様で天見酒はやる気がアップしております。

船に揺られる想い達は 1

このままターシーに残るといふ行為が及ぼす被害を考慮した上で、騎士団海隊の軍隊船にてターシーを立つ。

元々二十人の乗組員しか居ないこの船で、夕食時にはまだ早いこの時間帯で貸切状態となる食堂室。

俺やアレンさんが仕切る第3遊撃隊の面々は、ご機嫌なイルサが一人で夕食に舌鼓をするのを無視して、専らクレサイダにカイムの召喚について話す。

「厄介だねえ。もう一度聞くけどオシリスの鍵…セレミスキーはリセスが全部持つてるんだよね？」

クレサイダの問い掛けに慎重に頷く。こいつにセレミスキーを持たせる訳にはいかない。

「別に取り上げたりしないよ。しかし、厄介だねえ」

俺のよそよそしい仕草を読んで、また厄介と繰り返す。

「何がそんなに厄介なのか教えてくれないですか？」

勇者が奸雄に腰を低くして教えを乞う。なんともおかしな光景だ。アレンさんの人の良さが滲み出ている。

「少しは自分で考えなよ」

それに対してクレサイダは意地が悪い。

「クレサイダ。お願い、教えて」

「はっ、姫の頼みとあらば！」

クレサイダはイルサを使えば容易く操れるな……。奸雄の最大の弱点を得たり。魔王と一緒にの方が安全とはこれ如何に。

「君たちに分かりやすく言うとはでリンセン・ナールスは魔王を召喚出来たのかだよ」

何気なく言ったクレサイダの言葉に訳が分からなくなった一瞬。

「待て、リンセン・ナールスは魔王を送り還したの間違いだろう！」

すぐにその言葉の意味を無理に飲み込み訂正する。

「ダァ……。まだそういうことになってるの？アレン、どうなってるの？」

クレサイダに話を振られたアレンさん。俯くその顔はクレサイダの話を肯定していた。

信じられなかった。でも、父上の語った“愚かで偉大なる英雄”のリンセン・ナールスに対する解釈が、今やっと理解出来た気がした。

「とにかく今はナールスさんが魔王を召喚した方法だよねえ？」

ルクが俺の一大衝撃を簡単に片付けてくれる。

「どうしても良いけどさあ。ルク・レッドラートって言ったっけ？出来ればその顔でその喋り方止めてくれる？あの女を思い出して嫌なんだけど」

「ウワゝ、女の子になんてことを。これが私の母から受け継いだチャームポイント何です」

俺としてはあの聖女様のようなおしとやかな性格も受け継いで欲しかった。

「それで、ナールスの魔王を召喚した方法は何です？」

レクス兄さんが話の脱線を止めた。クレサイダも神妙な顔付きになる。

「それは言わないよ。前回でハシユカレに洩らして今回の結果だからね。信用出来ない人間に余計な事は言いたくないね。君たちにヒントを与えるのはここまでだ」

確かにクレサイダの判断は正しいものかもしれない。知らない方が良い事はある。

「しかし、それでは俺たちにこれからの対策を立てようが無いじゃないか」

今まで黙って聞いてきた第3遊撃隊の銃士テドさんが口を挟む。テドさんの言うことも一理ある。

「僕は君たちの対策に期待なんかしてないよ。君たちはこの世界を守りたいなら、僕の命令に黙って従えば良いのさ。余計な事はしな

くて良いよ」

「クレサイダ！そんな事を言ったらダメ！皆で協力するの。皆に誤って！」

イルサが食事から手を離して叱る。

「姫、これはもうこいつらに頼れる問題ではないのです」

それだけ言つと周囲に険悪な空気を残してクレサイダは出て行ってしまう。まるで親に叱られた子供だな。

「皆、ごめんなさい。でも、クレサイダは本当は良い人だから…」

「お前が気にする事ではない」

イルサの弁明は大した役に立たないだろう。

少しクレサイダを買いかぶり過ぎていたか…。

船に揺られる想い達は 1（後書き）

やっと少しシリアス気味になってきたでしょうか？

次回もちよいシリアス気味。名前だけ登場していたあの人が活躍します。気付いている人いるかな？

船に揺られる想い達は 2

あいつらは全く頭にくるね。姫を手懷けて僕を利用しようとするんだから。

姫も姫だ。クーレの人間共と協力するだなんて、もう少し魔王としての自覚を持って頂きたい。どうしてあそこまで懐疑心を知らないのか？

あのリセス・ネイストは特に姫の信頼を得たようで気にいらないな。あの正義の味方を気取るライシス・ネイストも気にいらなかったがそれに増して気にいらない。

こんな下らない人間の事を考えるのは止めよう。

ハシユカレは恐らく“あれ”を手に入れてカймを喚び、今、“あれ”はカймの手の中にある。これは実にまずいことだ。とにかく“あれ”を奪わないといけない。“あれ”がカймの手にあつて、姫の持つ魔王の証を狙うという事は、おそらくシーベルエンスの城にあるだろうこの世界の“欠片”も狙つて来るだろう。どちらも手に入れられたら厄介だ。

カйм達はおそらくシーベルエンスの城にあるだろうこの世界の“欠片”も狙つて来るだろう。どちらも手に入れられたら厄介だ。

それだけは何としても防がないと…。

「クレサイダさん、少し宜しいですか？」

「あまり宜しく無いね。僕は今とっても機嫌が悪いんだ」

振り返ってその女に嫌味たっぷりに言っちゃった。

「少しだけお話をしたくて」

「さっきの奴みたいになぶざけた発言はするなよ」

確かアレンの部隊のミシャとか呼ばれていたか？僕は君と話す気は無いんだけどね。

「私の父を知っていますか？」

微笑を浮かべながら言う彼女の言葉は僕の予想を遥か彼方に置き去りにしたものだった。馬鹿にしているのか？

「そんなもの知るわけ無いじゃないか」

僅かな笑み、哀しみにも取れる表情を変えず彼女は続けた。

「私の名前は、ミシャ・ラベルク。もう一度聞きます。私の父を知っていますか？」

「知ってる。ケルック・ラベルク」

そういうことか。

「僕が殺した男だ」

クーレで殺した人間は何人もいた。そして、そいつらのことなんか忘れた。只一人、この男を除いては…。

「それで君は父の敵を討とうっていうのかい？」

やる気ならば遠慮なくかかって来なよ。父と同じく葬ってあげるよ。

「いえ、そんな事はしません。私は父が敵わなかった人に勝てませんよ」

その女はまだ表情を変えずに言った。その微妙な笑いはとても僕の気分を害していると知らずに。

「それじゃあなんなのさ？」

この僕に懺悔でもしろってことか？ああ、僕は悪いよ、とってもね。

「父の事を聞きたいんです。私は当時4歳で殆んど記憶が薄れてしまってます」

父を殺した男に父の事を聞きたい？全く訳が分からないね。

「父は強かった、ですよ」

君の父親は弱かったよ。どれだけそう言ってしまったか。そうすれば僕の気はさぞかし晴れただろう。

「強かったよ。この世界であんなに強い奴には出会わなかった」

彼女の眼を真剣に見ている馬鹿な僕がいた。

「ありがとうございます」

それだけ言うと彼女は走り去ってしまった。

何でお礼なんか言うのさ。罵倒しろよ！僕は僕の都合でお前の父親を殺したんだぞ。僕は悪人だ、大悪人だぞ！

そうだ。僕が何でこんな事を考えなきゃいけない。ただ一人を殺しただけじゃないか！今まで何人も身勝手に殺してきた最低最悪な僕にはどうでも良いことだろ！

クソ、何でお礼なんて言うんだ。お陰でその僕には綺麗過ぎる音が耳に残ってしまったじゃないか！

僕は悪人で良いんだよ！何なんだよ、あの女は！

船に揺られる想い達は 2（後書き）

クレサイド視点。

中々難しかったツス。でも中々面白かったツス。

700才の青年よ、悩みたまえ！

船に揺られる想い達は 3

軍船内の部屋。その狭き部屋は二段ベッド二つに支配されて、寝る以外に考えを巡らすことしか出来ない。

リンセン・ナールスカ。あまりにも愚かな英雄だな。魔王を召喚して魔王を還して英雄になった人間。本当に愚かで偉大なる英雄だ。

父上はこのことを知っていたのだろうか？ いや、あの人は知っていたのだろうな。知っていて尚俺にリセスと名付けたのだろうな。何故何だ！何故そんな人間の名前を俺に付けたんだ。

父上は俺が魔王を喚び出す事を予言していたということなのか？

“俺が持つてももう意味が無いから、お前が持つとけよ。お前が己の正義のために使いな”

十五になり、俺がシーベル工騎士団に入る前夜に父が言った言葉。そのままの意味に理解していたおめでたい俺。全く笑えることだな。父上がセレミスキーを譲ったのは父上が見た俺の運命だったのだな。

くそ、俺は父上に比べると何れ程愚かな人間なんだ！どれだけあの人は俺の高みに立っているんだ。

あの人に勝ちたい。勝ちたいんだ！

俺はカタナに手に取り、ベッドから身を起こす。

「どうしたんだい。リセス君？」

俺の横のベッドからアレンさんが身体を持ち上げる。

「寝付け無いので少し剣を振って来ようかと思ひまして」

実際は己の身体をとことん痛み付けたい気分だった。そして、そのあとに泥のように眠ってしまいたい。

アレンさんの返事を奪ったのは控えめなノックだった。アレンさんの返事はそちらのノックにされた。

「あつ、リセス」

「何だ」

ベッドから降りた俺を見て言うイルサに俺は少々冷たい対応をしてしまった。

「えつとね。リセスにだけ伝えたい事があるんだ。甲板で待ってるから来てね！」

イルサが真剣な顔で早口でそう言い放ち扉を閉めて立ち去ってしまった。

おい、何だそれは…。

俺よ、落ち着いて考えろよ。夜中に二人きりで俺だけに伝えたい事と言ってもそれは無いぞ。相手はあのイルサだぞ。確かに表情や仕草が可愛いと思ってしまうこともあるがな、それは妹を見る兄の視線のようなものであってだな、決してそのような対象としてでは無くてだな。俺はイルサとそういうような関係になるのは少し困る訳でだな。

「リセス君。ライ兄に“そういう時には男はどつしりと構えるんだ”って昔教えてもらったよ」

アレンさん、それはどういいう時の話ですか？今は断じて父上の言うそういう時では無い…、だろう。

「リセス。彼女も覚悟を決めたんだ。彼女の想いをしっかりと受け止めてあげるんだよ。」

アレンさんの上のベッドから真面目な顔を出すレクス兄さん。

俺はレクス兄さんの言葉を見殺しして部屋を出た。イルサがどんな覚悟を決めたかは知らない。俺には全く予測不可能だ。

甲板に出るとイルサは船縁で海を眺めていた。月明かりに映える短き赤髪は海風に流されそよいで、落ち着きなく背中の翼をゆっくり上下させている。

いつもはちんちくりんな行動ばかりしている癖にこつこつにこつこつという雰囲気を出している。女は卑怯だと思う。

「待たせたか？」

待たせた筈はない。イルサの後を直ぐに追ったのだから。俺は何を言ってるんだ。こつこつという時はどつしり構えなければ。いや、何を考えているスタンダードで良いんだ。

「えっとね。少し待ったかな？」

確かに僅かに待たせただろうな。俺がここに直行する僅かな時間な。

こいつは真面目に言っているから質が悪い。

「リセスは本当にレクスさんと仲が良いね！」

「あ、ああ、そうだな」

いきなり無理に話を反らしやがった。声の大きさに比例して翼の動きが大きくなってるぞ。その動揺するイルサの姿は、少し可愛く見えて俺にも動揺が伝染していく。

「ソッ、それで俺に伝えたい事とは何だ」

落ち着け、リセス・ネイスト。大したことでは無いんだ。どっしりと構えるんだ。

イルサの翼の動きが止まる。時間が止まったように感じる。波音だけが時間が動いていることの証明だった。

息苦しい時間が僅かに過ぎて、ようやくイルサが意を決して口を開いた。

「カイムの事何だけど…」

何？カイムの事？

いや、俺の予想通りだ。決して浮わついた話である筈がないではないか。

しかし、何故か俺の膨れあがった気持ちが急激に萎んでいた。

その俺の萎みきった気持ちに、イルサは次の言葉で更なる追い打ちをかけた。

「昼間、私に双子の兄がいたって言ったよね」

イルサの赤く光る涙目に俺の気持ちはギチギチに締め付けられた。もう次の言葉はいらない。だから言っな！お前が辛くなる。クソ、イルサの両親を殺したアイツは…

「私のお兄ちゃんなんだ。カイクは」

イルサ、嘲るか泣くかどちらかにしろよ。

俺がこついつ時にどう対応すれば良いのか分からないだろう。

船に揺られる想い達は 3（後書き）

しまったなァ。『勇冒』の最後に次回作紹介の『夢の続きは』で
ネタバレしちまったからな。

今度から調子に乗らんように気を付けないとなあ。

読者皆様申し訳ない、もつと腕を磨きます。

ですから、感想お願いします。

そして、『魔冒』のお気に入り登録50件越えました。
本当にありがとうございます。

シーベルエンスに灯る戦火 1

カタナを振るう時は余計な事を考えるな全身とカタナのみに集中しろ。

母上から俺の幼少の頃から叩き込まれたの教え。

修行不足な俺にはそうは出来ない。

「動きが鈍いね」

自分自身でも分かっていることだが、改めて言われてしまうと落ち込む。せっかく久々にアレンさんが稽古を付けて下さってるいると言うのに俺は…。

同じく甲板でルクと話しているイルサ。

イルサは普段通りだ。ルクの話すこの世界についての話を無邪気に聞いている。

そうなのだ。アイツにとっては兄はもう居ないんだ。その覚悟を持って剣を握っているんだ。

ならば、何故俺に話した？イルサが覚悟を本当に持っているのならば…。

「そろそろシーベルエンスが見えて来る頃だから稽古は終わりにしよう」

「はい。ありがとうございました」

稽古の打ち切りを宣告したアレンさんに身の入っていない稽古に付

き合わせてしまった後悔の念が大きかった。
アレンさんが溜め息を吐く。

「リセス。人の正義に頼り過ぎるといけないよ。君の正義は君だけの正義だからね。それを信じて剣を振るうしか無いんだ」

「俺の正義ですか？」

「そう、自分の信じる正義を信じて行動する。それが僕の正義だよ」
正義。昨日まではあつたはずだ。

「他の人が悪だと言おうと自分が信じる事が正義なんだよ。逆にそれ自分の中以外の正義なんて君の中には存在しないんだから」

それだけ言つとアレンさんはルク達に降船の準備をするように伝えるにいった。

俺の正義か…。イルサはどんな正義を持っているのだろうか？

「ほら、イルちゃん。あれがシーベルエンスだよ。凄いでしょ…」

ルクの示す方角にはシーベルエ山脈に囲まれた大都市シーベルエンス。

その我が国の誇る首都を見てのイルサの感想がこれだ。

「ウワァ〜、凄いね！シーベルエンスではみんなで焚き火するんだ」

イルサの言う能天気な事態ならば大変良かった。しかし都市内で無許可での焚き火が禁じられているシーベルエンスで、複数箇所に昇る煙は別のことを意味しているとしたか考えられない。

「船長、急いで下さい！」

アレンさんの櫓が飛ぶ。

「あっちゃ。やっぱりこちらの方が早かったかあ」

何時からいたのか。クレサイダが俺の隣でばやいた。その弦きは俺にも聞こえた。

「お前はこうなることが予想出来ていたのか。何故予め俺たちに教えなかった！」

俺は激怒していた。あまりにも簡単に言ってくれたこいつに。俺たちに何も言わないこいつに。そして今まで溜まっていた俺の鬱憤をこいつに。

「昨晚も言ったよね。どうして僕が君たちに教える必要がある？君たちは僕の目的の為に利用されてれば良いんだよ」

クレサイダの口元は笑いながらも目元は笑っていなかった。こいつは本気でほざいてやがる。

「ふざけるなよ！お前に何故利用されなければならない！」

「ふざけてるのはそつちだろ？君たちの方こそ僕や姫を利用する気満々の癖に！」

手がカタナに届きそうだ。俺は別にお前やイルサを利用する気など毛頭無い。という自分への嘘が怒りへ変わる。利用していないと言いきれない己が悔しい。

「二人ともそこまでだ。今は二人で争ってる場合で無いのは分かるよね」

アレンさんは優しすぎる。貴方はこのままクレサイダに利用されると言っんですか？それが貴方の正義だと？

炎上するシーベルエンスは目前に迫っていた。

シーベルエンスに灯る戦火 2

シーベルエンスの空を舞うドラゴン。

シーベルエンス港に到着後のアレンさんの即断。

「第3遊撃隊はドラゴンを撃退する！リセス、ルク、イルサ、クレサイダは取り敢えず王城に向かって！」

「僕は君の命令に従う気は無いね。勝手にさせて貰うよ」

それだけ言つと翼を広げてクレサイダが飛び立つ。

「クレサイダ！」

「勝手に飛んでると敵と誤認されるよ！」

イルサの叫びとアレンさんの忠告は宙に響くだけだった。俺に取つては知つた事では無い。

勝手にすれば良い！

「ルク、イルサ、王城に行くぞ」

第3遊撃隊が去つた後にアレンさんの命令を遂行すべく俺が二人に言う。

「でも、クレサイダが…」

「あいつが俺たちを無視した。こちらが心配することではない」

イルサを諭すが効果は薄かったようだ。

イルサの腕を無理矢理引つ張る。何も言わずにその俺の行為に従うイルサ。俺にその顔を見ることは出来ない。見たくは無い。クレサイダの心配をしているだろうイルサの顔を。

走るしかない。アレンさんの命令通りに。途中で街中で出会ったドラゴンを見殺した。民衆を襲うドラゴンを見殺してしまった。でも、今の俺はシールス城に向かうしかない。それが俺のやるべきことだ。アレンさんの命令に従った。俺は俺の正義に従ったんだ。それの何が悪い！少なくともクレサイダよりはましだ！

シールス城の門兵が横たわる。既に生きていなかった。騎士団員達の遺体が多い。ルクやイルサにこの光景は酷だったようだ。俺だって辛い。

城門をくぐった衆会場。そいつらはそこにいた。地に倒れ伏す翼をもがれたクレサイダと共にそこにいた。俺たちは間に合わなかったのか。いや、城内にはまだ入って居ない。

「無様だな、クレサイダ。流石の貴様もこの戦力差では勝てまい。貴様一人で向かって来るとはな、あのクレサイダも甘くなったものだな」

カイルの言葉に空から墜ちたばかりであろう血を流したクレサイダは立ち上がりながら言う。

「僕は昔600年も一人で居たからね。一人の方が動きやすいんだよ。どんな卑怯な手を使っても誰にも咎められないしね」

「やはり、クレサイダよ。お前は下衆だな。大きを知りながら小に拘る。貴様は魔王に拘り過ぎだ。そんな小さきことの為に己の手を汚すか？時間の無駄だ、そこを退け！」

「ふざけたことを抜かすなよ！ヘドが出るね！」

600年、その長い年月を異界の地で独りで過ごした男は語った。悪を。

「姫を守る為なら僕はどんな汚い手だって使うね。例え、それが誰に責められることになってもね」

「我等の高尚なる目的を知らながらまだそのようなことをほざくか」

「高尚！全く下らないね。僕は悪人だよ。僕は僕のやりたいことをやるさ！君と同じでね！だから、君たちを全力で消させて貰うよ」

クレサイダの横から迫る刃。動く俺。

俺の信じる正義とやらはクレサイダに論破された。それだけのことだ。俺を動かしたのは。

利用する者

「避ける！」

俺が走りながらクレサイダに向かって放つ直線に雷魔法。

クレサイダが俺の突然の登場に反応が遅れるも避ける。クレサイダを闇討ちしようとしていた顔傷も止まる。

間に合う。クレサイダと顔傷の間に駆け込む。再び刃が振るわれるその間に。間に合わった。俺の肩に走る裂傷。しかし、クレサイダには刃を通さなかった。

覚悟したよりは軽傷だ。カタナを振るうには支障をきたさない。顔傷の縦薙ぎを止めた。

「何をやってるのさ、馬鹿か君は！この身体は僕の本体じゃない。君と違って剣じゃ僕は死なないんだよ」

「そうだったな」

そんなことは忘れていた。顔傷が俺から距離を取る。クレサイダの本体と同じ姿だろうウニロから氷魔法が放たれた。それをクレサイダは防ぐ。

「クレサイダ。すまない。俺が甘過ぎた」

「今頃気付いたの？君は本当に馬鹿だね」

カームが向かって来る。ハシユカレも動き出した。イルサがカームの前に立ちはだかり、ルクがハシユカレを牽制射撃する。ウニロとクレサイダの魔法がぶつかる。

俺と顔傷は牽制状態。下手には動けん。口以外はな。

「クレサイダ。どうすれば良い。こいつらの狙いは何だ？」

俺の背後に居るだろうクレサイダに話し掛ける。

「僕に利用されたく無いんじゃない？無かったの。僕が言うと思ってるなら、甘いね君は」

ああ、俺が甘過ぎなのは分かった。だから言う。

「クレサイダ！俺を利用しろ。お前に従ってやる」

「それが甘ちゃんだって言ってたんだよ！」

クレサイダが吼えながらウニロへと魔法を放つ。その通りだ。俺は甘ちゃんだな。でも、少しは分かったつもりだ。

「クレサイダ！俺はお前を徹底的に利用する。だからお前は俺を徹底的に利用しろ！」

それが俺の出したこいつへの答え。利用されることも利用することも嫌悪を示していた俺の答え。

「フン、少しは甘ちゃんから抜けたじゃないか、リセス？でもね、

君が僕を利用する価値の方が大きいよ?」

からかうような声が背後から聞こえる。まあその通り。クレサイダにとっては俺を利用する価値が低い以上平等ではない。

「だから、せいぜい僕の足を引っ張らない程度に頑張りな」

クレサイダの言い種に鼻で笑ってしまった。少しはこの大悪党に認められたと自惚れて良いのだろうか。

「カイムの狙いはシーベル工城に在ると思われる物だ! 詳しい説明は後。リセス、こいつらを城に入れるなよ」

「了解した!」

誰の命令だろうが、今は構わない。出来ることをやる。不思議と俺にやる気と心強さが満ちて来る。

「リセスはその無愛想ニンジャの相手してて、ウニロとカイムは僕と姫で抑える。ハシユカレ中尉は…ルクに任せておけばいいから!」

「了解した!」

「クレサイダ、しつかりね!」

何故かイルサの声が弾んでいるように聞こえる。何故か俺の気分が弾んでいるせいなのか。

「ちよつとオー、私はヤバイよ〜う、私は後方支援だよ。早く何とかしてよー」

ルクに魔鎗使いの相手は厳しいか？ルクに視線を巡らす。

何だ？ハシユカレの動きがおかしい。前対峙した時に比べて魔鎗の動きに鈍りがある。まるで手を抜いているかのような……調子がおかしいのか？

まあ、これならば避けられ無くはない、ルクは大丈夫だろう。

イルサはカイムに接近戦を許さない。お得意の魔法によって牽制を続ける。少し心配だ。まるで止めを差さないようにしているよう……。

クレサイダは任せる。こいつの心配は無駄だ。それくらいならば自分の心配をする。

顔傷の男。前回のような不意討ちは効かない。しかもこちらは肩にハンディを負っている。それでもこいつぐらいは俺が抑えねばな。

「リセス！危ない！」

イルサの声。どこからか風魔法が飛んできていた。反射で何とか避ける。もう一人居た。ハシユカレ達と居たあの女。

その隙に俺の脇をすり抜け、城へと進む顔傷の男。くそ、追い付けるか？

しかし俺が追い付く必要も無かった。

ここより随分北の地方にいるはずのその人は当然のように突然に現れた。

「また貴様は邪魔をするのか！女あ！」

その鋭利なる技に阻まれた顔傷の男は吠える。

何故、この場にこの人が居るのか？そんな疑問が浮かばない程にその人らしい登場に思えた。その人の振るうカタナは綺麗過ぎるからだ。

その人が居るからには勝てる気がした。絶対にあの人が居るだろうからだ。負けることなど有り得ないあの人がシーベルエンスに居る。

利用する者（後書き）

さて、ここからあの人達のターンです。次回だけね。

シーベルエンスに慈雨は降る

銃声一つ。赤い線がクレサイダの上級魔法ですら防いでいたウニロの魔術防壁を貫く。そして赤い線が炎の道へと変わる。

「アララ、あれ、結構痛いんだよねえ」

その豪火の光景に啞然とする俺達の背後でクレサイダが敵に同情を送る。

「人の職場で暴れんで貰いたいな」

「ウワァ〜出たよ。しかも美味しいところを持つてくしさあ」

姿を現すはシーベルエ総騎士団長。この人が愛用のライフルを使うところを俺は初めて見た。そしてクレサイダがブツブツ煩い。

「やってくれるものだなクーレ人。少々舐めて居たようだ」

「おい！ハシユカレ！俺の娘を怪我させる気か。殺すぞ」

「やっと出てきたか、ジンサ・レッドライト！貴様は絶対に殺す！」

カイムの台詞はジンさんに届かなかったようだ。ハシユカレとジンさんには浅からぬ因縁があるらしい。いや、ジンさんは親バカなだけだ。

「マスナー、また何かを喚べ」

イルサの魔法を避けながらカイムが名前すら判明して居なかった女

に命令をする。そのマスナーという女性が鉄で出来てらしき白き棒を胸元へと持ってくる。あれは魔具なのか？

「リセス！あれだ！あれを奪え！」

クレサイダの命令。俺が走る。カイルが俺の前へ周り込む。チツ、カイルとイルサの間に入ってしまったか。イルサの魔法を俺に向けて撃つしかない。ルクの拳銃が火を吹く。しかし、ハシユカレがそれを弾く。

母上は顔傷を止めなくてはいけない。

「マスナー、上だ！避ける！」

カイルの叫び。空を 流れる川。それは枝分かれをして俺たちの敵へと向かう。

只の水。しかし勢いに乗った大量の水は十分に武器となる。水流に翻弄され流されるカイル達。流される魔法で拡声された声。

『諸君、まずは武装解除をして話し合おうじゃないか。うん、出来ればそうしてくれ。俺も訳が分からん』

国王の演説用テラスに立つ男。

「ライシス・ネイストオー！貴様アゝ！」

『ゲツ、ヒヨロメガネが居やがる。テメエ、まだ下らんことやってのかよ。それよりテメエら、シーベルエンスには1000年以上の歴史を生きて来た歴史的建造物があるんだぞ！それを焼くたあ、お

前ら天罰喰らつとけ！』

父上が本気で怒っている。あんなに怒ったのを見たのは俺とレクス兄さんが父上と旅行で行ったルンバットの遺跡に悪戯をしようとした時以来だ。

おそらく心優しき父上は歴史の残るこの街の人々を傷付けられたことにお怒りなのだろう。

「チツ、あの男。クーレ人にしてフィフレの精霊魔法を使うとは、あいつは化け物か」

俺とつばぜり合いをするカイムがふざけたことを言う。父上が化け物？フィフレの精霊魔法を使う。こいつは全然父上のことを分かっていないようだ。

父上は全知全能の神に最も近き頭脳を持つと言われる男だぞ！異世界の魔法を行使するぐらい父上にとっては朝飯前なのだ。

「今回は退かせてもらった方が良いようだな」

カイムが俺のカタナから剣を離す。また逃がす訳にはいかない。しかし、こいつの魔法は舐められ無かった。また、手を翳すだけ。俺が宙を舞って地面へ叩き付けられる。

「リセス！」

様々な人の声が重なる。父上、母上、イルサ。最後はクレサイダなのか？大丈夫だ、殺傷力のある魔法では無かった。

素早く体制を立ち直す俺の目には召喚門が移った。

「クレサイダよ。我等は先に他の世界の欠片を手に入れることにした。出来るならば追ってこい。魔王の証とこの世界の欠片を持つてな」

カイル達は召喚門へと消えた。カイル達は異世界に逃げたらしい。終わったのか？いや、終わりでは無いだろうな。

『取り敢えずリセス、大丈夫か？』

急に静まった周囲に父上の声が響く。母上とイルサが俺の側に寄ってくる。

『まあ、大丈夫そうだし、取り敢えず火事を消すために雨を降らすか？』

何処かでカイルの鳴き声が聞こえた気がした。

土砂降りの雨がシーベルエンスに灯る炎を消していく。

「凄いな、あの人！雨を降らせる魔法が使えるなんて！」

イルサの興奮している。俺もその感想には賛成する。

「違いますよ。姫。あいつはただフィフレからコーレイヌを」

「当たり前だ。あの人はこの世界を代表する魔導師であり、天道の賢者と呼ばれる人だぞ。天候を操るなど訳無いだろう！」

クレサイダの台詞に被ってしまったが何か言いたかったのか？

クレサイダも母上も何故だか微妙な笑みを浮かべている。俺は何か間違ったことを言ったのだろうか？

シーベルエンスに慈雨は降る（後書き）

シリ阿斯崩壊！

ライシスが全て悪いんだ！

ごめんなさい。天見酒のせいです。

次回はやっとこの物語の本題に近づきます。

クレサイダ先生の異世界講座 1

シーベル工城三階騎士団会議室。様々な事後処理に追われ、昼食でイルサの腹の虫が収まった後にここに集まり、クレサイダの説明が始まる。四半刻は経っただろうか。

「固すぎる頭脳でも理解出来たかい、ライシス君？」

「ああ、良く分かった。つまりあの黒いウニヨウニヨの塊だったクレサイダが身体をパクってもム力つく口調は相変わらずって事と、そこで腹を満たして舟を漕いでる魔王に到底見えない嬢ちゃんが現代魔王様だって事は何と無く理解した」

「ライシス、言っておくけど姫を侮辱するなら殺すよ。それともまた僕とやる気かい？」

「やらねえよ。クレサイダ、こっちにやあアレンが付いてるだぜ。」

「下手な発言は止めておけよ」

「ライ兄、クレサイダさんは今回は敵じゃないから」

この部屋を一撃で吹き飛ばす程のクレサイダの実力を知りながら、微動だにせず、言葉だけで制する父上。なるほど、アレンさんが居ればクレサイダごときには父上程の人物が自ら手を下す必要は無いと言うことですね。

本当はかつての宿敵と戦いたい気持ちを隠しているようですが、手の震えという武者震いがその闘争心を俺に見せつけてくれる。

しかし、今はクレサイダだけが重要な情報源だと言うことを理解してくれているらしい。だが、睨むクレサイダにそれを受け流す父上。下手をすれば一触即発だ。

「ライシスさん。今はクレサイダさんは味方ですから落ち着いて下さい。クレサイダさんもすいませんでした。お願いしますからお互いの為に話し合いましょう」

「君は相変わらずのお人好しだね」

ジンさんがエルさんをこの場に呼んでおいてくれて良かった。仲裁には一番向いている人だ。

「それで、そのカймとやらが僕の愛すべき国民達を傷付けた理由は何だい？この国を奪うとかでは無いのだろう？」

いつも惚けている国王陛下も今日は流石に真面目でいらしゃるようだ。

「前もアレン君達に言ったけど、僕は君たちにある程度しか話さないよ」

俺としてはその点はもうこいつに任せるしかない。重要な話のようなのでイルサを揺すり起こす。

「リセスウ。私はもう食べれないよ」

誰も食わさん、もう食わんで良い。話を聞け、重大関係者。

「その娘、本当に魔王なのか？」

俺にも分かりません。

流石の父上もこの魔王様は理解の範疇を壮絶に越えているらしい。

「姫、シャキとしてください。一応、一国の王の前ですよ」

クレサイダ、お前は何故こいつに仕え続ける事が出来るのか分からん。

「まあとにかく。クレサイダ、カイクとか言う奴はこの城に用が有ったんだろ？何を狙っていたんだ？」

父上が質問を担当しているようだ。国王陛下、ロンタル執政官長、騎士団総長などの国の重役達を差し置いて話を進めるとは、防国の賢者たる父上にはやはり凄い権威があるのだろう。

「正確にはこの城にあると思われる物だよ。この世界の“欠片”だ」

「何なんだ。それは？」

俺が一番聞きたかったことについて勝手に発言してしまう。母上が顔をしかめる。まずい、後で恐らく言葉使いが悪いと叱られる。

「シーベル工国王、ここにこの世界の欠片はあるかい？」

「うーん。聞いた事が無いなあ。ロンタル、聞いたことあるか？どう言う物だ？」

ロンタル執政官長も首を横に振る。クレサイダが僅かに悩んだ。

「こいつらにこの世界の欠片を任せた方が早いかな…。姫、魔王の証をお出し下さい」

「うん、分かった。あれ、此方のポケットだっけ。あれ、無いなあ」

おいおい。せつかくの皆さんの興味が急速に失われていくぞ。

「姫！あれほど魔王の証は大切に持っていて下さいと」

「アツ、これだ、あつたあ！」

魔王の証は机の上に無造作に置かれる。イルサの扱いに魔王の証という有り難そうな名前の効果は失われていた。もつと大事に良くは知らんがもつと大事に扱うべきものじゃないのか？

「ガラス玉の欠片？」

何故かここに居る…ジンさんにおねだりしてここに居るのだろウルクが首を傾げながら簡潔に魔王の証を表してくれた。その構成物質は決してガラスでは無いだろうが球体の一部から抜き取ったような湾曲した紫色に透き通る破片。

「ガラス玉って、これはヘブヘルの欠片で魔王の証だよ。まあ、良いか。とにかくこれは観察世界アールから各世界の管理者に相応しい人物に渡されている筈だ」

観察世界アール。天神界アールのことか？

「これには各々に強い能力を持っている。所持者がその世界を統一するような能力を。何かそんな物は無いかい？」

確かにそいつはカーム達が狙うのは頷ける。そしてシーベル工が所

持していると思うのも頷ける。

「いや、僕は知らないよ」

しかしあつさりと陛下は否定する。代わりに心当たりが有ったのはこの親子だった。

「ねえ、それって色違いだったりするう。それなら知ってるんだけど、ねえ、お父様？」

ルクの笑顔の誘導により視線がジンさんに集まる。

「出来ればクレサイドに見せたくは無かったが、相手の手の内を見て、自分の手の内を曝さんのも卑怯か」

ジンさんが組んでいた腕をほどき、上着のジャケットから小箱を取り出す。

「家の先祖が初代シーベル工国王から戴いたものレッドライト家の家宝だ。成人に伴い、これに触れて“レッドライトの眼”を授かる仕来りがある」

その世界の欠片は透き通る赤だった。

クレサイダ先生の異世界講座 1（後書き）

もう一話説明つぼいを行います。

クレサイダ先生の異世界講座 2

またしても、この場に陰悪な雰囲気へと変わった。クレサイダの遠慮無き一言によってだ。

「その世界の欠片を僕に渡してもらえないかい？」

「それは断る」

ジンさんの反応が当然だな。そう簡単に渡せるものではないだろう。

「クレサイダさんよお、お前がこれからどうするか次第だろ。俺たちの協力を得たいなら、もう少しこの件についての情報を出せよ。お前らはこれからどうする気だ？」

父上の場を取り成す質問。俺もそれは気になっている。

「異世界に行ったカイクを追うに決まってるだろう？」

「そんな事が出来るの？」

ルクは興味津々だ。こいつは出来ると言えばついて行く気だ。

「出来るさ。セレミスキーはそもそも異世界に渡る鍵だよ。それがあれば僕なら出来るよ」

俺に意味ありげな視線を向けるクレサイダ。セレミスキーもくれと言っのか？

「ちびつと話を変えるがよお、セレミスキー無しでカイクはどうや

って世界を渡った？」

「やなところに気付いてくれるねえ、ライシス君。…リンセン・ナールスが魔王様を召喚した時と同じ魔具を使ったんだ。確かこの世界ではラートチの杖って呼ばれていたっけ？あれには全ての魔法が組み込まれてるんだよ」

「セレミスキーより凄い魔具と言うことだな」

「その通りだよ、リセス。リンセン・ナールスがガンデアからペグレシヤンと共に持ち逃げして行方が分からなくなった筈だけどね」

先程の戦闘でマスナーが持っていたあれか。しかし、それは厄介なものだ。全ての魔法を使える。さらにラートチの杖が有る限りカイク一同は異世界を逃げ回れる。捕らえるのは容易では無いな。

「カイクがどの世界に居るのか予想は付くのか？」

また言葉が口を出してしまった。陛下の御前だ、気を付けないとな。

「フィフレか、アースだと思うよ。この世界に近いから」

「近いって言うところ？」

今度口を挟んだのはルクだ。こいつに陛下の御前は無関係なのだろう。

「うーん。クーレの異世界観は違うからなあ。クーレでは異世界は上下関係で表すでしょ。アールを頂点にフィフレ、クーレ、アース、フォートン、最下部にヘブヘル。実際は違う」

クレサイダの手から六つの光の玉が浮かぶ。その六つの玉はクレサイダの前で六角形に配置され、その六つの玉を光の線が円に結ぶ。

「これが世界の形だよ」

「凄い！クレサイダってこんな事が出来るんだー」

宙に浮かぶ光球を見てルクが素直に驚く。

「全く。クーレ人はこの程度で驚くのかい？」

「私も知らなかった。やっぱりクレサイダは凄いね！」

更なるイルサの感激。ヘブヘル之王も興奮されてらっしゃるぞ。

「お褒めに与り光栄です。…とにかく、これがクーレだとするとこれがヘブヘルだよ。この円を辿ると一番遠い位置にあるだろ。つまり、この世界からヘブヘルへ繋げるのは難しいと言うことだ。クーレから普通の召喚方法だと二つの世界を経由する必要がある」

六つの球体の一つをクーレに置き換えて、そのクーレから円を直径になる線をヘブヘルへと引く。

「セレミスキーはこの道を開く唯一の魔具だ。ラートチの杖を除いてね。とにかく、この円に沿って隣の世界に行った方が楽何だ。そうすると…」

「その隣の球体はフィフレとアースってことだな？」

「その通りだよ。ライシス君。つまり簡単に往き来しやすいフィフレかアースにカームがいる確率が高いってことさ。だからまずはフィフレに行って見るさ。勿論、セレミスキーが在れば…ね」

そしてクレサイダの関心は俺へと向いた。

「そこで、リセス・ネイスト。君が僕たちと来る覚悟が在るか、セレミスキーを僕に譲るかして欲しいんだけど？」

クレサイダの責めるような視線に俺は父上に視線で助けを求めている。

「セレミスキーはお前に譲ったんだ。お前が決めるべきことだな、これは」

シラッと言ってくれたものだ。

「分かった。最後まで付き合ってやるぞ！クレサイダ」

「くれぐれも足を引つ張らないでね、リセス」

全く皮肉の多い奴だな。

「やった！リセスも来てくれるんだ」

イルサの喜びようはさすがに恥ずかしい。

「やっぱり君は来なくて良いよ。セレミスキーをよこせ。これ以上姫に近付くな！」

「何を今さら…」

「私も異世界に行きた〜い！リセ君、連れてって〜」

やはりお前ならそう言うと思ったぞ。すでに答えは用意している。

「絶対に断る！」

「絶対に駄目だ！」

計らずして俺とジンさんの言葉は重なった。

「何でえ〜！良いじゃんかあ〜。イルちゃん、良いよねえ？」

「私は大歓迎だよ。アツ、でも危ないよ。やっぱりダメ」

「余計な人数はあまり増やしたく無いね。それだけ魔力を喰うんだから」

「余計じゃないよ〜。私は見た目は可憐な乙女だけど、すっごく役に立つよ！それでも聖女ニーセ・ケルペストの娘何だよお？」

本当にこれでも聖女様の娘なのが不思議で堪らない。

「尚更嫌だね」

イルサ、クレサイダ、いい判断だ。ルクを連れて行く様々な危険性をよく理解している。主に俺が被害を被る危険性だ。

こうして、ルクに破綻させられた真面目な会議は、俺が異世界にイルサ達と旅立つ事とルクは留守番と決定して終わった。

クレサイダ先生の異世界講座 2（後書き）

更新遅れやした。

私的事情です。今日明日中に後二話は更新したいな。

ご感想、ご指摘等ビシバシ送って下さい。そうすると作者の更新スピードが上がります。いや、頑張ってください。よろしくお願いします。

父上との冒険談

シーベル工城敷地内の西側片隅に立つ騎士団員兵舎。シーベルエンズに家を持たない独身男性騎士団員達の花園の二階の一室。ワンルーム、シャワー、キッチン、ベッド、雨漏り付きと言う至れり尽くせりの部屋である。

「何もねえのな。ウツツ、ローキー製の調理具が一式あるじゃねえか！ やっぱ鍋はローキー製だよなあ」

唯一俺がこの部屋で金を掛けた逸品に気付いて貰えるのは嬉しい。俺の部屋へ飯をねだりに来る騎士団員達は全く興味を持たないからな。最も俺にカタナより前に包丁を握らせた父上ならば食の大切さと調理道具の価値はよく知ってるだろう。

そう言えば父上は、俺に剣は愚か、得意と言われる魔法を教えてください。俺は父上の力に期待した事は無かったな。料理と歴史に関しては教えてくれたが。いや、今ならば俺がどんなに懇願しても父上が教えてくれなかった父上の意図が分かる。

父上には俺に闘いを教える術は無かったのだ。俺は父上の力に期待を持ち過ぎていたらしい。

闘い方は人に学ぶのでは無く、実戦の中で自分で学べ。そういうことですね、父上。

父上は俺のベッドに腰を掛けて煙草を吸い出した。窓際に置いてある灰皿を父上に差し出すとそれを受け取った父上は笑みを浮かべながら無言でベッドを軽く手で叩く。父上の前に立っていた俺はその

誘われた場所に座る。

父上とこうして並んでいると少し気恥ずかしくなる。母上に怒られて自室に謹慎処分を受けてベソを掻いていた時に父上が訪ねて来た時を思い出してしまう。もう十二年も前の話だ。その気恥ずかしさを誤魔化す為に俺も煙草に火を付けたが余計恥ずかしくなってしまう。

「父上と母上はどうしてシーベルエンスに居たのですか？」

俺は昔と違って父上とどう話せば良いか分からなくなっていた。話したい事は他にも色々あるのだが。

「良くぞ聞いてくれた！実はな……」

父上が顔をしかめる。賢者としての重大な使命があるのか？

「昔、世話になった人が亡くなって20年経つから、墓参りを兼ねてルンバットにユキちゃんとラブラブ旅行中だったのだよ、俺たちは！ところがどっこい、リセスの顔を見て、ニーセも墓参りに誘おうと思ってシーベルエンスに寄ったらニーセはカー君と先にルンバットに行っちゃてるし、ジンの執務室で国王と茶を飲んでたら何かシーベルエンスが燃えてるしさあ。せつかく久々の長期休暇が取れたのに危険性大な事に巻き込まれるしさあ」

父上の口からは不平不満らしきものがボロボロと出てきた。普段からこういう冗談が好きな人だ。実際は何らかの危機を感じ取り、この人は天に導かれるようにここに来たのではないかと疑ってしまう。

「まあ、俺の事は良いや。リセスはどうだったんだ？旅は順調だった……訳では無いよな」

父上が煙草を口に戻した。

「どうと言われても先程クレサイダやイルサが語った通りで」

「クレサイダやイルサが語った通りのお前だったのか？俺は他人の語る自分が本物だとは思わないことにしてるぜ」

父上には敵わない。偉大な父上には分からないかも知れないが、俺はクレサイダの僅かに持たれた期待に応えられる人間では無いし、イルサの過大評価は息苦しい。

情けない。父上に俺の情けない心を全て吐かされていた。イルサやクレサイダを召喚したことを、イルサが居なければ死んでいたことを、クレサイダとの喧嘩のことを、そしてカイクとの戦いについて「怖かった。身体が震えて、俺はカタナを握ることも出来なかったです」

父上は新しい煙草を加えて話を聞いていた。

「そうか」

煙草の火を揉み消し一言だけ漏らす父上。今も心底怖い。次に父上は何と言うのだろう。こんな情けない息子を前にした父上は何と言うのだろうか？

父上は笑い出した。大きく笑ったのだ、その人は。

「いやあ、お前はユキに似て、怖いもの知らずだと思ってたんだけどなあ。こんなに小心者だとはねえ」

恥ずかしさの極みだ。俺は父上にも似ず、母上にも似ず、誰に似てチキンになってしまったのだろう。自分が情けなさ過ぎる。

「俺は嬉しいよ！お前が小心者になってくれて」

それは父として喜ぶべきことなのだろうか？息子は貴方のように勇氣と叡知のある人間になりたかった。

「俺に似て小心者なりセスに一つ助言を与えよう！」

父上は本当に嬉しそうに言う。父上が自分のことを小心者だと言う慰めはさておき、助言は素直に受け取っておきたい。

「小心者なら、小心者の意地を見せてやれ！それが小心者ネイスト流の戦い方だ。まあ、頑張りたまえ、リセス・ネイスト君」

それだけ言つと父上は立ち上がった。

小心者の戦い方。今の俺には向いているのかも知れない。

自称小心者な父上は俺の返事を聞かずにこの部屋の扉の前に立つ。

「じゃあ、頑張れよ」

「はい！」

俺はその言葉を重く心に留めた。父上は俺の表情を見て溜め息を付いた。

そして、息子に贈る言葉。

「…リセス。重要な話を忘れていた」

父上の顔は真剣なものへと変わる。

「…弟と妹、どっちが良い？」

「えっ？」

弟の方が、いや妹も捨て難い。では無くて、父上！それはどういう意味ですか！

「冗談だ！まあ、肩の力抜いて頑張れってね。ハッハッハ」

どうやら、俺は父上に遊ばれたらしい。俺は部屋を出ていく父上の背中を恨めしげに見送るしか無かった。

父上との冒険談（後書き）

よし、更新だあゝ！

今日は休み。昨日は仕事。一昨日も仕事。

職場にて“週末の救世主”と不名誉な称号を頂いた天見酒です。

うん、ごめんなさい。日曜日に更新出来なかった分、今日はフルスピード更新します。

世界を旅立つ

昨日の雨の恩恵で朝日に輝くシーベル工城練兵所に立つ男。その横には寝惚け眼のイルサが立っている。

「遅いよ、リセス」

遅れたつもりは無いのだが、イルサを叩き起こしていただろうクレサイダよりも遅かったという事は遅れたのだろうな。

そして見送りに来た人達。

「リセス、しっかりな」

「はい！」

俺をシーベルエンスの騎士団に送り出した時と同じ事を言う母上。淡白な言葉とは異なりその表情には憂いを帯びている。これもあの時と同じだ。気が引き締まる思いだ。

「まあ、ユキミ君は僕がしっかり守るから心配しなくて良いよ」

「おい、国王！てめえ、人の女房に手を出すつもりか！ユキには俺が居るから良いの！」

国王と父上の喧嘩に気が緩む思いだ。

「リセス、クレサイダ、イルサちゃん、気をつけて行くだよ。無事を祈るよ」

「君に無事を祈られることになるとはね」

クレサイダ、あの大勇者アレン・レイフォートに健闘を祈られるなんて光栄の極みだぞ。素直に受け取れ。

「じゃあ、リセス。セレミスキーを出してよ」

いよいよか。俺はいよいよ旅立つんだ。心地好い緊張感と高揚感に支配されながらセレミスキーをクレサイダに渡す。クレサイダがそれを掲げた時に心臓は過重労働を始める。

「待つてエー！私も行くうー！」

小悪魔によりお預けを喰らった。忌々しい奴だ。

「昨日お前は留守番と決まっただろう。第一、ジンさんが許さない」

「フッフ、昨晚、魔話器越しにお母様にお父様を説得して貰っちゃたのだあ」

ニーセさんもルクを甘やかし過ぎだ。

そして娘に弱ければ、妻にも弱いシーベル工騎士団総長。

「リセス、ルクを頼むぞ」

ルクと現れたその人は視線で俺に声を出さずに語りかけてくる。怪我をさせるな。手を出すな、出させるな……。いつも不機嫌そうな顔をしているが、今日は本当に不機嫌のようだ。

「わぁー、ルクちゃん。やっぱり来てくれるんだ！」

お前は昨日はルクを連れて行く危険性を理解していただろう。心底嬉しそうなイルサ。ルクに抱き着く。ルクもその一番の歓迎者に嬉しそうに身を寄せる。いつの間にそんなに仲良くなっているんだ。

「僕は連れて行きたく無いんだけど？足手まといはリセスだけで十分だよ」

よし、今だけはお前ととても仲良くなれそうだ。押し切れ、クレサイダ。

「あれエー？クレちゃん、そんな事言って良いのかなぁ」

「クレちゃんってねえ。君、僕をバカにしてる？」

違うぞ。気をつけるクレサイダ。このルクの純粹に見える笑みは相手の心を言葉で痛める為のものだ。

ルクがニーセさんとお揃いの内ポケットから出す切り札。

「これなあゝんだ？」

俺はそのルクの朝日を反射する切り札を見て直ぐにジンさんを見た。何故、世界の欠片をルクに持たせたのかと言う想いのたけを眼に込めて。

「そろそろ譲る時期だった」

言い訳を吐くジンさん。

全くこのムツリ親バカは！

「良いのかな？これと私が居れば、カームと世界の欠片を簡単に見つけられるよ？このルクちゃんが、クレちゃんに協力してあげようと思っただけだな？」

「ウワァ、ルクちゃん。ありがとう！すごく心強いよ。クレサイダ、ルクちゃんで行こうよ！」

妄言だ。クレサイダ、お気楽魔王のように騙されるな。

「…準備は良いのかい？」

「何時でもOKだよ」

イルサとハイタッチをするルクに不機嫌そうな声で聞くクレサイダ。最終防衛戦は軽々と陥落した。

「良いよね、リセ君？」

「俺の反対は通じるのか？」

通じるならするがな。敗北者を更にいたぶる気か。

「それじゃあ、今度こそ行くよ」

クレサイダが開く異界の門。

まず、クレサイダが戸惑い無く扉へと消える。

イルサも一礼して消える。

「じゃあ、お父様、行って来るね」

ルクに先を越されてしまった。そのルクの背中に向けたジンさんの

気を付けるは虚しく響いた。

「では、俺も行かせてもらいます」

見送りに来てくれた人達に頭を下げる。

「まあ、楽しそうなメンバーで良かったな。頑張れよ」

父上の他人事な発言だ。確かに俺が他のメンバー達の方も頑張らなくてはならないな。

全く愉快的なメンバーだ。聖女様の姿だけを継いだ性悪女に、主人以外に毒舌な悪玉従者、極め付きの能天気大食らい魔王様。

そして、旅立ちの扉を潜る。俺はこの仲間とこの世界から消えた。

世界を旅立つ（後書き）

やっと、序章が終わりました。終わりましたとも。しかし、ここからが本番です。

天見酒も主人公リセス共に気を引き締めてかからんとな。

精霊世界ファイフレ 1

森と言つて良いのだろうか？木が地から生えて、何も無い中空からも生えている光景を…いや、生えているというか漂っている？木だけでは無い、花もそれこそ根こそぎで飛んでいる。

イルサやルクはこの不可思議な光景を早くも受け入れてはしゃいでいるが、植物がウジャウジャした根っこを露にして空に浮かんでいる事に、本当に美を感じられるのか？

「ファイフレは主に僕らシャプトと同じの魔力構成体が住む世界だから、この植物も空気中の魔素を取り込み易く進化したのかも知れない」

「確かに魔力で一杯だあ。生命体しか魔力を持たない私達の世界とは違うねえ？」

クレサイダの仮説をルクが賛同の意を示す。…待てよ、俺に嫌な予感がする。

「ルク、周囲が魔力に満ちていると言うことは」

「全然ダメだねえ。クレちゃんほどの魔力でも沢山在りすぎてカームや欠片の場所なんて全然区別が付かないよお」

「ルク君、クーレに帰れよ」

俺もクレサイダの意見に両手を上げて大賛成だ。

しかし、少しは頼りにしていたルクの能力が役に立たないとなるとこの広大であるう世界を闇雲に探索するしかない。強いて言えば、俺たちは迷子だ。

「イルちゃん、クレちゃんが苛めるよ」

「クレサイダ、ルクちゃんを苛めちゃダメだよ」

本当にこの二人は仲睦まじくなったな。少し羨ましい気がしないでは無いが、こちらは男同士仲良くやることにしよう。

「クレサイダ、どうするんだ？このまま立ち往生しても意味が無いぞ」

「人頼りじゃなくて少しは自分で考えなよ。僕は万能じゃないんだよ」

冷徹な言葉が俺に投げ掛けられた。俺はこいつと仲良くはなれないようだな。

「とにかく、この世界の住人を探すことにしよう。情報を集めねば動きようが無い」

俺の自分の頭で考えた結論にクレサイダは、まあ妥当だねと生意気な返事を返した。…イルサとルクはしゃがみ込んで何をしてるんだ。イルサとルクの見つめる先には緑のシルクハットを被る栗鼠がいた。その栗鼠に話し掛けている二人。クーレでは異様過ぎる光景だ。

「私はクーレから来たんだあ。こっちのイルちゃんはヘブヘルだよ」

「そうなのか、翼のお嬢ちゃんはヘブヘルから来て、そちらの翼無しのお嬢ちゃんはクーレから来たのかい。それはまた珍しい」

「うん、栗鼠さんが喋るのもヘブヘルでは珍しいよ！」

栗鼠と平然とお喋りしてるお前らは珍しいぞ。

「いや、おじさんはリスとか言う生物じゃないからね。樹を司る偉大なる精霊セルツテインだからね」

「ウワア、凄いですねー！セルツさんって呼んで良いですかあ？」

「ああ、好きに呼んでくれたまえ！」

喋る栗鼠を不信を持たずにおだてるルクやイルサの順応力を素直に誉めるべきだろうか。まあ、今回はお手柄だろうな。害は無さそうであるし、俺もお話に参加させて頂こう。

「セルツさん、一つお尋ねして宜しいでしょうか？」

「…チツ」

おい、この栗鼠、舌打ちしやがったぞ。俺はフィフレ流の礼儀でも違反したのか？

「何だ、小僧。馴れ馴れしいぞ」

栗鼠公め、誰が小僧だ！

いかな、落ち着こう。栗鼠相手に怒ってどうする。

「リセ君、いきなり話に入ってきて質問は失礼だよー。セルツさん、私たちとおくっても困ってるんだあ。いろいろと教えてくれないですかあ？」

「ああ、良いとも。おじさんに何でも聞きなさい」

俺とルクへのおじさんの対応が違うんじゃないのか。ルクに礼儀を問われることになるとは心外極まり無いが、この栗鼠公の相手はルクとイルサに任せた方が良さそうだな。ルクが俺たちの目的の概要を口を挟まないように堪えて待つ。ルクの話す曲がりに曲がつた事情を訂正したくしょうが無い。クレサイダさえも耐えている。俺も耐えるんだ。

「なるほどね。ルク嬢とイルサ嬢は、その大悪党たちを倒すためにその下僕達と旅をしていると。いやあ、お二人は立派だなあ」

「クレサイダは下僕じゃないよ。とっても優秀な配下だよ。リセスは私の友達なんだよ」

「姫、このクレサイダを…光栄の極みです」

イルサ、訂正ありがとよ。しかしクレサイダ、それで良いのか？俺には下僕も配下も同じに感じるぞ。

「それでえセルツさん、ファイフレの欠片が何処に在るか知ってますか。これと似ている筈なんですけどお？」

ルクがセルツにクーレの世界の欠片を見せる。栗鼠公はその赤い結晶片に興味を持ち小さき手で触れる。俺も少し触ってみたいと思つた矢先だった。

「気軽に触るな！」

クレサイダが急に怒鳴ったことによりクレサイダの顔を見てしまう。俺の視界から外れたセルツに異変が起こっていた。

「セルツさん！」

イルサの悲鳴に近い声。

セルツは頭を押さえ込んで腹這いに横たわっていた。

精霊世界ファイフレ 1（後書き）

ファイフレ編スタート。

新たな登場栗鼠セルツティンはどうなってしまつやら。

また、色濃いキャラを書いてしまった。このキャラを生かせるかどうかは作者次第ですね。

精霊世界ファイフレ 2

暫くして心配する俺たちを余所に立ち上がるセルツティン。地に落ちたシルクハットを頭に置きながら言葉を発した。

「ルク嬢は大層な物を持つてるねえ。頭にゴチャゴチャしたものが入ってきて、おじさんは気が狂うかと思っただよ」

「ごめんなさい」

珍しく意気消沈なルクにクレサイダが追い討ちをかける。

「世界の欠片を初めて触れた時に君は何とも無かったのかい？ならば、化物だね。覚悟の無い奴が簡単に触れて良い代物じゃ無いんだよ、それは！」

「クレサイダ、その辺にしてやってくれ」

「クレサイダ君、ルク嬢を責めんでやってくれ。おじさんが勝手に触ってしまったのが悪いのだよ」

自分でも甘いとは思うが、ルクのしょげた顔を見るとあまり責めては可愛そうに思えてしまう。ルクは普段から黙ってれば可愛げがあるのかな。

「それで諸君はこの世界の欠片を探しているのだったね？」

「何処に在るのか知っているのか？」

「全く知らないなあ」

セルツの意味深な物言いに生まれた希望は直ぐに彼方へ消えた。俺の落胆に継いで、クレサイダが直ぐに新たな希望を灯すために口を出す。

「この世界で一番強い人物：生物は誰だい？例えばこの世界のトップに君臨する生物とかは？この世界での強国は何処にある？」

天神界アールが世界の欠片をその世界の代表者になる資格を有する者に配ったんだっただな？クレサイダの頭脳は機敏に働いている。

「ウーン、それはフィフレでは難しいよ。フィフレには五つの国が在るからね。木の国、土の国、火の国、水の国、風の国。因みにここは見ての通りの木の国さ」

確かに見ての通りだな。木が其処らを漂う国。その他の国はどんな不思議が有るのだろうか気になる。

「その中で一番強い国は何処になるんだい？」

「そんな事は分からないさ。おじさんは昔、クーレに召喚された事が有るから知っているけどね、クーレに有るような戦争なんて物がこの世界には無いんだよ。この世界では自分の住みやすい所に住む国と言っても国境が有る訳じゃないし、国王のような代表がいる訳じゃない。争う必要が無いんだよ。どの国が強いか何て誰も知らないさ」

闘争の無い世界。誰もが好きに生きられる世界。多少羨ましく思うが、何か寂しさもある。少なくとも戦士である俺には似合わない世界だな。これは俺が戦い好きと言うことだろうか？

そんな下らない自問自答をしている場合では無いな。この世界の住民でも手掛かりが皆無と言うことは、俺たち余所者が見付けるのは不可能に近いだろうな。

「取り敢えずおじさんは木の国に長く住んでるけど、その世界の欠片らしき物は見たことが無いよ。他の国を探した方が良いね」

後、四つの国をしらみ潰しに探すのか？こいつは大仕事だな。何年掛かることやら。

「ねえー、私達が大変なら、カイル達だって大変なんじゃないかなあゝ？」

先程の失態からじつと黙っていたルクがようやく立ち直りを見せて、良案を出す。

「フィフレは一旦諦めて、他の世界から探した方が早いんじゃない？カイルがこの世界に居るのかも分からないだし」

確かに一理ある。俺たちの目的はカイルより先に欠片を手に入れる事ではなく、欠片がカイルの手に渡らなければ良いのだ。見付ける事が困難ならば時間を浪費してこの世界を探し回る必要は無い。

「ダメ！絶対にダメ！」

イルサが焦ったように怒鳴る。鷹が威嚇するように翼を広げたイルサの猛反対にルクが僅かに肩を震わす。

「カイルはとても危険な奴何だよ！この世界で何をするのか分かん

ないんだよ。カイクがクーレで何をしたのか見たでしょ！カイクは残虐で、非道で、最低で！」

「イルサ、落ち着け！」

イルサの声の大きさに俺も合わせてしまった。今は実兄に対する有耶無耶な感情まで吐き出しても仕方ないだろう。ルクはお前とあいつの関係を知らないのだから。頼むからそんな顔で怒らないでくれ。そんな眼で怒らないでくれ。

「…ごめん。でも私はフィフレにカイクが居ないって事がはつきりするまではここに居たい」

イルサの感情を大きく反映しているだろう翼は小さく畳まれた。何とも読み易い感情表現だな。それ故に俺はこいつの感情が気になっ
てしまう。

「あのイルちゃん、そのごめんね。無責任な事言って」

「別にルクちゃんが悪い訳じゃないよ…」

気まずさに一同無言となった。まるで喋った奴から殺されると言うような空気が漂っている。こういう時に空気を払拭する役目のルクすら匙を投げている。

この空気を崩したのはこいつの突拍子の無い行動。

「ヒヤア！」

セルツがイルサの足と背を駆け上がり、イルサの肩で止まった。セルツの急なアクションに声と翼を上げるイルサ。

「諸君、まずは風の国に行こうではないか。彼処の住人達は情報に聡い。君たちの探し求める情報が聞けるかも知れない」

それを早く言え。そして早くそこから降りろ。

「セルツ君？姫の御身体に気安く触れるなんて焼き殺されたいのかい？」

「イツ、良いのかい？おじさんが風の国まで案内してあげようと言うのだよ。君たちの中で風の国が何処に有るか知っているものはいるのかね？」

姫というクレサイダの逆鱗に触れたセルツは、吃りながら説明もとい命乞いを行う。

「チッ、…よう済みになったら丸焼きにしてやる」

その時は俺もクレサイダに加勢してやろう。

「それでは諸君、いざ行かん！風の国へ！」

イルサの肩で仕切り出し、小さな手で一方を指すセルツ。

少しだけセルツに感謝してやっても良い。俺たちのギクシャクが、セルツの示す方向へ歩き出すことで少しだけ緩和されたのだから。しかし不安は俺にしつこく付きまとう。

ルクが一向に話そうとしない。お前が黙ってると何故、俺たちも沈黙に支配されるのか。何か喋れよ！

精霊世界ファイフレ 2（後書き）

いつもより少しだけ長くなってしまった。

ということは、誤字脱字の可能性も高くなる訳です。

もし、発見してしまった方はこの愚者にご一報をお願いします。

男達の夜

長い一日だった。余りにも喋らないルクが俺の不安を掻き立てられて、元より会話術の劣る俺は為す術無し。イルサもルクの無言病に感染し、イルサの肩上で場を盛り上げようと努力するセルツ虚しく、俺達は葬式参拝のごとき行進を続ける。

そんな雰囲気など御構い無く、涼しげな態度で歩くクレサイダが一段と憎たらしい。

そんな長つたらしい太陽の活動がもうすぐ一時停止になる前に、セルツ臨時指揮官により野営命令が発令された。

「では、おじさんは寢床を造るとしますよ」

イルサの肩から降りて、地面から木の実を拾うセルツ。何だ、それはお前の晩飯か？

違った。この小さき栗鼠は幾年もの歳月を短縮した。セルツが大地に置いた木の実が発芽し、緑の芽は伸び続けて茶色の幹が出来る。枝は伸び、葉が繁る。俺達を見下ろす大木が出来る上がるのに時間は掛からなかった。

この急成長した木に手を触れてセルツは言う。

「失礼するよ」

出来立ての大木に優しく手を触れるセルツ。地面が揺れた。何事だと思える暇も無い。土を破って現れた無数の根。一本一本を糸を寄り合わせるように幾重にも紡がれ小さなドームが出来る。入り口には根で出来た垂れ幕まで付いている仕事ぶりだ。その作業を終えた

セルツは、帽子の位置を直しながら、呆然としていた俺達を振り返った。

「ある程度の雨風はこれで防げるさ。お嬢ちゃん達はこの菜かで寝なさい」

「凄い！セルツさん、ありがとう」

「どうやったら、そんな魔法を使えるの〜？」

「ハッハッハ、おじさんは樹を司る精霊セルツテインなのだよ。これぐらいお茶の子さいさいなのさ！」

調子付くセルツだが、今回は好きなだけ付かせてやろう。

日が暮れ、腹が満たされれば眠くなる。俺では無くイルサの単純思考を基に置く生活体系の話だ。いそいそと寝床へ向かう健康的なイルサ。いや、あいつはお子様なだけか？

「ルクも寝たらどうだ？」

「うーん。私、ここで寝た方が良くないかなー？ほら、危険が迫っても直ぐに分かるし」

「ハハハ、このフィフレにいきなり寝込みを襲ってくる輩は居ないさ。ルク嬢も安心して寝なさい」

セルツに言われて、すごすごと即席木造建築物へ引っ込むルク。

「何なのさ、あいつは？姫とは一緒に居たく無いって言うのかい」

「クレサイダ、声が大きいぞ。ルクだって考える事があるんだろ」

クレサイダが、君は甘いね、と言ってくるが聞き流しておこう。自身でも分かっているつもりだ。

「で、彼女は一体何がしたいの？無理に僕たちに同行する必要は無かったんじゃないの？勝手に機嫌を悪くして迷惑だよ」

「何故、俺に聞く？本人に聞いたらどうだ」

「だって、君達付き合い長いんでしょ？」

俺とルクは確かに赤ん坊からの親ぐるみの付き合いだがな。

「俺はトーテス、ルクはシーベルエンス育ちだ。そこまで、あいつと長い時間を過ごした訳では無い」

少し喧嘩腰な物言いをしてしまった。

たまに遊びに来る遠い親戚みたいなものだ。況してや、ルクの複雑怪奇な不思議思考を分析出来る人物が居ると言うのだろうか。とにかく、ルクについて悪く言われるのはいい気分はしない。だからこの話はもうお仕舞いだ。

この俺の意図を組んでかセルツが話題を変える。

「ホォー、リセス坊はトーテス出身か？おじさんは昔行った事が有るんだよ。あそこはガンデアにも劣らず寒い街だったね」

そう言えば、セルツはクーレに召喚された事があると言っていたな。どうでも良いが俺は坊主扱いなのか？

「いやあ、今考えるとクーレも中々良かったよ。美人が多いしね。何を隠そう、おじさんの召喚者も美女だったのだよ」

陛下が聞いたなら喜ぶお褒めの言葉だな。そして、最後の自慢はどうでも良い話だ。どうでも良い話だが、話題が無いよりは有った方が良い。

「セルツはクーレに　いつ頃行っただ？」

俺の質問にセルツは返答に困る。もしかしてタブーを聞いてしまったのか？

「もう何年も前の事さ。忘れてしまったよ」

さらりとそれだけを言うセルツ。クーレで嫌な目に合ったのだろうか。深く突っ込んではいけない事。とは一概に言えない表情だった、セルツは。何か、忘れ去った思い出を振り返るように夜空を仰いでいる。この小さき栗鼠はクーレで何を見たのだろうか。

「リセス坊はもう寝なさい。おじさんやクレサイダ君は魔力構成体だから寝る必要は無いけど、君はそうはいかないだろう」

「火の番をよろしくお願いします」

ここはセルツの指図に従うべきだろう。無理に睡眠へと入ろうとすれば、俺は案外疲れていたことを知る。直ぐに夢の中に誘われた。

だから、寝耳に聞こえたセルツの言葉が現実なのか、夢の中のものなのかは、判別が付かないし、明日には忘れてることだろう。

「さて、久しぶりだね。クレサイダ君」

俺はこの言葉の意味を深く考えられる状態では無かった。

男達の夜（後書き）

伏線を張ったつもりです。

この伏線を生かせる日は来るのだろうか？

女達の夜

私がセルツさんの造った即席テントの蔭の垂れ幕を潜った時にその声は聞こえてきた。

「で、彼女は一体何がしたいの？無理に僕たちに同行する必要は無かったんじゃないの？勝手に機嫌を悪くして迷惑だよ」

クレちゃんの批判に対して弁明してくれるリセ君の声も聞こえる。でも、それは私には何の慰めにもならないんだ。

私は何かの役に立つつもりで来た。足を引っ張る気は無かったよ。でも、役に立たなかった。それどころかイルちゃんを傷付けてしまった。今となっては、この旅の私の目的は只の我儘でしかない。

私は何で、何で此処に居るんだろう。

「ルクちゃん。えっと…、寝るの？」

「あつ、うん」

その彼女の眠そうな小声に合わせてしまう。

イルちゃんは私の期待を裏切って、蒲団を被っている癖に、寝てはいなかった。君は何で起きてるのかな？私を待っていたとか言わないでよ。

私はイルちゃんの隣に落ちる毛布を被り寝る体制になる。

地面は固いよ。それよりも私の背中にイルちゃんが居ることが寝辛いけど。今の私には彼女の存在は大き過ぎる。クレサイドヤリセ君

の信頼を集める彼女が。聖女と呼ばれ、皆に慕われたお母様のよう
に…。

私はニーセ・P・レッドライトのようにには成れない。そんなことは
分かり切ったことだよ。うん、諦めた事だよ。聖女にも成れないし、
お父様みたいに少し過保護だけど素敵な男性は私の前には現れない
んだ。どんなに頑張っても。

だから、イルちゃんが羨ましい。何でだろう。私が欲しいものを持
つてると思っちゃうのは。

「ルクちゃん、ごめんね」

背中から聞こえたそのイルちゃんの声。何で謝るのかな？と、思
う隙も無かった。

彼女の身体の温もりが私の身体を覆う。私の全身の体温、主に首よ
り上が、急上昇中だあー！

「ルクちゃん、暖かい」

ナ、何を言ってるのかなあ？今は夏だよ。そう声に出そうとし
ても、私の心臓のバクバクが喉の調子を悪くしちゃってるよ。逆
にイルちゃんの緊迫状況にある心臓の音が私の身体にとても良く伝
わって来てるよ。

チッ、私よりも胸があることも強調しやがって！

アラ、いけない悪魔さん。私の思考に割って入ったらいけませんこ
とよ。

「ルクちゃん？」

「ナツ、何かなあ〜？」

耳元で囁かれる艶やかな声。何でこういう時にそういう色っぽさを出すのかなあ〜、この子は。そういうのはリセ君相手に出してあげなよ。

とにかく堅物リセ君は落とせても、このルクちゃんは魔王の誘惑に易々と負けることは許され無いのだ〜。

「付いて来てくれてありがとう」

うん、落とされちゃいました。

何で私にそんな事を言っちゃうの？私は君を傷付けたんだよ。皆に付いて来て貰える君に嫉妬しただけなんだよ。

「本当にルクちゃんが一緒に来てくれて良かった…」

そんな事言わないでよ。私は同情なんていらないんだから！そういう台詞は素直に信じるリセ君に吐けば良いじゃない！

私がそうやって反発する機会は無くなっちゃいましたあ。

イルちゃんは、私の髪に顔を埋めて可愛らしい寝息を立て始めたのです。私の身体をイルちゃんの片腕が拘束したままだあ。

チッ、言いたい放題言いやがって。人の身体を弄びやがって。図々しいんだよ！

でも、何でだろ〜？凄く落ち着いちゃうだね〜。

そして、こんなイルちゃんだから守ってあげたくなっちゃうんだよ

ね。

とても気持ちの良い夢見心地の最中に考えちゃいました。

私と違って、言いたい事を素直に言えちゃう。

これが魔王イルサテカの真の力なのかなあ？

女達の夜（後書き）

天見酒は泥酔状態です。酷い文章かもしれない。明日見直そう。皆様、誤字脱字が有りましたら、通報を宜しく願います。

明日は休みだあー！ヒヤッホイー！

サンタが居ない現実を受け止めて、人は大人になるんだ。

最近になってようやく、入社時に保障されていた筈の週二日間定休日なる空想自由時間が、現実存在しない事を知り、少し大人になった天見酒です。これから就活の人は気を付けろよ！

これは後書きに書く事じゃ無いですよ。ご免なさい。凄いテンションが高いんです。

風の吹く地へ

機嫌が良いことは良いことである。それが他人の機嫌を損ねなければだ。

「イルちゃん、これあげるね」

言っておきたいがそのハムを調理したのは俺だからな。

「わあ、ありがとう」

「はい、あ〜ん」

ルクがフォークに差して出すハムを躊躇い無く餌付けされるイルサ。昨日の離婚直前の冷めた夫婦関係から激変、俺たちの目の前で新婚ホヤホヤの夫婦生活を展開してくれる二人。

「ルクちゃん、美味しいよ」

それは俺が調理したハムだ。もう一度だけ堪えていてやろう。

「もお、イルちゃん、口の下にケチャップが付いてるよお」

イルサの口元を指で拭うルク。本当の姉妹みたいだな。俺の隣で含み笑いが聞こえる。この笑いは、決して良い意味のものでは無いだろう。

「ルク君、いい加減にしてよ。姫にベタベタしやがって」

「アレレ、クレちゃんは私に嫉妬かなあ？」

堪忍袋の緒が切れて凄むクレサイダに、にっこりと挑発するルク。

「この尼があ。リセス、セレミスキー貸せ！この性悪を送り返す！いや、やっぱり良い。この場で火刑にしてやる！」

「ありやりや、クレちゃんに出来るかなー」

「おい、クレサイダ落ち着け！ルクの挑発に乗るな。ルクも拳銃を取り出すな！」

そして、セルツ。みんな若いなあとか爺臭い事言っでないで止める。

「二人とも喧嘩したら駄目だよ！」

「姫、これはですね。姫の御身をその性悪女から守る為でして」

「そんな事しないよ。ちよつとしたジョークだよ。クレちゃんはお本気にしたみたいだけどねえ？」

「君はまだ言うのかい？」

「とにかく、二人とも座るの！ご飯はしっかり食べなきゃいけません！」

魔王の教育的格言に、萎れるクレサイダとルク。俺の隣から、あの女はいつか絶対に消す、と聞こえたのはおそらく幻聴だ。

「ハッハッハ、イルサ嬢はの中で一番強いね」

いや、クレサイダやルクがイルサに対して弱すぎるだけだ。全く情けない奴らだ。あまりこの魔王様を甘やかし過ぎるなよ。

「まったく、リセスが美味しいご飯作ってくれたんだから、味わって食べないと失礼だよ」

ナ、何！こいつは何で真顔でそういう恥ずかしい事を言いやがるんだ。

全くしょうがない奴だな。晩飯は少し豪勢にしてやるか。

「ハッハッハ、リセス坊もイルサ嬢には敵わないようだね。全く魔王様々だね」

うるさいぞ。

メンバーの気分が良くなるとチームの指揮が上がる。行軍の速度も昨日と比べると格段の差を感じられる。

太陽が真上に差し掛かった頃に少しずつ空飛ぶ樹も目立たなくなり、地上の樹も姿を消して来た頃、セルツは木の国の終わりを告げた。森を抜けた先には大草原があつた。

「ここが風の国なのか？」

「正確では無いけど違うよ。この草原はどちらの国でも無いのさ。その丘を登ると見えるよ。ちよっとイルサ嬢、おじさん気持ち悪くなって！」

セルツの話を聞いた途端に示し合わせたように駆け出すイルとルク。

「あいつらは子供か？」

「全くだね」

一人言を言ったつもりだったが、もう一人の置いてきぼりから賛同を得てしまった。煙草を取り出しのんびり歩きながら向かうことにしよう。

「今回は、イルサを連れて行かれても怒らないんだな？」

「僕だっていつも苛ついてる訳じゃないよ」

そう言い、俺が差し出した煙草を受け取り火を付けて、やっぱりこれは不味いねと文句を垂れるクレサイダ。

こいつとの友好的な会話を試みた俺としてはなかなか良い感触だ。

「たまには、姫も気を紛らわして欲しいしね」

クレサイダの言葉が俺の知りたく無かったイルサとカイムのことを思い返させる。勿論、クレサイダはこの二人に関して俺以上に知っているだろうな。クレサイダは、俺がイルサからこの事を告白されたと事実を知っているのだろうか？

「とても悔しいけど、ルクが姫の気を紛らわす存在だったのは認めるよ」

不味いと言いつつも、白い煙を吐き続けるクレサイダ。その言葉は

哀しさにも寂しさにも聞こえる。可笑しなものだな。俺たち二人はイルサの哀しみの根源をルクよりも知っている筈だ。でも、そのイルサの哀しみを一時でも忘れさせているのはルクなのだ。俺たちはイルサに何をしてやれるのだろうか？

「クレサイダはイルサとの付き合いは、やはり長いのか？」

何気無くそんな当たり前の事を聞いていた。

「愚問だね。僕は姫が御出生に立ち会って、その直後にシールテカ様、前魔王様に姫の教育係に任命されたよ。それから、二十年間、ずっと姫に仕えていたよ。僕は姫がお産まれになった時から知っているよ」

クレサイダは煙草を口でぶらぶらと遊ばせながら、既に丘の頂上に立ち、感嘆の声を上げているイルサを見詰めていた。不思議とクレサイダがクーレで大虐殺を行った大奸雄には見えない。二十年間、手塩にかけて育ててきた娘を見守る父親。まるでそうだった。

おい、待てよ！

「クレサイダ、イルサは二十年前に産まれたのか？」

「そうだけど、それがどうしたんだい？」

「いや…大した事じゃない」

クレサイダが怪訝そうに眉を潜める。

本当に大したことでは無い。無いのだが…

「リセス〜！クレサイダ〜！早くおいでよ！」

子供の如く興奮しながら俺たちを呼ぶ声。クレサイダは少し歩みを早めた。

俺の歩みはそれに反して遅くなっていた。

本当に大した事ではないのだが俺は少なからず衝撃を受けていた。

あのイルサが俺よりも年上だったことに…。

俺の中で妹みたいな存在だったのにな…。

というか、俺がこのメンバーで一番年下なのか？

「何、ポケットとしてるのさ。姫がお待ちだ。早く行くよ」

丘の上では、イルサが大きく手招きしている。

確かにこんな小さい事で悩む必要は無いな。俺の方がイルサより精神的にお兄さんなんだ。そういう事にしておこう。

風の吹く地へ（後書き）

コメディに始まりコメディに終わる。どうでしょうかね。たまには良いんじゃないですか。

こんな天見酒に発破をかける、ご感想、ご指摘等お待ちしております。

風に舞った影

イルサ達に追いついて、丘から広々と広がる草原を眺めて見る。

これは確かに絶景だな。俺にとってはあまり良い光景とは言い難いが…。

草原の辺り一面に敷かれた木屑。端が見えない。その上で羽根を休める生物の大群。この集団に襲われたら、堪ったものではない。

「何とも、攻略しやすそうな国だね。姫、今度征服でもしてみませんか？」

首を振り全面却下する魔王様。クレサイダの方が魔王に向いているのじゃ無かるうか？

「しかし、大群とは言え、こんな無防備なところに巣を作って大丈夫なのか？」

鳥が木の上など高いところに巣を作る安全性を怠って良いのだろうか。

「おじさんはわざわざ木の上に巣を作るクレーの鳥達に驚いたけどね。リセス坊、もう一度言うけどフィフレに外敵は居ないのだよ。異世界から以外はね」

安全の保障された世界か。やはり、俺みたいな人間には拍子抜けだ。

「おっと、向こうも気付いたようだよ」

一羽の鳥が此方に向かって翔んで来て、俺達の前に降り立つ。俺を見下ろす大きさの鷹。

「こんにちは！」

イルサ、お前は警戒心と言う物は無いのか。羽根を畳む大鳥は想像していたより高い声で返事を返した。

「はい、こんにちは。お嬢さん達は異世界者なのかしら？」

「そうです。ヘブヘルから来たイルサテカです！」

「あら、元気が良いのね。フィフレへようこそイルサテカちゃん」

俺に比べて、イルサはヘブヘルやクーレよりもこの世界の住民の氣質に合っているようだ。部外者を平然と受け入れられる魔王とは如何に？

「久しぶりだね、エイアハク嬢」

「あら、セルツテイン。本当にお久しぶりね。彼女達をご案内してるの？」

「ああ、そうなのさ。早速だけど彼女達の話聞いて、君の知識を貸してやってくれないかね？」

大鷹に気安く話しかける栗鼠。これもまた、クーレでは見れない光景だろう。

「どうぞ、何でも聞いて下さい。お姉さんの知ってる事なら何でも

教えてあげますよ」

「僕たちはこの世界の欠片を探している。何処に在るか知らないかい？」

気つ風の良い鷹のお姉さんにクレサイダが不躰に質問する。そのお姉さんは予想以上の情報を持っていた。

「あら、貴方達も世界の欠片とやらを探してるの？」

「他にもお姉さんに世界の欠片について聞きに来た人がいるの？」

悪いことを聞いた。ルクがすぐにその言葉の真偽を問う。焦りからか、いつもの口調が出てない。

「ええ、昨日異界から来た人達に教えたわよ。水の国のメーランスなら持っているかも知れないって。そう言えば、イルサテカちゃんに似ている男性が居たわね。ご知り合いなの？」

イルサは良く知っているだろうな。全くもって最悪だ。

カйм達に先を越されている。何としても追い付かなくては…。

「セルツさん！すぐに水の国に案内して！カймを追わないと…。
みんな早く行こう！」

イルサが目に見えて焦っている。落ち着けと言って落ち着ける場合でも無いな。確かに直ぐに水の国へ向かった方が良いな。

「イルサ嬢、ちょっと落ち着こうではないか？」

悠長なことを言うセルツ。お前はカイムの残虐さを知らないから落ち着けるんだ。あいつは水の国に対して武力制圧ぐらいはするぞ。ファイフレの住人やイルサのように平和的性格破綻者じゃ無いんだ。最もイルサの方が、まだこの状況を理解してるがな。

「エイアハス嬢、我々を水の国へ運んでくれないかね？」

エイアハスはこの頼みを快諾し、他の仲間を呼びに行く。

セルツは平和ボケなどしていなかった。こいつは予想以上に頼りな。人の良すぎるファイフレの住人にして、何処かしら強かなクーレ人らしさを感じる。

セルツはクーレで一体何を見てきたのだろうか？

もし、機会があればセルツとゆっくり話をしてみたくなった。

風に舞った影（後書き）

まったりパートからシリアスパートへ転換して行きます。

シリアス、シリアスなのだよ、天見酒。

こう言い聞かせて置かないと天見酒の遊び心が暴走し始めるのです。
次話は本当にシリアスになるのでしょうか？ならないんだろっな、
おそらく。

こんな駄目な天見酒に喝を入れてやって下さい。

この女は

エイアハスは二羽。セルツはとにかく、僕たち四人は二つに別れなくてはならなかった。問題は無い、僕と姫が同じエイアハスに乗ればね。

「クレちゃんの羽根も案外フワフワしてるね」

図々しくも僕の腰に手を回しているこの諸悪の根源。クツ、リセスは姫とこの状態なのか。

「叩き落とされたく無かったら、口を閉じるべきだね」

全くこいつの気が知れないね。僕が姫と同行するのを否定したと思ったら、姫と一緒にではなく、僕と乗りたいなあ等とほざきやがった。

「クレちゃん、クレちゃん、クレちゃあん！」

「なんだい！耳元で叫ぶなよ！」

馴れ馴れしくも僕の肩に顔を付けて来る。そこまで、空に舞う逆風の影響で下がっていた音量がより大きく聞こえる。

「クレちゃんは私の事、嫌いかなあ？」

「だあゝい嫌いだね」

今までの恨み辛みを込めて言ってやる！

「私はそんなクレちゃんがだぁ〜い好きだぁ〜！」

リセス、お願いだから代わってくれよ。この女の言動は僕の崇高な頭脳には、姫以上に理解不能過ぎる。首に手を回すな、必要以上にくつつくな！大人しい僕だっていい加減にキレるよ！

「そんな、可憐な美少女に抱き着かれて天にも昇る幸福を味わうクレちゃんに質問です」

君を天に昇らせてやるうか？

「世界の欠片を全て集めるとどうなるのかなぁ？」
それを聞くのが今回の挙動の意図か。この女はやはり油断出来なかった。

「君に言う必要は無いし、君が知る必要は無いね」

まだ姫にすら教えて無いし、気付いてもいない筈だ。カイムはおそらくウニロが話しているだろうが。

「フムフム、やはり全部集めると何かあると。もしかして、物語みたいに神様が現れて何でも好きな願いを叶えてくれるとかかなぁ？」

「少なくとも神様とやらは出て来ないよ。…世界が元の形に戻る。それだけだよ」

喋り過ぎてしまったな。これ以上はこの女に喋る気は無いね。

「世界が元の形に戻るう？まぁ、良いや〜。では、本題です」

本題？僕は君が何を言おうと知らないね。無視だ、無視。おい、何故、耳元に口を近付けるの？人の耳に息を吹き掛けるな！

「カイクって何者なのかな？只の反逆者じゃないよね？」

姫の反応を見れば、勘付けて当たり前か。これは姫の従者である僕が言うべきことなのだろうか。

「フッフ、クレちゃん、可愛いなあ。凶星ってことだね？多分、イルちゃんの兄弟ってとこだね」

「姫の前でその話は厳禁だ」

「分かってますよ。ルクちゃんはお子様じゃありません」

僕が吐くまでもないじゃないか。とにかくふざながら聞いて欲しい質問ではないね。不愉快だよ。

「辛いんだね？」

「ああ、そうさ。でも姫は辛くても戦うよ。実の兄であり、父母を殺したカイクとね」

その姫の背中を押し続けているのが僕だしね。あいつは姫の為に居てはいけない存在なんだ。姫に全てを押し付けて、あいつ自らそうなったんだ。

「違うよ。今はクレちゃんと話してるんだよ。クレちゃんの立場は辛いねって言ってるんだよ」

僕が辛い？ハッ、何を言ってるんだい。その馬鹿な発言に釣られて、ルクの顔を見てしまった。

何で悲しそうな目で僕を見てるんだ。僕は哀れみを受ける必要は無いんだよ。

「クレちゃんって悪ぶってるけど、やっぱり良い奴だねえ」

ニンマリ笑いこんな事をほざく。クッ、この尼が！僕は悪ぶってるんじゃないくて悪なんだよ！あまり調子に乗るなよ。

「はしゃぎ過ぎちゃったかなあ？私、眠くなっちゃたよお。着いたら起こしてねえ」

「寝たら、落とすよ？」

「私のクレちゃんはそんなことはしませんよお……」

僕はとことん嘗められているようだね。人の背中を枕にさっさと寝やがった。良くこんな生物の上で強風の中寝れるもんだね。全くこの女の言動は理解できないよ。

おい、寝たからって腕の力を緩めるなよ！本当に落ちるよ！

全く何で僕がこいつの手を繋いでおいてあげないといけないんだ。ほんと、姫よりも手のかかる奴だね。

この女は（後書き）

シリアス。何の事でしょうか？

いえ、分かっております。急遽この話を入れただけです。クレサイダをいじめたくなったのです。

次回こそは少しシリアスになります。多分ですけど。

緋色に染まる水の国

止むことの無い波の音、辺りに満ちる潮の匂い、そして、視界一杯に広がる夕日に照らし出される赤き水。海だ。まごうことなき普通の海だ。

クラゲが空を飛んだり、クジラに羽根が生えていたり、カエルが塩水の中を泳いでいたり、大きいイカが浜で昼寝しているという現実さえ無視すれば、クーレの海とそう変わらないさ。普通の海だ。

「潮風が気持ち良いね！」

「本当だねえー！」

女性陣はとても元気だな。イルサに到っては当然だな。こっちは身体の節々が痛いというのに。

エアハスに乗りながら、人の身体に身を預けて寝てたんだからな。勝手に寝られたこっちは全く良い迷惑だった。

落ちないように後ろからしつかり支えなくて行けない、起こさないように身体を動かせない。そんな俺の奮闘を知ってか知らずかイルサは俺の腕の中でスヤスヤと。俺の腕の中で…

「それで、イルサ嬢の抱き心地はどうだったかね？」

気付けば、俺の肩を占拠している栗鼠。

「そんなことはどうでも良いだろ！」

そつ、全く関係の無い事だ。イルサの身体の感触とか、髪がさらさ

らしていたとか、寝顔も可愛いなどは！

「リセス坊…若いつて良いね！」

このエロ栗鼠親父が！

「そんな事よりメーランスとかいう奴は何処に居るんだ」

「ホオ、急遽話題を変えたね、リセス坊？照れてるのかな？おじさんのジョークだよ！剣を抜こうとしないでくれ！」

俺はクレサイダとは違う。からかわれたぐらいで叩き斬るなんてしないさ。少し試したくはなつたがな。

セルツ、そんなに慌てて俺から離れ無くても大丈夫だぞ。

「メーランス殿、お久しぶりです」

ああ、浜で夕日に当たっている大イカがメーランスだったのか。むつくりと身体を起こすイカ。その身長は二階建ての建築物くらいあるだろうか。

「フム、セルツテインか珍しい。しかも、なお珍しいことに異界人と一緒か？」

「いやあ、彼等はいろいろと愉快だね。諸君、彼が夜海を司る精霊、メーランスだよ」

「僕たちは愉快ね…」

不愉快そうだなクレサイダ。俺はこの面子はかなり愉快だと思うぞ。

お前を入れて愉快的メンバーばかりじゃないか？俺だけは当てはまらないかも知れないが。

「メーランスさん、突然で申し訳ないですけどこれと同じ物を持っていますう？」

ルクが懐から取り出す赤い結片。見知らぬ人、イカ相手に無用心過ぎないか？セルツの件もあるんだぞ。この世界の生物が完全に無害とは言えない。

「ああ、持ってるぞ。私が夜の海底で拾った物だ。なんならば、くれてやるうか？」

十本ある足の一本を懐（？）に忍ばせて、ゆっくりと動かすメーランス。この世界に人を疑うこととは無縁らしい。お人好ししか住んでいないのか？

メーランスはその大きな足で器用に夕日を浴びてなお青く輝く結片をルクの掌に置こうとする。

「駄目ー！」

ルクが急に叫んだ。

メーランスの身体を貫く無数の氷の刃。

「メーランス殿！」

セルツの叫び虚しく、砂煙を上げて地に倒れる巨体。

黒赤い空に舞い、砂地に落ちたファイフレの欠片。その鈍く光り続ける欠片を手に収める為に動く俺とクレサイド。その俺たちの顔すれ

すれを通る鎗。

遠くからの魔鎗に足止めを食らった俺たちの前に、夕日に生える赤髪、赤眼の男が立ちはだかる。

その男の後ろで、悠々とフィフレの欠片を拾う特徴的な杖を持つ女。

やはり俺たちは危機感が足りない過ぎたらしい。

緋色に染まる水の国（後書き）

よし、やっと戦闘シーンに突入だ。天見酒の最も不得手な分野で
すな！

怒る紳士

己の甘さを後悔する。この世界にも平和的対応を念頭に置かない奴も居た。そう俺も甘かった。それがメーランズを殺した。

「リセス、目の敵に集中しないと一瞬で死ぬよ。赤の他人が死んだだけだ」

分かっている。そのお前らしからぬ発言の方が驚きだ。いや、クレサイダはこういう奴だったな。

「やはり来たかクレサイダ。クーレの欠片も持って来たようだな」

拳銃をウニロに向けているルクに顎を向けるカイル。見張ってやがったな。やはり、ルクの先程の行為は軽率過ぎた。

「別に君に渡すために持って来た訳じゃないよ。とことん君たちの邪魔するためにさ、ッ姫！」

イルサにしては耐えた方だろうが、真っ先に動いたイルサに敵の矛先は向かう。顔傷にハッシュカレ。しかし、イルサは空中へ回避。その前、カイルに一直線。

カイルとイルサの剣がなる。明らかにイルサの力負けだった。砂浜に背をつけるイルサ。クレサイダのカイルに向けた魔法により事無きを得たが、お前は無茶のし過ぎだ。

「全くお前は話も聞けんのか？相変わらずのアホだな」

大層気に障る台詞だが、カイルを睨んでやる場合ではない。俺とル

クは、顔傷とハシユカレ、ウニ口から片時も目を離せる状況ではないからな。囲まれた。戦況は最悪だ。そんな事態を知ってか知らざるか、イルサは口を開く。

「ルクちゃんに手を出したら、本気で怒るよ！」

既に怒りの域に達しているイルサに対してカイムは穏やかに話す。

「やはりお前に魔王は向かない。魔王の証を我に渡せ、イルサ」

「絶対に嫌！」

俺はカイムに賛成しよう。イルサは魔王に向かない。カイム方が魔王職には向いてるだろうな。だからこそ渡せない物だ。

「イルサ、聞き分けが悪いぞ。素直に渡せ。此方は力付くでも良いのだぞ」

カイムの子供を叱るような口調は俺の機嫌を逆撫でするだけだった。イルサに今更兄貴面か？

しかし、流石のイルサもこの場で動きようが無いのは分かっているだろう。沈黙を選んでいる。

いつでも俺たちに集中砲火をできる状況を覆す方法は何か無いのか。

突如、地響きが起きる。砂を豪快に突き破り現れる無数の木の根。カイム達はその地下からの不意打ちに吹き飛ばされる。カイム達を拘束しようとする根に、包囲網が乱れる。カイム達の拘束は無理だったが、俺たちがその窮地から出るには十分だった。

そいつの小さな存在に気付いてなかったカイム達に予想は出来ない

だろうし、俺達もそいつを忘れていた。

「カイル君、少々、おいたが過ぎるよ。おじさん、年甲斐も無く怒っちゃたよ?」

俺たちのやり取りの間に生まれていた俺の腰ぐらいの若木。それに片手を付く男。顔を傾けて、その頭には少し大きめのシルクハットの位置を片手で正している。その表情は帽子と腕に隠れて読み取れない。最も表情が見えてもその感情は読み取り難い奴だが。

「悪い子な君たちにはお仕置きが必要なようだね。大丈夫、おじさんは紳士だから殺しはしないさ」

シルクハットを弄るのをやめて顔を上げるセルツ。その栗鼠は二ヒルに笑っているように見えた。

「なんかセルツさん、格好良いね〜…」

ルクがボソツと言う。

俺の手のひらに収まるサイズの栗鼠じゃなければな。何と云うか、美味しいところをセルツに持って行かれてしまった。

暴れる光、そして還る

騎士団員養成所の魔法学。俺はこの科目は苦手であり、実技はとにかく筆記試験前にはレクス兄さんに良く泣き付いたものだ。その苦難のお陰で少々は知識が残っている。

精霊魔法。クーレで使われる通常魔法、自然現象を否定、排除して新たな不自然現象を起こす魔法に対して、自然現象を肯定し、自然現象を変化させる魔法。大いなる自然に従いながら、自然に従える大いなる魔法。その為、通常魔法よりも威力が大きくなる。

何が言いたいかと言えばつまり、どんなに温厚でも精霊魔法を行使することの出来るファイフレの精霊を怒らせてはいけないと言っていることだ。

セルツにより成長を続け、我が物顔に暴れる無数の木の根に流石のカイム達も翻弄される。鞭になり、縄になる根。その一本は脆いが、数が数だ。

「リセス、今のうちに僕らは欠片を奪うよ！」

「援護はルクちゃんに任せなさい！」

「なかなか捕まってくれないねえ。おじさんは足止めをしよう」

何とも頼りになる面々だ。

何も言わずにイルサが先陣を切る。セルツの魔法に苦戦するカイムに一撃を放つ。カイムは木の根が届かない空へと待避。イルサが追う。

道は開いた。狙うはマスナー。ファイフレの欠片と厄介なドゥーチの杖。こいつさえ奪ってしまえば…。抜いた刀はマスナーには及ばない。セルツの根を器用に避けて顔傷が俺の行く手を阻む。クソ、クレサイドは…、魔鎗が遮るか。セルツもこれだけの根を一人で操作している。ウニロの足止めをしているだけで良くやってくれてる方か？

「はい！注もおく！」

場を弁えない発言。皆の視線を一点に集める女性。マスナーの背を取り、拳銃を突き付けるルク。やってくれたな。

「クツクツク、このお姉さまの頭を吹き飛ばされなくなったら、全員武器を捨てたまえ！」

気分はすっかり小悪党だな。しかし、いい働きだぞ。

「お姉さまは欠片と杖を渡してね？」

「舐めないでね、お嬢さん？」

ルクの生き生きした笑顔にマスナーは従う気は無かった。振り向き魔法を使おうとするマスナー。先に発砲音が響いた。しかし、マスナーは既に引き金を引いていた。銃よりも恐ろしいものの引き金が引かれた。

ルクの胸元から出る赤い光。マスナーの手に持つファイフレの欠片も青く強い光を宿す。そして、白く輝くドゥーチの杖。何が起こった？

「これは創世の杖のせいですか！マスナー、まだ早過ぎます！止めなさい！」

「無理です！抑え切れません！」

ウニロの怒号にルクに撃たれた肩から血を流しながらマスナーは応える。この現象はマスナーの所業ではないらしい。

「二つ欠片に反応したって事かい！何をやってんだよ！」

クレサイダも敵意を捨てて叫ぶ。何が起きているか分からないが相当にやばい事態だと言うことは分かる。

「止まれ！止まって！」

マスナーの願い虚しくドゥーチの杖の光が一層強くなる。既にこの突発的事故に戦闘は一時休戦されていた。

「リセス、セレミスキーだ！マスナーをゼロランドに閉じ込める！」

状況もクレサイダの言っていることも意味不明だが、クレサイダにセレミスキーの入った提げ鞆を投げ渡す。

その時、マスナーの杖の先の宙に亀裂が走り、空間に穴が空く。訳が解らなすぎる。

「…これは世界が元に戻るのか？」

地に降り立ったカイクが言った。世界が元に戻る？

「くそ、間に合わないのか！」

俺たちの中で唯一この事態を理解出来るだろうクレサイダが諦めを認めた。

「駄目え〜！」

イルサが不用意にマスナーの放つ光へと突っ込んでいく。
イルサが紫色に輝いたように見えた。

そして俺達は光に隠された。

俺には何が何だか全く分からない。ドゥーチの杖が、世界の欠片達が何を起こしたのかを。

次の瞬間には俺達は還っていた。

暴れる光、そして還る（後書き）

うん、上手く書けない。上手く書きたあーい！

天見酒、修行中です。修行します。頑張ろうよ、天見酒。

意味不明な文を失礼しました。

聖地と戦いと遺志を継ぐ者

眼を眩まし続けた光が止む。

「ここ、どこ？」

俺の頭にイルサの質問に直ぐに答える余裕はない。

俺の目の先に立つ老人。未だに頭では理解出来ないがその老人の顔に見覚えがある。鍵を象ったクーレなら誰でも知っている聖章が大きく描かれた修道服。そして、新聞の写真で見たその顔。

何でこのお方が俺の前に居るんだ？

後ろを伺うと聳え立つ聖人セイン・セレミスの墓とその横にちんまりと立つ二十年前のルンバット争乱の慰霊碑。そして、この俺達の登場に、啞然としている老人を見守っていただろう大勢の信者達。何で俺はここに居るんだ？

「賊だ！教皇様を御守りして、この者達を直ちに捕らえよ！」

セレミス教シンボルマークを彫った鎧を装着している男が号令をかける。動き出す聖騎士団。

「厄介な所に出ちゃたねえ。どうする？全員殺っちゃうかい？」

小声で物騒な相談をしてくるクレサイダ。その提案は却下だ！

「駄目だ、ここで聖騎士団を攻撃したら、セレミス教徒全員が敵に回る。ここは素直に従い、レッドライト総長やシーベル工国王に釈明を頼もう」

自治領であるルンバット、しかもセレミス教大本山セレミス大教会に不法入国した俺たちは犯罪者だ。しかも、下手に暴れれば教皇暗殺未遂が濃厚になってしまふ。セレミス教と戦争をやらかすのはまずい。

「僕は処刑されなきゃ別に良いけどね。カйм達は……」素直に捕まる奴等じゃないな。聖騎士団員達の悲鳴が上がり始める。シャプトという魔力構成体のウニロの無限とも思える魔力を用いた魔法によって降る氷柱の雨。それに翻弄された所にカйм、顔傷、ハシユカレが聖騎士へ斬り込む。

「カйм達を止めるぞ！」

俺の焦った号令に反応するカйм。

「ハシユカレ、その老いばれがこの組織の頭なのだろ？首を取れ」

聖騎士団員の血に濡れた剣を片手に、簡単に言ってくれるカйм。ここで教皇様を殺られたら俺達の立場も益々無くなってしまう。ハシユカレが魔鎗を教皇様に向ける。動かそうとした俺の足が止まる。教皇様を守らないといけない。魔鎗を通すことは出来ない。集中しろ、リセス！魔鎗は不規則に動くぞ。全部読んで、全部防げ。魔鎗が動めいた。

その人が俺の前に立ったのは分かった。その人の前では魔鎗の動きがとても遅く感じた。不規則に動く魔鎗を弾く、その手と剣の動きは全く見えない。それほどその人の用いるサーベルは速すぎた。クーレで唯一勇者に勝った人、魔鎗ごときに負ける人では無かった。

「お久しぶりです。ハシユカレ中尉。また、そいつと悪ふざけをし

てるんですね。大人しくして頂けないでしょうか？」

ハシユカレが魔鎗による無意味な攻撃を止めたのを見計らって、その人は話し掛けた。

「久しぶりだな。ドー又曾長。いや、今はドー又自治領領主殿だったな。そこを退け、ドー又」

ハシユカレは話をする気は無いようだ。魔鎗が動き出す。カーヘルさんがそれを受ける。

「聖騎士団、此方は攻撃しないで下さい！リセス君。ハシユカレ中尉は僕が抑えます。後を頼みます。ルクちゃんは大人しくしてて下さい！」

それだけ言つと颯爽とハシユカレの懷へ駆けるカーヘルさん。とても心強い味方が現れた。

「ウウ、私も役に立つよぉー！」

「何かム力つくよね、あの小僧は」

クレサイダとルクのカーヘルさんへの不満はこの際関係無い。不謹慎ながら、俺はあの剣聖のカーヘル・ドー又と共に戦える事に感激を覚える。しかも、あのカーヘルさんに後を任された。俺のやる気が上がるのは当然だ。

イルサとクレサイダが、カймとウニロ、マスナーに向けて無数の光球と火の球を放つ。しかし、ウニロの魔術防壁は破れない。周りの聖騎士達が邪魔だ。側にそいつらが居ることイルサが力を抑えている。

ならば、俺がカームを斬ると行きたかったが、横から出る刃。ギリギリ避ける。顔傷の二の太刀はルクの放った殺傷力の無い風魔法に防がれる。ルクの神懸かった魔法コントロールは流石だ。怯んだ顔傷へ横に薙ぎ払うが顔傷が何とか刀を縦に持ち直し防がれる。

俺の横を氷の刃が通る。クレサイダが魔法防壁で防いだが、魔法合戦は不利だろう。相手は遠慮無く力を奮えるが、こちらは聖騎士達を気にしなくてはいけない。

聖騎士達も必死だろうが、邪魔で仕方が無い。

「聖騎士団全員、そのシャプットの周囲から待避して下さい！」

そんな俺達の思考を読んでか、ハシユカレを追い詰めるカーヘルさんが突然号令を駆ける。

「雑魚どもを引かせてくれるとは、ドーナとやら有り難い。手間が省ける」

カームがカーヘルさんに皮肉を言う。クレサイダ、あの馬鹿たれに最上級魔法をお見舞いしてやれ。

「流石はカー君！お姉さんの事をちゃんと分かってるじゃない。正に以心伝心だねえ」

その必要は無かった。退いた聖騎士達の隙間から出てきた女性。杖の先から赤い光が走る。その弱々しい魔法はウニロの魔法防壁を貫く。

神のごとき一撃。ウニロの黒き身体は炎へと消えた。その女性の鮮烈な登場にまるで魔法に懸けられたように周囲から動作が消える。

「やっぱり、私は派手にいかないかね？それにしても、性懲りも無くまた現れたんだね、貴方は。しかも、私のルクちゃんにちょっかい出して？」

燃え上がる炎にその人の独白は続く。

「知ってる？今日は貴方とこの教会で遊んだ日から、ちょうど二十日目だよ？今度はしっかり焼いて上げるからねー」

その人は俺の知っている聖女様では無かった。いつもの笑みの中に威圧感を称えている。これが聖女ニーセ・P・レッドライトの存在感か！

「ある意味、カイルより厄介な女が出て来ちゃったよ」

クレサイダがぼやいた。

聖地と戦いと遺志を継ぐ者（後書き）

皆さん、長らく御待たせしました。おそらく冒険記シリーズで登場キャラ人気投票やったら、堂々の一位を果たすでしょうこのお方の登場です！

うん、勿論出しますよ。前作の主人公より目立ってるんだもんこの人は。

一つ言っておこう！カー君はこの人のおまけじゃないよ？この二人のコンビが素晴らしいのだよ。

聖女の過ち

ニーセさんのウニロへの魔法の難から辛うじて逃げたカイムは言う。

「前回にしろ、今回にしろクーレ人は予想外に強いものだ。前代魔王が征服しそびれたのも納得がいく」

マスナーが水魔法でウニロだった炎を消す。いや、あれだけの魔法を受けてなお、ウニロは僅かになった身体で蠢いていた。

「やっぱり、一発じゃあ足りなかったかなー。もう一発、ご馳走してあげちゃうよー、クレサイダ君？」

ニーセさんがまた背筋を凍らせるような笑みを浮かべる。待て、クレサイダ？俺の隣に居るが…。

「嫌な奴と間違えないで欲しいものですね」

ウニロが悪あがきに氷柱を放つ。それを軽々と避けるニーセさん。

「マスナー！」

カイムがマスナーに呼び掛ける。マスナーを中心に地面に現れる魔方陣。その魔方陣もカイムが魔法で出した黒い霧に一瞬で隠された。

「逃がさないよ！」

「逃がすもんか！」

そのカーム達が居るだろう方向へクレサイダの放つ上級火魔法とニーセさんの魔法が重なる。黒い霧が晴れた後に残ったのは、大穴の空いた地面に燃える炎。

「また、異世界に逃げられたの？」

「いえ、あれは転移魔法です。まだこの世界に居るはずです」

クレサイダが苛立たしげにイルサの質問に答える。

一時の安堵に俺は気が抜けてしまっていた。

「君たちは一体何者かね？」

そう聞かれる教皇様に現状を思い出す。

「えっと、私はヘブヘルから来た…」

「姫、待つて下さい」

クレサイダがイルサの正直な返答に待ったをかける。

正直に事情を言っても信じて貰える保障はなく、良い嘘も思い付かない。俺たちの周りを囲み始める聖騎士団にそのまま捕縛は勘弁願いたいところだ。

「教皇様、申し訳ありませんがこの者達の身柄を私にお預け下さいませんか？」

「しかし、それは聖女様と言えども」

ニーセさんから有り難い助け船が来た。渋る教皇様にニーセさんは優しい笑顔で諭すように話す。

「此方に居るのは私の娘。そして、そちらの青年は、あの天道の賢者ライシス・ネイストのご子息ですよ」

ニーセさんの言葉に周囲がどよめく。視線が俺へと集まる。そして、ニーセさんの止めの一言。

「もし、ここで彼への対応を間違えたとしたら、あの賢者は魔王さえも制した力を持ってルンバットを一夜で滅ぼすかもしれませんよ？」

如何に我が父が凄いのが分かった。教皇様が俺たちの身柄をニーセさんに渡すことを即決するほど、父上の名は偉大なのだ。最も父上は歴史上最高の魔導師だが、この聖都を攻め滅ぼすような蛮行を行う筈は無い。父上は案外信心深いからな。

ニーセさんの付いて来なさいにより、無言でセレミス聖教会の中を歩く俺達。

いつの間にかセルツがイルサの肩に乗っていた。こいつもこの世界に来てしまったらしい。何故先程の戦闘に参加しなかったか問い詰めようと思ったが、その辛そうに息をする姿に責める気は失せ、ただ感謝の念が生まれる。こいつは巻き込まれただけだ。

それより、セルツ以上の不安要素がイルサの隣を歩いている。ニーセさん、カーヘルさんのかつての宿敵。争いが起こらないことを祈るしかない。

「どうぞ、入って下さい」

賓客室と書かれたドアを開けて、俺達の入室を促すニーセさん。どうやら、この教会で賓客として歓迎されていたらしい。この人に対しては当たり前前の待遇だな。

一番最後に入ったカーヘルさんが扉を閉めた直後だった。

「ル〜クちゃん」

ニーセさんがルクに抱き着いた。それは親子の感動の再会ではなかった。

「私は、魔話器でリセ君や他の友達と遊びに遠くに行くだけだって聞いたんだけどなあ〜。だから、ジンが大袈裟に心配するのを説得してあげたんだよ〜。リセ君が居れば大抵は大丈夫だしねえ。…でも、これはどういうことなのかな？」

なるほど、ニーセさんはルクの嘘を信じて、ジンさんの親バカによるいつもの大袈裟な心配だと思っていたのか。

「え〜とね、お母様。これはイルちゃん達と遠くに遊びに行った訳でも合ってね」

ニーセさんに至近距離でにつこりと見詰められるルクの言にいつもの調子が無い。

「へえー、そうなのー。あの黒いうねうねで陰険なクレサイダと喧嘩するなんて、過激な遊びだね？」

ニーセさんの言う通り、クレサイダと喧嘩するのは少々過激になるかもしれないな。

「えっと、クレちゃんはあの喧嘩するけど、いい人だよ」
それは判断が付かないな。

「ルクちゃんを殺そうとしたのに？」

ニーセさんの表情が氷付いた。ルクの顔は驚きを見せ、クレサイダを見る。

「クレサイダはそんなことはしません！クレサイダは確かに少し性格がひねくれてるけど、そんなことは絶体にしないよ！」

「ニーセさん、クレサイダはイルサの言ったように性格がひねてますが、俺も仲間を殺す奴じゃないと思います」

イルサが声をあげる。俺もここぞとフォローを入れておいてやろう。クレサイダは相変わらず、壁に凭れかかり俺達を眺めている。

「えっ？仲間って？」

驚きの声をカーヘルさんが上げた。

「ちょっと待って？さっき中庭に居たシャプトは誰なの？」

ニーセさんがルクを離して聞く。それに答えたのはクレサイダ。

「あれはウニロだよ。同じシャプトだからって、僕があんな奴と一緒ににされたら溜まったもんじゃないね」

「此方がクレサイダ！」

カーヘルさんが取り乱すのを初めて見た。腰のサーベルに手が伸びている。

「あれれ、そのイラつかせる喋り方は本当にクレサイダ君みたいだねえ？ 私に殺られに来たのかなー」

「はあ、僕は君の喋り方の方が苛つくよ。殺る気なら僕は手を抜かないよ？」

ニーセさんが杖をクレサイダに向ける。これは非常にまずい状況だ。

「クレサイダ、駄目だよ！お願いだからやめて下さい！」

「…姫。チツ、姫にここまでさせたんだ。僕は引くよ」

イルサがニーセさん、カーヘルさんに頭を下げている。

「クーレの淑女、紳士よ。この高潔なる話し合いの場を血で汚すような行為は止めようではないか？」

イルサの肩で語り出すセルツの制止効果は絶大だった。

「栗鼠が喋ったあー！」

クーレ人にとっては驚きの生物だな。

悪と正義

我ながら貧乏くじを引かされたものだ。

始終黙り切るクレサイダにカーヘルさんから俺に説明を求められる。黙って聞いているニーセさん、俺の横に立つカーヘルさん。イルサ、ルク、セルツからの手助けは無く、気まずい雰囲気の中、一人で口を動かす俺にかかったプレッシャーは相当なものだった。

俺がその難境を終えて、俺達の前でニーセさんは一度だけ口を開いた。

「大体は分かったよ。リセス君、今日は疲れたでしょ？ ゆっくり休んで良いよあ？ あっ、ルクちゃんはこちらに残ろうね」

扉を開けるニーセさん。ルクを残して出て行つてと言ってるようにも取れる行動。余程、クレサイダとは居たく無いようだ。

説教を受けた気分な俺は、カーヘルさんを先導に従い各各の部屋へと案内される。セレミス教巡礼者用の粗末な部屋。ベッドが六つ並ぶだけ部屋。

疲労に任せて何回も微睡むも深い眠りに着けない。シーベル工北端育ちの俺にルンバットの暑い夜は辛い。眠りに着けない原因はそれだけでは無いのだが。

身体を起こして周囲を見る。イルサは俺の向かいのベッドで暑さなど気にせずやすやすと気持ち良さそうに熟睡中。セルツはその隣のベッドの枕の上で丸まっている。

ルクはまだニーセさんの所に居るのか。

クレサイダが居ない。嫌な予感が頭を止まること無く過った。
クレサイダを探すために、俺は急いで部屋を後にする。

二人は、教会中庭セイン・セレミスの墓の前に居た。しかし、二人が見ているのはその横に立っている小さな慰霊碑。

何かを話している。声を掛けるべきだろうが、生暖かい壁に背を預けて聞き耳を立てさせてもらう。己の好奇心には負けた。

「それで、君は僕を殺したくは無いかい？」

表情は伺えないがクレサイダはいつものように皮肉な笑みを向けることだろう。

「殺したいですよ。私は貴方を殺す為に剣を握って来たようなものですから」

カーヘルさんの表情も読み取れない。しかし、父上やアレンさんのクレサイダへの態度とは明らかに違うだろう。俺にはカーヘルさんを殺意に駆り立てるものは分らない。俺の周りの大人達、父上の仲間達はリンバットの争乱については誰も語らなかった。二十年前、この地で何が起きたのか。この地でクレサイダは何をしたのか。俺は知りたい。

「それならば早くかかって来なよ。それとも、君はまだニーセ・パルケストやケルック・ラベルクが居なければ一人で何も出来ないのかい？」

一瞬、止めに入るべきか迷いが生じたが、カーヘルさんが此処で剣

を抜く姿は浮かばなかった。一步踏み出した足を戻す。

ケルツク・ラベルク。何処かで聞いた名だ。昔、誰かから聞いた名前。ラベルク、旧ガンデア連邦地方では良く見掛けるありふれた家名だ。誰か似た名前を聞いただけかも知れない。

「そうだね。私は一人じゃ何も出来ないですよ。話は代わるけれど、君はアレンの率いる第3独立遊撃隊に会いましたよね？」

「それがどうしたってのさ。アレン・レイフォートはのほんと僕を見逃したよ」

「ミシャちゃんと話をしましたか？」

これで話は繋がったのか。ミシャさんの家名もラベルク。これは偶然の一致では無いのだろう。間が空いてクレサイダが言った。

「僕がケルツク・ラベルクを殺したと彼女に言ったよ。それくらいだ」

クレサイダは今、どんな顔しているのだろうか。俺には予想出来ない。笑っているのか、嘆いているのか。

「聞いても良いですか？」

カーヘルさんの凜とした声が響いた。

「ケルツク・ラベルクは強かったですか？」

一陣の温い風が吹いた。クレサイダが口を次に関くまで時は流れた。

「それは僕に対する嫌味かい？僕をあそこまで追い詰めたのは…あの男だけだよ。そして、邪魔だから殺した。それだけだよ」

今のクレサイダの声は聞いた事が無かった。この奸雄の過去を、想いを知らなすぎる人間が聞く必要の無い声。

カーヘルさんが何かを言った。クレサイダにしか聞こえない小さな声で。

その時、クレサイダが激昂した。

「ふざけるな！何なんだよ君たちは！僕はあいつを殺ったんだよ！僕が憎ければ殺せば良いさ！」「あの人はそうしただろうからです。それだけです。当時四歳の娘すら学んだことです。これがあの人の正義なんですよ。あの人の守ったあの人の世界です」

ケルツク・ラベルク。父上の言葉を思い出した。愚かなる偉大な英雄。その人が守った世界とは…。俺には理解出来無い。

「ふざけるなよ！僕に正義なんて言葉が分かるか！僕は悪だ！裁かれる存在なんだよ！」

クレサイダは悪。誰が決めた？悲しくもそれはクレサイダ自身だ。

「君が悪だとしても、私に裁く権利は無いよ。裁いて欲しいならば」

カーヘルさんが言葉を切る。俺もクレサイダを裁けないだろう。

「リセス・ネイストに裁いてもらいなさい。彼の方が君を裁くに相応しい」

俺がクレサイダを裁く？

カーヘルさんがいきなり声を大きくする。

「そういう事で後は任せました。リセス君」

バレていた。観念してゆっくり姿を曝す俺。気まずい。任せると言われても困る。

カーヘルさんは俺の横を通って行く。

残された俺とクレサイダ。お互いに醜態を見せ合い何とも辛い。クレサイダが立つ隣に行き、逃げる為に煙草に火を付ける。

「盗み聞きとは良い度胸だね？リセス君」

「裁かないぞ」

俺の意味の通らない発言。

「お前は裁けない。俺はそれしか言えない」

クレサイダが俺を見ているを感じる。俺はその眼に気付かないふりだ。今のお前の顔は見たくない。

「リセス」

クレサイダが俺の顔を見ようとする。絶対に見るものか。今のお前の顔は見たくない。

「煙草を僕にもくれよ」

クレサイダから吐かれる煙が俺の吐く煙と戯れる。そして空気に溶け込む。

俺は正義なのか、それとも悪なのか。俺には分からない。

親の心子は知らずに知る

一人取り残されてしまった可哀想な私です。裏切り者どもが。

「それで〜?」

久しぶりに冷や汗が流れてるよ。

目の前で微笑む私の最大の恐敵。それで〜?は私の方ですよ。

「ルクはこの冒険にまだ付き合うのかなー?」

お母様、お得意な笑顔じゃ無くなってるよ。瞳と声が冷えきってますよ。

そんな悪魔に対してルクちゃんは、健気に立ち向かって行くのです。

「最後まで付いて行くよ。クレちゃんやイルちゃんが心配だもん！」

私が付いて行つて何が出来るか分からないけれど。でも、付いて行きたいのだあ！

「そう…」

お母様がとても悲しそうに笑う。かなり罪悪感が。と、思った途端だったよー。お母様がその御年に似つかわしくない少女のような素敵な笑顔を浮かべたのは。数々の経験から、私の背筋に悪寒が走ちやいましたー。

「クレサイダとイルサちゃんが心配かあ。本当にそうなのかなあ

」。ルクちゃんはリセ君がとても心配なんじゃないかなあ」

何を言ってるの、このおばさんは！

「リッ、リセ君は大丈夫だよ！何だかんだ言って強いし、結構しっかりしてるし、私が心配する事なんかないもん！」

そうだよ。リセ君は案外凄いなだよ。私は全然焦って無いよ！

「うん、ルクちゃんの気持ちはよく分かったよ。リセ君をとつても信頼してるんだね」

全然分かって無いよ！そこまで信頼して無いし、リセ君は私が居なければ全然駄目だし。そう、私が側に居なきゃ。

あつ、私は全然焦って無いですよ。

「素直にならないとイルサちゃんに盗られちゃうぞ？」

その乙女の心を土足で踏み荒らし、ダンスまで踊る言葉に、私はウーと小さく唸るしか出来ない。だって、リセ君とイルちゃんは仲良しでとてもお似合いなんだもん。

「ルクちゃん、可愛いなあ」

私の熱を帯びた顔を見ながらクスクスと笑う悪女。クウ、悔しいよ。

「ニーセさん、入りますよ」

ルクちゃんの日頃の行いの良さに天が助けを送ってくれました。

「皆さんを部屋に案内してって、チョッ！」

入って来たカーヘルおじ様にびっくりハグです。

「カーヘルおじ様、ルクをお嫁に貰って下さーい！」

お母様の矛先をカーヘルおじ様に向けさせてもらいますよ。

「ルクちゃん。私は既に妻が居るからね。残念だけど、それは出来ないよ」

爽やかに微笑みながら、さらっと流すカーヘルおじ様。子供の戯言を大人の貫禄で流しちゃいます。でもね、甘いよ。此方には最恐の味方が居るのだ。

「まあ、カー君はあ！家の子の純粋な想いを簡単に流して」

お母様、本領発揮かな。

「ドーナ領領主様何だから、ルクちゃんを側室においてあげてよ。ハーレム作っちゃいなよ」

「ルクは、カーヘルおじ様に愛されればそれでも十分です」

「私には今の妻が居れば十分ですよ。可愛いルクちゃんならば私みたいなおじさんより、もっと良い人を見つけられるよ」

笑顔で大人な対応だ。つまんないなあ。

「ルクちゃん。諦めなさいね。カー君はティスちゃんが大好きで、夜の営みもティスちゃんですら十分なんだって。ところでティスちゃんとは今も仲良くしてるのかなあ？」

「チヨツ、ニーセさん！子供の前で何て話を！」

カーヘルおじ様の顔は真っ赤です。流石はお母様。この人をからかう腕は一流だあ！私も修行しないとね。

「へえー、やっぱり仕事ばかりしてるんだあ。愛妻も愛娘も居なくて、仕事に生きる寂しい男だねえ。」

寝耳に聞こえてきた、お母様の声。魔話器で話している相手は直ぐに分かったよ。これは今日の復讐チャンス到来。明日の朝、からかってあげよう。狸寝入りでも、口角が上がっちゃうよ。

「認めるよ。ルクちゃんがクレサイダに付いてくこと。本当はおくても嫌だけどね。」

お母様の愉しげな声に、また、私の心が暗くなっちゃいます。やっぱり、反対したいんだね。

「でもね。昔は色々あったけど、やっぱり楽しかったんだよね。皆と旅していた時は」

お母様は私が小さい時から、昔の仲間たちとの話を本当に楽しそうに語っていた。

「私はルクにも楽しんで欲しいんだ。辛いことなんて山ほどある

だろうけど、仲間とふざけたり、色んなものを見て、学んで、強くなって、恋して」

何ででしょう。この声はとても心が暖まる。

「早く無いよ。全く、娘馬鹿だね。ルクちゃんはもう十八です。恋ぐらいしてますよ。駄目です。貴方には教えません。貴方に言ったら、ルクちゃんの未来の旦那様を殺し兼ねないからね」

魔話器の向こう側でお父様が言った言葉は良く分かつちゃう。でもね、お母様。別にリセ君はその私の未来の旦那様とかじゃないんだよ。

「分かるよ。私の娘だもん。私にそっくりで恋に不器用だけどね」

少しムツとしちゃうよ。別に不器用じゃないよ。あれ？お母様の声が変わった。何か緊張してる？

「あつ、あのね。素直になれないんだよ。そつ、その本当に好きな人には抱き付いたりなんか絶対出来なくて、スツ、好きとか上手く言えなくて、えつと、うん、これは、そのルクちゃんのことだよ」

ウー、確かにリセ君に抱き付くなんて無理だよ。面と向かって好きなんて言えないよ。

でも、ちよつと待ってね。それは本当に私の話なのかなあ？ねえ、お母様？明日の朝が楽しみだなあ。

「うん、10日後には帰るよ。あつ、その、あんまり仕事に根を

詰め過ぎないようにね」

魔話器を置くお母様。明日の復讐の準備は万全です？可愛いな、お母様は。

お母様は直ぐにベッドへと入りました。私の寝ているベッドに…。あれ、おかしいなあ。隣のベッドが空いてるよ。

ベッドを移らず、私の背中に抱き付くお母様。首筋に息が当たってるよ。

「それでどこから聞いてたのかなあ？」

やっぱりルクちゃんはお母様には敵いません。

親の心子は知らずに知る（後書き）

腰が痛い。何故か執筆活動に専念できますね。ほとんど動けないからでしょうね。

久々に確認したら、お気に入り登録者数が1000人を突破している。

皆様、本当にありがとうございます。

魔王な証明

外は雨が降っていて、憂鬱な日かな。私は勢いよく降る雨は好きなんだ。何故かわくわくするから。でも、ゆっくり降る雨はあまり好きじゃない。外に出れないだけだから。どうせ降るならば、一杯降って欲しいな。雨だあゝって感じで。

お父様達は何をやってるのかな。

「姫、しっかり聞いて下さい」

「ごめん。クレサイダ」

私の教育係のクレサイダは勉強になると厳しくなる。私の苦手な算術になると特に。早く終わらないかな。

願いは叶った。でも、意地悪な方向で。初めはこの城に雷が落ちたのかと思った。そのぐらい城が揺れた。でも、違ったよ。意地悪な方向で。

「姫はここに居てください！」

クレサイダは私の部屋から慌てて出て行く。取り残された私。好奇心を抑えて、部屋で良い子にしていたよ。

大分時間が経って戻って来たクレサイダ。その姿は血塗れで、涙にまみれていた。クレサイダが泣いたのを見たのは、これが最初で最後。

その手の上に赤く染まった布、そこに輝く紫の結片。

「イルサ姫、今日から貴女は魔王イルサテカです」

私は恐る恐る聞いた。お父様は一体どうしたの？と…。

これは夢だ。現実の中の夢だった。

私は今クーレに居るし、お父様がどうなったのか知っている。

ここは少し暑いなあ。汗でびっしょりだよ。

あれ、クレサイダが居ない。リセスも。何で居ないの？何処に行つたの？夜は寝る時間だよ。怖いよ、一人にしないでよ。

「イルサ嬢、何処に行くのかね？」

私が二人を探しに行こうとすると、セルツさんから静かな声がかかった。一人じゃなかったことに少し安心出来る。

「リセス坊たちは、時期に戻って来るさ。イルサ嬢が此処に居なかつたら心配するから此処に居なさい」

「はい」

ベッドには戻ったけど、リセス達が戻って来るまでは寝たくない。ゆっくり寝れそうに無いから。

ふと、魔王の証を取り出して見る。紫色に光る。あの時と変わらない。私とお兄ちゃんとは違って。

「それはヘブヘルの世界の欠片かね？」

セルツさんも身体を起こして、私の持つ欠片を見ていた。

「うん。魔王の証でもあるんだよ。これは魔王だけが持てるし、これがあると、魔力が切れなくて、魔法をどんどん使えるんだよ」

でも、これが在ったから、大切な人が私から居なくなった。お父様もお母様も、お兄ちゃんも。

「イルサ嬢、少し悲しそうだね？」

とても優しい声だった。だから、言えた。

「欲しく無かったんだ。でも、私が持つてる。本当はお兄ちゃんが持つてる筈だったのに。私は魔王になる筈じゃなかったのに」

そつだよ。私は魔王は出来ないんだよ。魔導長クレサイダや執政長シユナアダが手を貸してくれなければ。

「イルサ嬢は魔王が嫌なのかい？」

「違うよ！私が魔王なのが嫌なんだよ。私はお父様みたいな立派な魔王じゃ無いもん」

「では、立派な魔王って何なのかい？」

それは…、お父様みたいな人で…、ヘブヘルを治めて…。

「王に必要なのは知ることだ。良いことも悪いことも。おじさんが昔会った王子様の言葉だよ」

知ること。良いことも悪いことも。でも、悪いことは知りたくないなあ。

「イルサ嬢はまだ若い。だから、辛くても知りなさい。そうすれば、イルサ嬢も立派な魔王になれるさ」

少し嬉しい気がする。私が魔王になれるんだ。お父様みたいに。

「本当に立派になれるかな？」

「おじさんはなれると思うよ。みんなに愛される魔王にね」

みんなに愛される魔王。それは良いな！そうになりたいな。そうすれば私の周りにみんなが来るんだ。誰も居なくならないんだ！

「姫、起きてられたんですか？」

「イルサ嬢は君たちの夜歩きを心配していたよ」

「それは心配をおかけしました」

クレサイダが戻って来た！良かった。リセスも一緒だ。やっぱり私は今は一人じゃないんだよ。
そうだ！

「クレサイダ、リセス。一緒にベッドに寝よ！」

「ナッ！何、バカな事を言ってる！」

「姫！何を言ってるのですか！」

凄い！クレサイダとリセスの声がピッタリだ。良いなあ。二人はとも仲良しなんだなあ。私も早くリセスと声が揃うほど仲良くなりたいなあ。

「駄目なの？一緒に寝たいなあ？」

一人で寝るより、凄く安心するもん。

「だっ、駄目に決まってるだろ」

「だっ、駄目に決まってます」

「よし！おじさんが添い寝して…」

「セルツ、焼き殺すよ」

ウー、みんなに避けられたよ。

私って、本当にセルツさんの言うようなみんなに愛される魔王になれるのかな？

魔王な証明（後書き）

更新遅くなりすいませんでした。

今年から夏休みがあるわけが無く、それどころか仕事が増える。

なるたけ早く更新するよう心がけます。

次回、物語は新たな世界へ

新たな異世界へ

まだ日が登ったばかりだと言うのに、日射しは強く俺たちを照りつける。熱の籠る聖人セレミスの墓前に集った人の顔を見て、クレサイダが問う。

「それで、君たちはついて来るのかい？」

「決まってるじゃない。クレちゃんもルクちゃんが居ないと凄く寂しいでしょ」

「おじさんもここまで来てしまったからね。最後まで付き合っただけようではないか」

クレサイダは既に言及する気も無く、盛大な溜め息を漏らす。反対にイルサは大歓迎している。

「リセス君、ルクを宜しくお願いね、色々な意味で。…クレサイダ、私の可愛い娘を苛めたら怒るよ」

クレサイダに未だに敵意を見せるニーセさん。俺にこの問題娘を任せられても。色々な意味で面倒事だ。

「それで君たちが行くアースはどういう世界なんだい？科学が発達しているとは聞いた事があるけど」

「僕だって初めて行くんだ。知ってる訳無いだろ」

カーヘルさんの質問にクレサイダが素っ気なく答える。フィフレ以

上に異様な世界で無ければ良いが、ほぼ情報が無いと不安になるな。危険な世界かもしれない。気を引き締め無ければいかな。

「とつても楽しみだねえー！」

「うん！楽しみだね！」

俺が気を引き締めなくてはいけないらしい。

カーヘルさんの手が俺の肩にかかった。これは同情ですか？

「リセス君、もう少し気を抜きなよ。肩に力が入り過ぎて構えてると、予想外の事態が起こった時に柔軟な対応が出来ないものだよ」

「そういうものでしょうか？」

優秀な人達と旅をしたカーヘルさんに、俺にかかる心労を理解出来るのだろうか？このお気楽メンバーで、俺やクレサイダまで気を抜いたら、予想外の事態で全滅しそうだ。

「案外、いつも気を抜いていて頼りなさそうな人の方が、緊急事態に頼りになるものだよ。私はそれをライシスさんやニーセさんのような人達を見て学んだよ」

そう言うカーヘルさんの笑いながらの視線は、俺でもニーセさんでもなく、ルンバットの争乱の犠牲者達の慰霊碑に注がれている。ケルック・ラベルグ、一体どんな人物だったのだろうか？

「リセス、そろそろ行くよ。アースの鍵を貸してくれ」

クレサイダの声で、俺の思考は中断され、クレサイダに指定された

セレミスキーの一つを渡す。

クレサイダがセレミスキーを手のひらに納めて、魔力を溜める。俺は二回目となるこの召喚門が現れるまでの間。

馴れる気がしない。クレサイダの込める魔力と比例して、俺の緊張感はどうどんと高まって行く。次なる世界はどんな世界か、どんな人に出会えるのか。

自分の中に楽観を見つけ、自嘲してしまう。これでは、イルサと同程度の能天気さじゃないか。気を引き締めなくてはな。

新たなる道は開かれる。クレサイダはその門へと何の迷い無しにくぐって行く。見送りに一礼だけをして、後を追うイルサ。俺もイルサの真似をさせてもらった。

「行ってきたあゝす！」

俺の背を追って聞こえるルクの声。

俺たちは再び新たな世界へ。

新たな異世界へ（後書き）

大変更新が遅くなってる天見酒です。更に今回はいつもに増して短いです。

今回で大二部終了。次回からアース編に入っていきます。

頑張って更新していきます。御応援宜しくお願いします。

科学世界アース

科学世界アースの様相にイルサが一人で凄いを連発しているが、これは俺も驚くしかないようだ。

五階建ての高さを誇るシール工城を見馴れた俺でさえ、何百階あるのか予想もつかない高さの長方体な建物が天を付きながら並ぶ。更にはクーレでは高級なガラスを惜しみ無く建物に使う綺麗な建物。

地面は全面石畳。黒灰色の石道を通る様々な色の動く鉄の塊達。中がくり貫かれて、人が入っている。黒い車輪がついているところを見ると馬車のような乗り物なのか？鉄を動かす、高度魔法だがこれは科学の力なのか。

街を歩く人が多い。大半の人は白いシャツに黒か茶の上着、そして黒く薄いズボンという服装をしている。

首に色とりどりの布切れを巻いているのは、まじないか何かの類いか、ナフキンなのだろうか。それとも、防具なのか？

その俺からすれば異様な格好も向こうからすれば、俺たちは異様なのだろう。歩行者達は視線を僅かに此方に向けては、目を反らして歩き続ける。どうやらこの世界でも、イルサが目立ち過ぎるらしいな。この世界の通行人達は主に黒髪、黒眼。俺やルクと同じ茶髪も居ることには居るが、イルサの赤髪、赤眼は見掛け無い。更に、イルサに生える感情に合わせて動く翼は珍しいのだろう。

「それでルク。欠片は見つけられそうかい？」

何故かいつもの元気の良さが無いルクにクレサイダが話しかける。

「今度は気持ち悪いぐらい魔力の反応を感じないよ…。これだけ人が居るのに」

本当に気分が悪そうだ。この世界の住人は魔力を持っていないと言っただろうか。俺には魔力を感じる能力が無いから、ルクの気持ち悪さは分からない。目が突然見えなくなった気分なのだろうか。

ルクの弱音にクレサイドは頭を抱え出すと俺も頭を支えたい程重くなっている。

これだけ人がいるんだ。誰かに情報を貰おう。その結論は、この世界の住人の危険性を良く知らない俺の早急な思考だった。

それを取り出したのは、顔からして俺よりも若い女の子だった。長方体の片手で持てる薄い小箱。コンパクトのように上下に開き、それをイルサへと向ける。その開かれた上部に丸いレンズのような物が付いている。

俺に走る緊張。もしや、この世界の銃か！

クレサイドがその女の子に向かって火の魔法を放つ。その兵器を撃ち抜く。

「おい、あいつ、火炎放射機なんか持ってるぞ！あぶねえぞ！」

「誰か警察を呼べ！」

先の女の子に代わり、ポケットやバッグから、形や色は僅かに違えど先程と似た武器を取り出すアースの住人達に囲まれた。

「チツ、全員殺るか」

「駄目だ！多分、ケイサツとか言う軍隊が出てくる。逃げるぞ！」

カエンホウシャキやら分からない単語が多いが、ケイサツなるものがこの世界の軍であろうことは理解出来た。国を代表する軍とやり合うのはまずい。ここは逃げるのが常道だ。

それにシーベル工では、銃を持つには、騎士団に入るか、国家資格を得なくてはいけないが、老若男女問わず、謎の最新兵器を持っているこの世界の住人の大群に勝つ自信は無い。

困惑の表情を浮かべるイルサの手を引き、素早く生まれた人の輪を強引に突破。ルクやクレサイダもついて来ている。セルツはイルサの肩の上に居る。俺たちの後ろから、光や魔写機のシャッターのような音が聞こえるが、被弾はしていないようだ。

くそ、訳も分からず集団で発砲して来るとは、ここは何て危険な世界なんだ！

科学世界アース（後書き）

他人を無許可で写メを撮るのは如何なものかと思っている天見酒でした。

携帯電話は便利にですね。

日常の続きに

大学を出て二年が経つ。二年も経てば、就職時に会社に期待していた何かなど等に忘れちゃった。

朝起きれば、ただ単に繰り返す日々。それは俺の天職から転職へ導く。

結局、不景気でフリーターとなってしまうた。俺の夢って何だろうな。

いけない。酔っ払うとこういう負の感情が駄々漏れてしまう。歳を食ったなあ。

自宅に帰るには、明るい表通りを歩いた方が早いけど、俺は腕時計でまだ八時と言うことを確認して、わざわざ暗い裏通りに入る。人混みを一人で歩くのは嫌いだ。どっちみち、九時には家に着くだろう。何より、人目の無いところに入り込めば歩き煙草を咎める者は居ない。いつもの公園で一服して帰ろう。

この俺の習慣に従った行動が正しかったかは、結末を知っていても分からない。

公園には珍しく誰も居なかった。たまに見掛けるカップルや浮浪者も居ない。俺の貸し切りのようで良い気分だ。今だけ俺専用のベンチにだらしなく身を投げ出し、煙草に火を付ける。

気分は良かったが、俺の考え出したのは、明日の予定。バイトは入って無い。イコール予定無しだ。気分が滅入る。更に気が滅入ったのは、俺の公園に誰かが入って来た事だった。俺の目の前を横切る珍妙な集団。

「お腹空いたよー」

鈴のなるような間抜けな声。大学生ぐらいか？というかコスプレ？赤髪に染めて、瞳に赤いカラコン、レプリカだろう剣を帯び、背中には天使の翼付ける徹底ぶりだ。そして何故、肩に栗鼠を乗っけている？最近、アニメや漫画から足が遠退いてるから何の真似かは分からないが、連中に関わり合わない方が良いことは分かった。

「分かったから少し我慢しろ、イルサ。クレサイダ、これからどうする」

こちらの茶髪男子はチラツと鋭い黒眼で俺を見て、赤髪コスの子をなだめる。服装は黒いパーカーに黒いジーンズだが、銃刀法違反って知ってるか、僕。レプリカの帯刀が犯罪になるかは俺も知らないけどね。

「ここで一夜を明かすしか無いだろ。他に野宿に適してそうな場所は無いんだから」

おいおい揃いも揃って、無一文なのかよ。

「エエー、野宿ウー！街の中なのに」。クレちゃん、何とかしてよ」

無理難題を言うのは黒いローブを纏う魔女ルックの女の子。全く奇妙な連中だ。

俺はこんな連中と関わりたくは無かった。が、野宿という言葉に仏心が出してしまう。

「ここで野宿は止めとけよ。雨が降ったらどうする気なんだ。俺が

帰り賃ぐらい貸してやるから家に帰れよ」

その連中の背中に有難き声を掛けてやる俺。振り返る珍妙な青年達。

「まだ家に帰れないだよ」

魔女っ子が嘆く。おい、集団家出か。しかもそんな格好で…。

溜め息しかでない。しかし、こんな若者達をここに放置したまま帰るのも、僅かに心苦しい。

一晚、この良きお兄さんがこの青年達に社会の現実や服装について説教でも垂れてやるか。酒の肴にはなるだろう。どうせ、明日はフリーだ。

そんな軽い気持ちで出した言葉だった。

「今晚、俺の家に泊まるか？狭いけど」

「良いんですか！」

赤髪コスが喜面を表す。最近のコスプレの道具は凝ってるな。その翼が動くんだ。

「申し訳ないですが、お願い出来ますか？」

「ああ、良いよ」

しっかりと礼儀正しく頭を下げる刀青年。
最近の若者も捨てたもんじゃないな。

「いやはや、この世界で貴公のような紳士にあえて光栄だよ」

うん？四人だけだよな？赤髪の子の方から爺臭い台詞が聞こえたぞ。

「地獄に仏とはこのことですよ。本当に助かるよ」

栗鼠が喋ってる？

「えーと、君たちは腹話術師なの？」

そうか、それでそんなおかしな格好しているんだな。

「フクワ術師ってのは何だい？」

長髪の男が真面目顔で俺に聞き返してくる。

これが俺の仏心が産み出した、とんでもない日常の続きの始まりになった。

日常の続きに（後書き）

今回はリセス主観に戻ります。この日本に似た異世界を、他世界の人が見たらどう見えるか。書いていてなかなか楽しい視点ですよ。

どうぞ、次回もお楽しみに！

科学世界のご馳走

「つまり、あんた達はその世界の欠片とか言うのを集める為に異世界からこの世界に、召喚魔法を使って来たって事？」

喋る栗鼠、セルツの活躍(?)により、俺たちがこの世界の人間じゃないことを信じ始めてくれたウエダさんに、クレサイダが俺たちの目的をカーム達の存在を意図的に抜いて説明した結果、ウエダさんはすんなり飲み込んでくれたようだ。

「そう言うことだよ。理解出来たかい？」

「理解出来そうで出来ねえよ」

クレサイダにそう答えながら、住宅の並ぶ一軒の鉄柵を開くウエダさん。二階立て瓦葺き屋根の家屋。

ウエダさんが玄関を鍵を開けて俺たちを中へ率いれる。ウエダさんが暗闇の中を先に進んで壁を触る。すると、急に天井から光が満ちて、明るい廊下が現れる。

魔鉱石のシャンデリアより明るく、まるで昼間のようだ。

「此方がトイレで、此方が風呂な。どうした、遠慮なく上がれよ」

啞然としている俺たちに呼び掛けるウエダさん。ルクがその誘いに真っ先に誘われ、家にかかるようにする。

「あっおい！靴はそこで脱いでくれ」

シーベル工育ちのルクには理解出来ない行為だろう。俺も母上にカイナに連れて行かれた時はこの習慣に驚いた。
どうやらアースはカイナの文化に近いらしいな。

ウエダさんが、靴を脱いだ俺たちをリビングに招待したところで、節操なく鳴いているイルサの腹に対して、カップメンなるものをご馳走してくれるらしい。

初めて聞く料理名に期待していたが、俺たちの前に出てきたのは、人数分の紙で出来た円柱の容器とポット。ウエダさんがポットに入ったお湯をその紙の容器に注ぐ。中には何やら固そうな物が入っていた。

「箸よりもフォークの方が良いか？」

イルサ達にカップメンという料理を置きながらウエダさんは尋ねる。ルクやイルサはこの家に溢れる奇怪な機械を眺めながら頷く。斯く言う俺も低い本棚の上に置かれた黒くて四角くガラスが全面に付いた箱や、壁に飾られた丸くて三本の棒で一つの棒が常に動いている機械などに興味は惹かれる。

俺やクレサイダが着いている木床の上のテーブルの後方に、イルサやルクは開け放たれた襖の奥の畳上の卓袱台に着いている。この世界はシーベル工文化もあれば、カイナ文化でもあるのか。

俺に理解出来そうな事から理解していこう。早速、出された食事を食そうとしたイルサにサンブンカン待つて、と指示を出したウエダさんも同じ考えのようだ。

「それで、世界の欠片とか言うのは見付かりそうか？」

「全くないね。僕たちはこの世界の知識、土地勘すら無いからね」

クレサイダがあからさまに言葉の裏に隠した言葉は俺にも読み取れる。この人に手を貸して欲しいのは皆同じだろう。唯一空いている俺やクレサイダの前の椅子に腰を下ろすウエダさん。

煙草を口に加えて、中で液体が揺れる緑に透き通る細長い小さな小道具を取り出す。上部を親指で撫でると火が生まれる。

その不思議な道具をテーブルに置き、黙って俺たちを監視し続けるウエダさん。クレサイダの遠回しなお願いの返事を考えているのだろう。

「あつ、そろそろ食って良いぞ」

俺の目の前のカップメンを煙草で指すウエダさん。サンブンカンは過ぎたらしい。お湯を入れて、このわずかな時間待つだけで食えるものなのか？

俺たちの後ろで紙を破る音が聞こえる。部屋の中になんとも良い匂いが満ちてくる。

だが、俺やクレサイダは手を付けない。今はウエダさんの返事を待つ。

「ウエダ殿。我々としては、貴公のお力添えをお願いしたいのだが、どうかね？」

テーブルの端に登っていた。セルツが今度は率直に協力を頼む。ここまで御世話になっておきながら図々しいとは思うが、今の俺たちにはこの世界で他に頼れる人物は居ない。

「俺は大したことは出来ないぞ」

念を押すように言うウエダさん。俺たちが各々に礼を言い出すと照れ隠しか、早く食えよと笑った。

カップメンは旨かった。でも、俺には少し味付けが濃いように思った。しかし、お湯だけで直ぐに出来上るとは便利な料理だな。やはりこの世界は凄いらしい。

科学世界のご馳走（後書き）

カップメン！

それは貧乏学生だった天見酒が酒に金を消した時の救世主。

正に科学技術の結晶です。

大学生読者の皆様。くれぐれも不健康な食生活は止めましょう。

離れてた、離れていく

この世界に来て、三日目の日が暮れようとしていた。二日前にウエダさんの座っていた公園のベンチで休憩する。

長い柱に付いた時計は六時を示している。昨日一日を費やして、覚えてたこの世界の数字や時計の読み方や僅かな知識。この世界の文字は複雑過ぎて覚えられた代物じゃなかったがセレミスキーに刻まれているだろう言語変換魔法で言葉が通じれば問題無い。とは、いかなかった。

「欠片について、なぐんにも分からなかったね」

俺の隣に座っているルク。ウエダさんから借りたこの世界のデザインの服、何か流線で文字の書かれたTシャツにジーンズを着ている。いつもローブを好んでいるルクのこの姿に、俺は何か可笑しく思える。ルクがルクじゃないように見える。そういえば、今日のルクは妙に大人しい。

「なっ、何かな。私の事じつと見ちゃて」

「いや、特には何も無い」

今日のお前、何か変だぞなんて、正直に言っただけルクの報復を受けたくは無い。口は剣より強しと言うことだ。

そんな俺の厳選した言葉に眉をしかめたルク。失敗したらしい。どんな報復が来ることやら。

「リセ君と二人っきりって久しぶりだねー？」

「あつ、ああ」

俺から視線を外して夕日に顔を向けるルクに、身構えた俺は肩透かしを喰らった。夕日を受けて、顔を赤く照らし出されたルク。本当に前、今日はどうした？

ルクと二人つきりか……。昔はジンさん達が来た時に良く遊び相手をしていたものだったな。そういえば、今日のルクはあの頃の借りてきた猫のように大人しい。大人しい分には此方は大助かりだが……。

そういえば、ヘブヘル姫は大人しくしているだろうか？イルサやクレサイダは翼が目立つということで、今はウエダさんの家で留守番。喋る栗鼠に到っては言わずもなだ。

俺とルクだけで、情報収集をしに行くと言ったら、私も行く駄々をこねて、泣き出す有り様。クレサイダに宥められ、鎮静したもの、家を出る時の捨てられた子犬のようなイルサの涙目には参った。ウエダさんにこの世界で金の代わりになると言う、1000とおじさんの顔の書かれただけの紙切れを貰った事だし、何か食べ物でも買って帰ってやるか。

「……リセ君、今イルちゃんの事考えてたでしょ？」

「ああ、何か食べ物でも買って帰ってやるかと……」

「へへえ、リセ君って優しいね。イルちゃんには」

ルクの声のトーンが落ちてる。これはルクが不機嫌だということだ。俺はイルサの事を考えたらいけないのか？今のやりとりで、何でルクの言葉に棘が出てくるのかが分からん。

「リセ君って、イルちゃんが大事なんだね」

「だから、どうした？」

別に良いだろ。イルサは仲間なんだ。大事にして何が悪い。少し、ルクの物言いは気に障る。だから、ルクに口では勝てない事は重々承知していたが、買言葉になってしまった。ルクの眼が細まった事により、己の愚かさを知る。口技では、ネズミがドラゴンに立ち向かうような勝ち目の無い勝負だ。

「…来た」

目を元のサイズに戻したルクが突然呟く。

「この感じ、カйм達だよ。この世界に来たよ」

クソッ、せつかく三日前にこの世界に来たのに、欠片への差は埋ま
ったか。

ルクと口喧嘩をしてる場合では無い。一端、休戦だ。

「あいつらの位置を探れるのか？」

「うん！カйм達の魔力は良く分かるよ」

自信強く頷くルク。

「よし。イルサ達を迎えに行って、カйм達を捕捉するぞ！」

勢い良く立つ俺。反して、ベンチに座ったまま俯いているルク。

「おい、どうした？」

俺の声に顔をあげて、元気の無い笑みを浮かべるルク。

「私は先に、カイムを見つけてるから、イルちゃんを呼んで来なよ」

そう言っって勢い良く駆け出すルク。

「おい、一人で危ない！待て！」

俺の心配を置いて行くルク。さっきの些細な喧嘩を引き摺ってるのか。

クソッ、先にルクを追うべきか、先にイルサ達と合流するべきか？

迷いは直ぐに消えた。俺とルクだけでカイム達に太刀打ち出来る訳無いだろ！

俺はウエダさんの家を目掛けて走り出した。

ルクのバカ野郎が！

離れてた、離れていく（後書き）

やあやあ、魔冒を読んでくださる読者様。お久しぶりだねえ。

ごめんなさい。勝手に更新を休みました。少し魔冒でどう書いても、つまらないと言う状態が続きました。少なくとも作者が書いてつまらないと思う物を、読者が読んで面白いと思う筈が無い。俺の尊敬する直木賞受賞作家の御言葉です。

しかし、天見酒、パワーアップをして帰って来ましたよ。ドラクエ6の主人公がやつと転職出来るようになってパワーアップです。小説に関係あるのか？無いです。怒らないで下さい。

これから少しはパワーアップしたかもしれない天見酒のお送りする魔冒を宜しく願います。

賢い僕と賢しい栗鼠の関係

先程まで、落ち着き無く家の中を徘徊して姫は、今はタタミと言う草を編んだ床に落ち着き、寝息を立てていらっしやる。ヘブヘルの王たる姫をこのような床上に寝かせて置いて良いものか？しかし、下手に起こし兼ねない事はするべきでは無いだろうな。リセス達が帰って来るまではこのままにしておこう。それが良い。でも、このままでは風邪を患うかもしれない。

リセスが畳んだ閉まった薄いかけ布団を引っ張り出し姫にかける。身動く姫が起きないかとびくびくしながら。自分で可笑しいと思ってる。魔王シールテカの左腕、冷酷無比の魔将クレサイダと呼ばれた僕がこんな小娘にビク付いているのだからね。

しかし、仕方が無いじゃないか。見たまえ、姫のこの凜々しい寝顔を！

こんな無邪気なお顔を見せられたら、どんな敵であっても戦意を根こそぎ奪われるでは無いか。その姿を見るだけで誰もが恐れおののいたシールテカ様のような高貴なオーラを、寝ながらにして体現してしまうとは、姫はなんて恐ろしい方なんだ。

「…まだ、食べられるよお」

姫が寝言を漏らす。ああ、姫は寝ながらも己の欲を満たす事に熱心なのですね。シールテカ様に似て、なんて強欲なお方なんだ。いや、食欲に関してはシールテカ様以上の凶悪さ。姫はシールテカ様を越す偉大なる魔王に成られることだろう。二代に渡り偉大なる魔王様に仕えることが出来るなんて、僕はなんて幸せものなんだ！

気持ち良さそうに寝ていられる姫。硝子の代わりに網を張った窓から入ってくる涼しげな夕風に遊ばれる、夕映えする赤髪。魔王様を洗脳したあの忌々しいシルビーから受け継いだ髪色。あの嫌いだつた髪。それが姫の頭を優しく覆い、姫と一緒に呼吸をしているように愛らしく揺れ動いている。

触りたい。その髪の手を降っているような動きに、僕にそんな衝動が出てくる。少しぐらいならば良い……駄目だろう！僕のごとき者が姫のお身体を汚す行為をするなんて、絶対に駄目に決まってるだろ！全くなんて事を考えるんだい。

でも、姫は寝てるし、誰も見ていないし。誰にもばれない。伸ばす震える人差し指を。僕は今、姫の髪に触れようとしている、もし、シルテカ様がいらっしやったら……殺される。でも、今は居ないじゃないか。こっ、このくらいどうってこと無いさ。

指で撫でるだけだ。一向に震えが止まらない僕の手。

急に指を開く。焦り、気付いた時には姫の顎の下に首を絞めようとするように。僕の意志じゃない。身体が動いたとしか言えない。

「クレサイダ！」

見られていた。そう言えばこいつが居たんだ。今だけはこいつに感謝しよう。ギリギリで止めた手。この身体は姫を殺そうとしているってのかい。

「クレサイダ君、イルサ嬢の寝姿に欲情してしまうのは、若い証拠ではあって良いことだと思うがね、寝込みを犯そうとする根性は、おじさん、関心しないね」

さっきの感謝は撤回しよう。今すぐ、火葬してやる。いや、こんな

栗鼠公にむざむざと魔力を使って良い状況じゃない。

「セルツ、頼みがあるんだ」

「大丈夫さ。今、見たことはリセ坊やルク嬢、勿論イルサ嬢には黙っておくよ」

「少し真剣な頼みなただけどね」

癪だがこいつを頼るしかない。

「君は僕のこの身体が本体じゃないことは良く分かってるよね」

「ああ、嫌と言うほど分かってるよ」

それは確認するまでも無かったよね。君は僕の本性を良く知ってるのだから。

セルツに説明するためにも、僕自身が現状を整理して受け入れるためにも僕は口を動かす。

「この身体は今僕が魔力で押さえ付けてる。でも、この世界に魔力は存在しない。君も辛いだろ？」

「ああ、私たち魔力を糧に生きる生物にはね。それで、クレサイダ君が魔力が補給出来ないと言うことは…」

理解が早くて助かるよ。

「この身体の元々の主がコントロールを取り戻すってことさ」

クーレでしっかりと魔力を取り込んでから来るべきだった。魔法が

無い世界という時点で魔素が存在しないことは予想出来たことだ。
この世界へ来るために使った莫大な魔力は仕方なくても、責めてフ
イフレで消費した魔力を埋めてから来るべきだった。

「この身体の本来の持ち主は、姫にとつてとても危険だ。だから、
もし僕が抑えられなくなったら、迷わず殺してよ」

この身体を制御出来ない状態の僕は心中するしかないけどね。姫の
危険には僕なんか変えられない。

「何でおじさんに頼むのかな」

愉快そうで哀しそうな声のセルツ。

「君が適役だからだよ」

リセス、あの甘ちゃんはずっと手遅れになるまで動けないからね。
ルクなら出来そうだけど。

「それに僕を倒すのは、あいつらの中で生き残った君の役目じゃないのかい？」

僕の皮肉に笑いながら“考えておくよ”と言うセルツ。少々不安は
残るが、手の打ちようが他には無い。

ふと、部屋が明るくなる。姫がその明るさを手で打ち払おうと動く。

「お前ら、明かりぐらい付けろよ。昨日教えただろ」

アルバイトなる仕事を終えて帰って来たウエダ。

「リセスやルクはまだ帰って来てないのか？」

今にも破けそうな白く薄い袋をテーブルに起きながらのウエダの質問に、既に日がほとんど落ちていている事に気付く。

少し遅いんじゃないか。二人して迷ったのか？いや、僕や姫の所在を感じられるルクがいて、それは無い。全く、僕に余計な心配をさせるなよ。

その時だった。リセスだけが、飛び帰って来たのは。

賢い僕と賢しい栗鼠の関係（後書き）

クレサイダが色々と壊れちゃう話でした。

次回はルク視点に移ります。リセスの出番少くない？と思つ今日この頃。まあ、良いか！

… 良くないですね。

私の独奏

私らしく無く、頭に来ちゃってるルクちゃんです。

こんな我が儘をやっちゃうなんてね。でも、しょうがないよ。リセ君が悪いんだもん。

イルちゃんばかり見てる。少し女の子への配慮が足りないよねえ。美少女が側に居るのに他の女の子のこと考えるなんて。

イルちゃんは確かに可愛いし、とても素直だけどさ。私の方が付き合い長いんだよ！

リセ君、変わっちゃったなあ。昔は優しくかったのに。今でも優しいけど何か違うんだよ。何なんだろうね。

私は変わってないよ。だから、苦しいよ。昔からリセ君に…。

考えちゃうんだよね。私は役に立ってるかな。ただ、我が儘やってるだけに見られて無いかなあ。やっぱり皆のお荷物になってるかなあ。

私の旅の始まりは、アレンさんがナールスエンドにリセ君に会いに行くって言うから我が儘で同行した。そこでリセ君の隣にはイルちゃん居て、一緒に旅するっていうから、我が儘でついて来て。今日は私の我が儘でリセ君と喧嘩して、私の我が儘で飛び出して。

私の我が儘っぷりにちよつと泣きなくなってきたかな。リセ君が私を直ぐに追って来てくれないのは当然だよ。こんな可愛く無い私なんてね。

「マイナー、この建物の中に欠片は在るのだな」

「はい、オシリスの杖はここを指しております」

一棟の背の高い建物の前に立つ。この世界に浮く服装と姿の目立つてる集団を発見しましたよ。間違いなくカйм達だね。シャプトなウニロなんて、注目の的だよ。

そして、オシリスの杖。ドゥーチの杖の事だろうけど、欠片の位置を探れるんだ。ファイフレで起こった現象の原因だねえ。恐らく世界の欠片と密接に関係してる品。世界の欠片とドゥーチの杖。これらを集めると何が出来るのか。クレちゃんの隠すカймの目的。鈍いリセ君は気付かなくても、賢いルクちゃんは勘付いちゃうんだよね。

道に沿って綺麗に並んでいる木の後ろに隠れながら、敵情観察。歯痒いけれど、一人で来たから何も出来ない。何やってるのかなあ、私は。

声を落としたカйм達。何かの相談かな？私も是非聞きたいんだけどな。と思っているとカйм達は欠片のある建物へ歩き出す。顔傷ニンジャさんを残してね。

見張りかな？と思ってもこちらに近づいて来る顔傷さん。

「出てこい！そこに居るは分かっている」

バレちゃった？

そっか、欠片の位置が分かるんだよね。ルクちゃん、うっかだー！

「あはは、お久しぶり、格好良い傷のおじ様あ。ご機嫌いかが」

？」

相手は私の愛くるしい笑顔と愛嬌たっぷりの挨拶にカタナを抜いて応えてくれましたあ。ご機嫌斜めですね。

私としてはゆっくりお話でもしてたいなあなんて、上着で隠した銃に手が伸びてたり。

銃に手がかかる前。既に相手の得物が私を捉えられる位置にある。煌めく刃。これは間に合わないや。瞼は恐怖で自動的に落ちる。

鋭い鉄の鳴る音。開いた眼に映ったいつもの背中。

「ルク、一人で無茶をするな！」

こちらを見ずに怒る背中。言い返したい気持ちはいっぱい。でも、言い返す言葉は無いよ。

ずるいな、リセ君は。何で私の格好悪い姿を見て、自分の格好良い姿を見せるんだよ。

ずるいよ、リセ君。

訳が分からん

全速で戻って来た俺に、クレサイダは部屋から不機嫌な顔を覗かせる。

「騒々しいよ、リセス。姫が起きられてしまったじゃないか」

「そんな事を言ってる場合じゃない。カйм達がこの世界に来た！」

「チツ、もう来たのか。姫！セルツ！」

状況の把握が速くて助かる。

「はあ？カймって誰だ？というかルクはどうしたんだ？一緒に行つたんだろう？」

ウエダさんが玄関に現れる。

「カймは俺たちの敵だ。ルクは…、勝手にカйм達に向かって行った」

クレサイダの顔が曇る。

「ハァー！一人で行ったのかい！というかどうするんだよ！ルクが居なければカйм達の場所なんて分からないじゃないか！」

俺だってどうすれば良いかなんて分からない。

「ルク嬢やカйм達の居場所はおじさんが分かるさ。おじさんもクーレの欠片に触れたからね。ルク嬢よりは劣るがこの世界ならば問

題無いよ」

部屋から出て来た寝惚け眼のイルサの肩で暴露するセルツ。そういう事は早めに言ってくれ。

「とにかく急ぐよ!」

クレサイダの言葉に家を出ようとする俺たちにウエダさんが止める。

「待て! 急ぐんだろ? 車出してやるよ」

不思議なものだ。こんな鉄の塊が馬に引かれている訳でも無いのに、こんな速度で動くのだから。

「あっちの方にルク嬢はいるよ」

「あっちの方って、迂回しないといけないじゃんかよ。道は分からないのかよ」

丸い輪を回しながら、聞くウエダさんにセルツは頷く。

「それで、ルクをどうして一人で行かせたんだい?」

手持ちぶさたになったクレサイダが尋ねてきたので、訂正して答えてやる。

「行かせた訳じゃない。あいつが勝手に行ったんだ」

俺が責められなければいけない理由は無い。

「ルクは小賢い奴だから、そんな無謀な事はしないと思ってたけどねえ」

「俺もそう思ってた。今日のルクはおかしかった。家を出てから妙にしおらしかった。それなのに、急に怒って、拳げ句の果てに独断専行だ」

ルクへの罵りを止める。俺はかなり苛ついているらしい。

「リセス、ルクちゃんと喧嘩したの？」

泣きそうな眼で俺を見るな。俺が感じる必要の無い罪悪感が出てくるだろ。

「別に喧嘩はしてない。イルサの話したら、ルクが勝手に怒ったそれだけだ」

ところで、さつきから俺以外の男性陣の漏らして息の合った溜め息は何なんだ。

「リセスさあ、僕は言えるような事じゃないけどさあ、ルクへの態度を改めなよ。もっと気を使ってあげなよ」

「俺は十分気を使ってる。これ以上どう気を使えと言っただ？」

ルクの我が儘をこれ以上配慮してたら、俺が持たない。

「リセス坊は若いからしょうがないかも知れないがね。ルク嬢の気持ちも考えてやりなさい。ルク嬢も御年頃な女の子なのだよ」

「俺にはあいつの頭の中ほど理解出来ないものは無い。それでも俺は年頃の娘に対しての配慮はしているつもりだが」

何故に俺が責められているのか分からない。俺はルクに悪い事をしたのか？思い当たる節は全く無いのだが。

「とにかく、リセス。気を利かせろ。そして、機会を見て今日の埋め合わせしとけ。それにしても、俺は既に二人が付き合ってるのかと思ってたぜ」

ウエダさんの意見に納得がいかない。しかし、周囲からここまで言われると俺が悪かった気がしてくる。因みに俺とルクの付き合いは長いぞ。産まれた時から家族ぐるみの付き合いだからな。

「ここら辺りに居るよ」

「ルクちゃん、居た！あつちにカймも！」

セルツの言葉に合わせてイルサも叫ぶ。

カйм達は木の後ろに隠れるルクに背を向けて歩き出すが、顔傷がルクの方へ。不味いな。

車の扉を開けて飛び出す。

ルクが木の影から出た。カタナを抜いた顔傷のルクとの間が埋まる。その埋まる間に入ることの出来た俺。

「ルク、一人で無理をするな！」

俺から謝る言葉は出なかった。皆の言った事の訳が分からなすぎて、
自分も訳が分からない事を言っていた。

訳が分からん（後書き）

題名通り、訳が分からなくなったかもしれません。

まあ、これからもしセスにはもっと困惑してもらいましょう。

訳が分からない小説書いてんなあゝ！とお怒りの方は、お手数ですが感想を下さい。

お怒りで無い方も是非感想を下さい。

感想に飢えているお年頃な天見酒です。

真剣勝負

どんどん人は集まって来る。周囲の人から漏れる共通の単語、エイガの撮影、テレビの撮影。そりゃ、何だ。

逃げようとせず、驚こうともしない観衆。どうやら、ウエダさん曰く、この世界では一般市民の武器所持を禁止する法律は有るらしいのだが、この世界ではカタナで切り合う光景は日常茶飯事らしい矛盾を感じずにはいられない。

ガラスが派手に割れる音。カйм達の仕業か。俺から距離を取ろうとする顔傷。素早く後退する顔傷に刃を立てて迫る。

「全員、先にカймを追え！こいつは俺が抑える！」

こいつ一人に全員でかかっている場合では無いな。

顔傷に至近距離でつばぜり合い、こいつが他に気を向けられないようにこの距離を保つ。

「リセス…」

俺も気は抜けないイルサの表情は見れないが、予想は出来る。あまり良い表情じゃないだろう。

「イルちゃん、行くよ」

それで良い。

「リセ君、ごめんね」

俺の横を通り抜けながら言うルク。それは何について謝ってるんだ。まあ、俺の気が少し軽くなった事には感謝しておこう。

カйм達の後が続いて、建物の中に消えるイルサ達を確認。

続いて、大量のガラス、いや、大量の氷が砕ける音。ウニ口の魔法か。何も知らない人たちが何か叫びながら建物から避難してくる。ところであの男性が叫んでいるテロとは何だ？そんな考えても分からない事よりイルサ達は無事だろうか。先に行かせた事を後悔してしまう。

俺の腹部に蹴り。油断した。俺の手からカタナがこぼれ、地面に背中を付く俺に、俺の頭上に立ち、逆手に持ち変えたカタナを突き下ろす顔傷。その腹部に雷魔法を叩き込む。

咄嗟の事で、魔力を十分込められなかったが俺が体制を立て直す時間は稼げた。

俺がカタナを拾い、奴にカタナを向ける時には、相手の顔は怒りに燃えている。怒りはカタナを狂わせる。母上の言に従って、もう少し挑発しておくか。

「もうちょい、俺に付き合ってくれよ。顔傷さん。真剣勝負と行くぜ」

父上が言いそうな台詞になってしまった。母上がこの場に居たら、
“そんな低俗な言葉使いをするな” だな。

「貴様は本当にあの男に似ているな。そのム力つく顔とそのム力つく物言い」

父上に似ているなんて、俺にとっての最上級の誉め言葉、有難く頂いておくぞ。

「あの時、アレン・レイフォートに気を取られて、貴様の父親に息の根を確実に止めて置かなかった事が、ここまで俺の障害になるとはな」

こいつがブロイシュさんやベーデさんから聞いた話に出てきたニンジャだったか。不意打ちとはいえ、クーレであの父上に、唯一致命傷を与えた人間。

こいつに勝ちたい。父上に追い付く為に。

「あの時、いや、あの時から貴様の両親を殺れ無かった事ほど、俺を苦しめた失敗はない。だから、今、貴様であの時の失敗を清算させてもらう。両親の分も支払ってもらうぞ」

避難してきた人たちが、ケイタイと言う魔話器や魔写器の役割のある道具で通信を始めている。ケイサツと言う単語が聞き取れる。この世界の軍の介入。勝負を急がなくてはいけないな。

カタナを鞘に収めて、腰を低くして構える。俺は、カイナ出身では無いが、カイナ出だろうニンジャの顔傷は、口元を吊り上げ、俺のポーズに付き合っただけでカタナを鞘に収める。その敵との意志疎通に俺の口元も僅かに緩むが、気は抜けない。お互い一撃にかける勝負。純粹に精密な速さだけの勝負。カタナを振っている年数が相手とはかなり違っただろう。我ながら不利な勝負を持ち掛けたものだ。

勝ち目が無いと思える戦いでも案外勝っちゃう時もあるもんだぜ。第十四回シーベル工剣術大会で、カーヘルさんに挑むが俺に父上が掛けた言葉。苦境をものとしなかった父上の力強い言葉。俺に重

くのし掛かる言葉。敗けない。俺は敗けられない。

周囲が騒がしい。けたたましい音を鳴らし赤い光りを回す車は何台か止まる。

「その二人、動くな！武器を捨てろ！」

その誰かの号令が、計らずも俺たちの動き出す合図となった。

真剣勝負（後書き）

今日はいいまじやないやろ。

トラブルの中へ

別に行く手を阻む意志はなし、彼らを受け入れる気満々だったのに、破壊された可哀想な自動ドア。

それを潜った途端に目の前に現れた氷塊の数々に、こいつらに同行した事を後悔した。おとなしく車で待つてりや良かった。

クレサイダやイルサの前で弾ける音を立てて崩れる氷。バリアーか？バリアーなのか？

それよりも、あの動くコールタールの化け物は何なんだ！いや、あの細身な眼鏡男が今、警備員を刺した鎗伸びなかったか？

俺の頭の中は突然の来訪者達にこのビルの現状と同じでパニック状態だ。

「ウニロ！先に欠片だ！そいつらに構うな！」

一階ロビーのエスカレーターをかけ上った赤髪赤眼の男が叫ぶ。警棒と言う低装備でその男を押さえようとした犠牲者がエレベーターで階段落ちを再現。床に満ちる血で俺が非日常に踏み込んだ事を知る。俺の居て良い場所じゃない。しかし、外には既にサイレンが聞こえ始めて逃げ出ようにも引つ込みのつかない状態になっている。俺はこんなことで新聞の一面に飾り立てられたくは無い。

最後にでかい氷を出して、赤髪の男を追うコールタール。

ルクが拳銃を乱射。イルサが魔法なのか、を放つが敵に有効だにはならない。二階フロアの奥へと姿を消す。

「天辺で何か弱い魔力を感じるよ」

「追うよ！」

「ちょっと待て！」

素直にエスカレーターから行こうとするクレサイダを止める。

「上に行きたいなら、此方が早い」

これ以上関わるなの自己警告は押し留めて、誰も居なくなった受付の横のエレベーターを呼ぶ。

「ウツ、この中、何か気持ち悪い」

初めてエレベーターに乗る人間はそうかも知れないな。

「ウエダ殿、ここはどういう建物なんだい？」

「あゝ、世界で一番凄いIT企業…、世界一の機械を造ってる会社だ」

ITなんて理解出来ないだろうな。俺もたった三日でこいつらに馴れたもんだ。栗鼠と真面目に受け答えしてしまう俺はどうなのだろうか？そんな事より、聞きたい事は山積みだ。

「さっきの動く黒い奴は何なんだ？あれは生物なのか？」

「シャプトだよ」

イルサ、頼むから異世界初心者な俺に高度な単語だけで説明しないでくれよ。

「魔力構成体。肉体を持たず、知と魔力だけで動く、高度な生命体さ」

クレサイダ、分かりやすい説明ありがとよ。俺には理解出来ない事が分かった。

「とにかく、気持ち悪い生物だったのは良く分かったぜ」

「悪かったね」

何で不機嫌そうになるんだ。お前には言って無いんだが。

「ウエダさん、クレちゃんも今はこんな姿だけど、一応シャプトだからね」

おつと失礼。あの醜いコールタル野郎と同類がイケメンに化けて身近に潜伏しているとは思ってなかった。

四階で開く扉。目の前に立つおっさんやオールドミスは俺たちの姿を見た途端に、慌てて閉スイッチを押す。どうやら乗る気は無いらしい。

「それで、あの赤髪がカイク何だろ？と言った関係だ。特にイルサと」

この質問の後の皆の表情で聞いてはいけない事だとはっきりした。まあ、イルサと近い関係なのは間違いないと言うことでこの話は

おしまいでしょう。

「じゃあ、世界の欠片とかを集める目的は何なんだ？」

この場の全員の視線が集まる人物を俺も見る。

「君は知らない方が良いことだと思うよ」

「最もだな。これ以上、深入りしても禄な事が無さそうだ」

これ以上はお節介は無しだ。エレベーターも天辺に着いたしな。開く扉。目の前にあるのは社長室が有るだけのフロア。

威勢良くエレベーターを降りて行くクレサイダ達。

「何してんだい？」

「俺はここで待つてる。これ以上は役に立たないからな」

そう俺の出番はここで終了だ。

「ウエダ殿、ここでの待機は危険だ。カイル達がここを目指している。あいつらは遠慮無しに君を殺すだろう」

下には警察が来てるんだろうな。こいつらと一緒に社長室に殴り込みか……。溜め息が漏れる。

どっちみち、俺は犯罪者となってしまったようだ。

クレサイダの吹っ飛ばす扉を見ながら、平凡なフリーター生活が恋

しくなってきた。しまった。

もし神がいるならば

ガラス越しに見えるアースの夜を彩る明かり。

へえー、良い景色じゃないか。この高さといい、広さといい、この建物を姫に献上したいね。

カイムの件が片付いたら、リセスからセレミスキーを奪って、手始めにこの世界を姫に献上しようかな。確かに僅かな時間で何発も撃てる銃を造る科学力は認めるけど、魔法が使えない時点でヘブヘルの敵じゃないね。大した武力がじゃないね。

「ところでウエダ。この世界の法律では軍隊以外武器を持ったらいけないんじゃないのかい？それとも、金持ちは特別なのかい？」

部屋の中に居る初老の男、僕の方が年上だけど、弾を撃ち尽くした銃を抱えて肩で息をしている。

「知らねえよ。そんなこと。それよりもお前達の不思議バリアーの方が俺には驚きだ！」

魔法防壁なんて中等中の初等の魔法なんだけどね。

「えっと、私達は貴方と争う気は無いんです。世界の欠片を探していて、貴方が持つて居ますか？」

銃を捨てる初老の男。姫に従う気になったのか？いや、新たな銃を出した。何も無い空間からね。この世界の住人が召喚魔法が使える筈は無いんだけどね。そんなことよりもさあ、君は誰に銃を向けるのか分かってるのかい？さくつと殺すよ？

「ご老人、ここは落ち着いて話そうではないか？それがアースの欠片の力かね？」

姫の肩に図々しく居座るセルツが喋る事により、当の男も驚きを表した。暫く身動きせずに考えた末に、片手だけで銃を持ちながら、内ポケットを探る男。

「お前達が探しているのはこれか？」

内ポケットから出す緑に輝く世界の欠片。

「これは私が20年前に天使から授かったもの。お前達はこれを取り返しに来たのだろうがそうはさせない。私はまだこれを使う必要があるのだ。だから帰ってくれ」

中々、饒舌に語ってくれるね。天使から授かった。この世界の観測者はどうやら健在のようだね。

「えっと、私達は奪い取る気は無いです。でも、カйм達がそれを奪いに来ます」

「カйм達は一階下まで来ちゃってるよ」

僕としては、尚、姫に武器を向け続けるこの不敬者をとっと殺っちゃって、カйм達が来る前に欠片を手にした所だけだね。

「これは神が渡しを選び、私に授けたもので私の物だ。誰にも渡さない。私がこの世界を発展させるために」

「神ねえ」。馬鹿馬鹿しい。君が神と呼んでる存在はただ君を利用

しているだけだよ。僕はあいつらもあいつらを神とか言う馬鹿も嫌いなんだよ」

とことん僕の神経を逆撫でしてくれる。

「いい年して我が儘言うのは止めなよ。そいつはあんたみたいな非力な爺が持つてて良いものじゃないんだよ。力あるものが持つ物だ」

「クレサイダ！」

姫がお怒りだけど、僕は間違った事は言って無いね。クーレもそうだったけど、全知全能な神、望めば何でも叶えてくれる神。オシリスはそんな奴じゃないし、そんな存在がいる筈も無い。オシリス筆頭の観測者達は、今は全ての世界を見ているだけの存在だからね。

「クレサイダの言う通りだ。力は力ある者が取る。これが道理だぞ、イルサ」

後ろからの声。振り向かなくても分かるさ。姫と同じで二十年の付き合いがあるからね。付き合いたくは無いけどね。

振り向き様に素早く中級火魔法を放つルク。

カйм達を覆った炎の中から氷の刃が襲ってくる。

まあ、ウニロがルクの魔法ぐらいで殺られる奴なら楽で良いんだけどね。僕としてはこの世界でカйм達と全力でやり合いたくないところだけど、それはウニロも同じ。魔力を消費し、かなり縮んでいる。違うのは、ウニロは魔力を使い果たして消滅すればいい、僕はこの抜け殻が残る。残ってはいけない抜け殻がね。

だから、僕はひたすら抑えて戦わなくてはいけないんだけど、カイルに勇ましく向かって行く姫はまだしも、他の面々は…。

「ここには、木が無いじゃ無いか。おじさん、ウツカリだ。ウエダ殿、何処かに木は無いかね」

「そんなもん都合良くあるかよ！」

役に立たない栗鼠と逃げ惑うアース人。

ウニロのチマチマした攻撃を防ぐ。まずはウニロを無力化したい所だ。僕の後方で机を盾にしている男に近付けてはいけない。ウニロの後方でタイミングを伺うハシユカレとマスナーが厄介だ。このままじゃあじり貧だね。

「ルク、レッドライトやパルケストのような威力の高いの出来ないのかい？」

「出来る訳無いじゃんか」。か弱い女の子に無理言わないでよ」

役立たず。僕がやるしかないか。持ってくれよ。ウニロの攻撃の間隔を計り、魔法防壁を消す。一発大きな炎を産み出す。ウニロを飲み込む炎の渦。

失敗した。ウニロの前に立ちはだかる床から突き伸びた石の壁。マスナーの手に輝くファイフレの欠片。やってくれたね。

その隙を突いて、ハシユカレが僕の横を素通りし、机の上に飛び乗る。不味いと思う間もなく、老人の胸を貫く鎗。床に転がるアースの欠片。

「神よ…」

哀れな男が呟いた哀れ極まり無い言葉。

ウニロの追撃により、また魔法防壁を張り動けない。色々和不味いな。欠片へ手を伸ばすハシユカレ。そして…。

ハシユカレが鎗で暫撃を受け止める。アースの欠片をウエダやセルツの方へ蹴る血の流れる足。遅いんだよ、リセス。

「リセス、怪我してるの！」

「大した怪我じゃない！」

ハシユカレに独特な剣を向けるリセス。馬鹿な父親に似て強がりだね。そんだけの血を流して起きながら大したこと無い訳無いじゃないか。まあ、良いか。どうせ、ここまで来たんだから利用させて貰うよ。君は馬鹿だけど嫌いじゃなかったからね。

「セルツ…、リセス…悪い。後は、姫は頼むよ」

「何を言ってるんだ？」

「クレサイダ？どうしたの！」

姫のお心遣いに感謝だね。もう、この身体は僕の物じゃないんです。そして、僕は…。

もし、本当に神が居るのなら僕は僕を消してくれと頼む。

僕は悪だ。悪を裁くんだろ、神とやらわ。

神に祈るなんて、僕も切羽詰まったもんだね。

もし神がいるならば（後書き）

クレサイダ。今までありがとう。天見酒は君の事を永遠に忘れないよ。

次回からリセス視点に戻ります。

消えるクレサイダ

意味深長な言葉を吐き、倒れるクレサイダ。外傷は見当たらない。ならば、何が起きた。さっきの言葉の意味が否応なしに過る。

「寄るな！良いから、姫とそいつらを連れて逃げろよ！早くしろ！」

近寄ろうとした俺たちにクレサイダの怒号が飛ぶ。

「魔力を使いすぎて、身体に乗っ取られましたか。無様な最後ですね、クレサイダ？」

ウニロが静かに語る。俺たちに混乱が走る。

「クレちゃん！どういうこと！」

「クレサイダ、何でそんな無理したの！」

ルクとイルサの怒鳴り。敵味方構わず、身体が固まる。魔王が本気で怒っている。俺もせめて早めに言っただけ良かった。そうすれば、無理にこいつを利用しようとは思わなかった。

「良いから早く行けよ！リセス、姫を逃がせ！」

クレサイダがイルサに対して横暴な発言をしたのを初めて見た。そして俺がクレサイダにここまでキレるのも。

「ふざけるな！俺に命令するな！まだ、俺はお前を十分利用してないんだぞ！利用だけして逃げんじゃねえ！」

「ならば、僕を殺せよ。君の為に！それが利用するって事だ！出来ないだろ、甘ちゃん！」

「出来る訳無いだろう！邪魔をするな、ハシユカレ！」

くそ、今ほどハシユカレと魔鎗が煩わしいと思ったことは無い。これほど、クレサイダを忌々しいと思ったことも無い。

「君らは馬鹿過ぎるんだよ…」

声が小さくなるクレサイダ。

「クレサイダ。我は敵ながら感服するぞ。敬意を表してその身体に乗っ取られる前に我が止めを差してやろう」

「早めに頼むよ。王子」

剣をクレサイダに向けるカイル。

「駄目〜！」

カイルの前に立ちほだかるイルサ。それを見て、カイルが吼えた。

「お前がこいつに頼り過ぎた結果がこれだぞ！後は、そいつは、その身体の魔力の一部として使われる生き恥を曝すだけなのだ！お前に止める権利があるのか！」

この場の生物全てが止まる。

俺たちの心を容赦なく突き刺すカイルの言葉。イルサだけでは無い。俺たちもクレサイダの追い詰めた。

「それでも、私にはクレサイダが必要だから！クレサイダが居なきゃいけないから！」

…イルサ。言いたい事は分かる。しかし、今はカイクが正しい。その正論は有無を言わず、俺達は抵抗するすべも無い。

「姫…。僕を殺して…」

それをイルサに頼む悪漢。イルサからは大粒の涙が流れ出す。どこまでお前は俺たちを苦しめる気だ！どこまでお前は最悪な奴なんだよ。

それでもイルサはカイクの剣を止める。そして、カイクはイルサの身体を撥ね飛ばす。

俺は、ただイルサとカイクが剣を交えるのをただ見ているしか無かった。床に這いつくばるクレサイダに俺が出来る事は無い。助けてやることも、殺してやることも。

カイク、俺はクレサイダを裁く権利はあるのか？俺は他の奴等と一緒に見ているしか無いのか？

カイクの薄い影がクレサイダを覆う。振り上げた刃。

「クレサイダー！」

イルサの叫びが建物内外の喧騒に負けずに轟く。

クレサイダは立った。カイクの腹部に拳を叩き込む。カイクは勢い良く後ろに飛ばされ、遅れて剣が床に転がる音が部屋を支配する。

「人の身体を散々とききつられてくれたものだな。シャプト」

カムの溢した剣を拾いながら、笑うクレサイダ。いや、それは既に、クレサイダでは無かった。

観測者の台頭

「さて、ここは科学世界か？それにしても様々な世界の生物が集まっているものだ。フォートン以外は勢揃いか」

クレサイダだった顔がゆっくり動き、クレサイダだった眼が俺たちをゆっくり見回す。

そして、その男の一挙一動にだけ視線が注がれる。

「貴方は誰？クレサイダはどうしたの？」

イルサが妙に落ち着いて尋ねる。静かに相手を威圧するように。部屋の外のざわめきを強調させる束の間の静寂がこの部屋だけを覆う。

「観測者と言っておこう。あのシャプトは私の邪魔をしたので。私の身体に眠ってもらっている。最も魔力不足に私が手を下すまでも無かったがな」

「クレサイダも厄介な者に取り付いていたものだな」

カイルが立ち上がりながら、観測者を睨んでいる。

観測者。クレサイダが漏らしていた言葉。どう厄介なのか、聞いた人物、俺たちの中で一番良く知ってる人物は観測者の中にいる。そして、この観測者は敵か味方か。少なくともクレサイダの味方では無いのだろうな。

「それにしても、その髪と眼。シルビーと魔王の双子か？何故、アースに居る」

「お母さんとお父さんを知ってるの？」

「ああ、良く知っている。私はシルビーの兄だからな」

顔を歪めながら言う観測者。あまり妹と中は良くないようだ。しかし、また判断に困る状況だな。イルサの伯父であり、カイムの伯父であるという事か。この男、どちらに転ぶのか分からない。

「それで、何故アースに居るのだ」

説明した方が良いのか。

「いや、介入者が居る時点で説明の必要は無しか？そうだな、マスナー？また、オシリスの杖で世界を壊すか？」

介入者。俺には耳新しい単語が多すぎる。話を振られたマスナーは黙り続ける。

「シールテカやその子たちを利用するか…。シールテカは何処だ？今度こそケリを着ける。貴様ら、介入者諸ともな」

話の道筋は分からないが意味は分かる。穏やかには済みそうに無いと言っことは。しかし、魔王シールテカは死んでいる筈だ。

「シールテカは五年前に死んだ。我が殺した」

「何！シールテカを殺した！」

観測者も流石にショックだったようだが、直ぐに冷静さを取り戻した。

「それでは、シルビーはどうした？今、何処に居る？」

「母もその時に共に逝ってもらった」

簡単に言っただけのケイム。イルサの前でな。イルサはうつむいていてその表情は窺えない。イルサの仕草を見て真実を確信した観測者の顔に怒りが浮かぶ。

「…そうか。私は観測者として、介入者が居る以上貴様らを止めねばならない。そして、この世界からこの世界以外の要素を排除せねば…な！」

カイムに斬りかかる観測者。ハシユカレの魔鎗が観測者を止める。どうやら、今はこの観測者の刃はカイムに向いているが、その刃が同じく異世界の人間であるこちらに向く可能性があるらしい。

「皆、行くぞ！」

「駄目！クレサイダを助けなきゃ！」

観測者とハシユカレが刃を合わせた。アースの欠片はウエダさんが持っている。今、ここに危険を犯して残る理由はない。無い筈だ。クレサイダはもう駄目だ。イルサだから動いてくれよ！

頑なに動かないイルサ。その足元に何か鉄の物体が転がった。煙が部屋を覆う。

複数人が入ってくる足音。誰かの使った風魔法。異様な仮面を着けた黒服の銃所持の男達の姿。

「動くな。全員武器を置いて床に手を付け！」

アースの軍が到着したか。銃兵が十人。身体的に痛手を負っている俺や心理的に痛手を負っているイルサでは相手が出来ない。セルツやウエダさんは役に立たないし、今の俺とルクー人ではこの劣勢打開は難しい。ここは素直に指示に従い、捕縛されるべきか。クレサイダの指示に従い、素早く逃げるべきだった。

いつからか俺たちの頼りの綱になっていたクレサイダ。彼はもう居ない。

だから、俺が考える。あいつならばどうするかを…。

観測者の台頭 2

アースの銃兵が十人。カймグループが四人。俺たちの味方では無いだろう観測者一人。

敵の数が多すぎる。

クレサイダのこういう局面での思考法を活用しよう。至極簡単だな。

『誰だろうと邪魔する者は力で押し伏せる』

なんとも、簡素な行動方針だろう。

俺は甘ちゃんだった。クレサイダが居たから甘えた思考に甘んじていた。クレサイダが居なくなつて、甘える対象が居なくなつたことを知る。あいつが俺たちの甘えた感情を全部受け止めてくれた。一番辛い役割だ。でも、クレサイダが居ない以上俺がやらねばならない。

「全員、逃げるぞ！邪魔する奴は叩き伏せる！」

なるべくアースの兵を殺さないように。俺はやはり甘ちゃんだな。

向こうは銃を構えている。にも関わらず、反応が遅い。俺がリーダー格らしい一人の銃を叩き斬る。予想に反して他のアース兵は発砲しない。銃口を慌てて俺に向けただけ。その銃にルクの弾が刺さっていく。こいつら、撃ち慣れて無いのか？それとも、俺たちの反撃が予想を反していたのか。とにかく、もたつき過ぎだ。カйм達や観測者も俺の一刀に動き出す。無言の内に停戦協定が結ばれていたようだ。

「ウエダ君、この銃を君は使えるかね？」

「使えねえよ！持ったことねえもん。つつか、殿から君に格下げか？」

「ただ、引き金を引けば良いものじゃないのかね。おじさんは持てんが君は使えるだろう？」

「知らねえぞ」

肩に乗るセルツに言われ、ウエダさんが上着にアースの欠片を仕舞い、足元に転がるアースの両手持ちのアサルト銃を拾う。その頃には既に転がるアース兵の数々。リーダー格の一時撤退発言。三人まで武装解除された軍団が銃を此方へ向けて下がっていく。呆気ない。此方が何をして、弾を一発に撃たなかった。

「おい、リセス！ズラかるぞ。すぐに第二陣が来る」

ウエダさんが先に部屋を出ようと走り出す。そのウエダさんの首元に現れる刃。

「欠片は此方へ寄越して貰おうか。アース人」

ハシユカレに鎗を突き付けられ沈黙するウエダさん。そして、ハシユカレの横に迫る影。

観測者の攻撃を避けるハシユカレにウエダさんが隙を突き部屋を出ようとするが、マスナー、ウニロ、カイルが立ち塞がる。

俺が震え始めた腹からの流血で血塗れの足を地に着けて、とにかくウエダさんをこの部屋から出そうと決めた時だった。

「全員、勝手に動くな！貴様らは異世界に介入し過ぎた！だから、私が観測者として裁かせてもらう！」

観測者がハシユカレを弾き飛ばす。と同時にカイムの肩から袈裟切り。

速い！腕の動きは辛うじて見えた。しかし、その足運びに注目すれば、剣筋は見切れない。俺がこいつに勝てる要素は無い。

倒れるカイム。聞こえる一陣の悲鳴。

悲鳴を挙げた人物。それは奇しくも、いや、奇しくも無いのだろう。そういうことなのだろう。イルサにとって、カイムは兄であるのだろう。どんなに酷い兄を見ていようとも。

イルサの悲鳴で俺たちと共に止まる観測者。

イルサが剣を落とし、カイムに近付こうとする。カイムを介抱する気なのか？

イルサがカイムに手を当てようとしたその時。カイムがイルサの勢い良く手を払う。

「我は敵だぞ！イルサ！」

一瞬で部屋が霧に覆い尽くされる。ウニロかマスナーの仕業か。

「イルサ、その事を良く頭に入れておけ！」

視界不良の中、部屋を出ていく足音。俺も我に還り叫ぶ。

「全員、逃げるぞ！」

「させるか！」

この霧の中ならば逃げられる。しかし、俺の足が、いや、身体がうまく動いてくれない。傷顔に付けられた刀傷。その後、階段を何百段もかけ上がったり、大立回りをしたり、流石に血を流し過ぎたか。これでは、足手まといだな。

数人の足音は聞こえた。全員、部屋の外へ出たか？

ならば、少々、^{しんがり}殿を勤めさせて貰おうか。

イルサ達が観測者から逃げる時間を出来るだけ稼ぐ。クレサイダから姫を逃がせと最後の遺言を受け取ったからな。守らねばならない。どうにか扉にたどり着き、ふらつく足を刀を杖に支えて仁王立つ。

「リセ君、イルちゃん！何やってんの！」

霧の先から聞こえるルクの声に俺も声を腹の痛みに耐えながら張り上げる。

「良いから、先に行つてろ！いや、待て！イルサはどうした！」

徐々に開いていく視界に見える部屋の中に立つ二つの人影。

衝撃的な目撃をしてしまった。

イルサが観測者に泣きながら抱き着いている。

うむ…。何なんだ、この状況は！

観測者の台頭 2（後書き）

長いですね。アース編。もう四、五話続いちゃうかもしれません。

でも、戦闘書いてると自分の腕の悪さがはつきりと。何か戦闘シーンを上手く書けるようになる方法ってありませんかね？

いや、自分で努力します。申し訳ないです。

イルサの中のクレサイダ

只でさえ、貧血気味なのだが、この光景に頭へ血が集まり始め、薄れ始めていた腹の痛みがはつきりしてきた。この状況どうしたものだろうか？

「お、女、何のつもりだ？」

観測者もイルサの突拍子の無さすぎる行為に困惑しているようだ。答える余裕が無い程泣き崩れているイルサ。

これは、ということだ。確か観測者はイルサの母方の伯父という話だから、親族との思わぬ再会に感動。それはないか。目の前でクレサイダを乗っ取り、兄を斬った人間だぞ。俺の頭に浮かんだ愚考を追い払う。

「リセス、イルサ、何やって…」

「リセ坊、イルサ嬢、何やって…」

「リセ君、イルちゃん、何やって…」

揃いも揃って絶句する仲間達。俺もイルサに尋ねたい。

「イルちゃん、えっと、観測者さん、何やってるの？」

良くこの混沌を目の当たりにして二の言が出るな。ルクのそういうところは尊敬に値すると今は思う。

「わっ、私に聞くな！この女が勝手にくつついて来てだな。勝手に泣きじゃくっている訳でな！私は姪に抱き着かれて喜んでる訳ではない！昔のシルビーに似ているからと言って、姪に欲情したりはしないぞ。あれだ。まあ、一応姪であつてだな！」

激しく情けない言い訳を並べる観測者。嘆かわしく豹変した観測者に俺は頭が痛くなって来たぞ。とにかく、この観測者にイルサを預けて置くとジンさんの意味で危なそうだ。

観測者の胸に収まり泣き続けていたイルサが顔を観測者に見せる。その涙に濡れた顔を見て、観測者からウツとくぐもった声が漏れる。

「私、お母さんに似てる？」

「あつ、ああ、そっくりだ！だから、離れなさい」

イルサのおそらく無計画だろう仕草に弄ばれる哀れな観測者。先程、カィムを一蹴した人物さえも、大人しくさせてしまう女。イルサ、お前は一体？いや、これが魔王たる実力なのか？

少し頭がぼやけて来たようだ。血が足りてないな。

「イルサ嬢、とにかく観測者さんから離れないかね？お困りのようだよ？」

「うむ、そうしてくれると助かるのだが？」

ウエダさんの肩の上からセルツが言い、随分腰の低くなった観測者が賛同する。

「まだ駄目！まだ、足りないの」

頼む。只でさえ頭が回らないんだ。分かり易く主語を使ってくれ。

「どういう事だ？… なっ、身体が！クレサイダか！魔力を身体を通して送っているのだな！」

イルサを振りほどこうとする観測者。必死にしがみつくイルサ。イルサの目的が判明した。

「ごめんなさい、伯父さん！でも、私にはクレサイダが必要なの！お願い、クレサイダを返して！」

「クッ、しかしこの世界は魔力が無い！そんなことをしたらお前の魔力が枯れるぞ！」

「私には魔王の証が有るもん！」

魔王の証。イルサに所持者に魔力が満ち溢れる者だと聞いていたな。

「お前がヘブヘルの欠片を継承したのか！いや、しかし、こいつはシルテカと共に異世界を荒らすという我らの目的に背く行為をしていた…」

「そんなの関係無いよ！」

イルサが観測者にすがり付きながら、大きく弁明を遮る。

「クレサイダは確かに少し我が儘で自分勝手で」

「少しじゃなくて、かなりだよ〜」

茶々を入れるなルク。しかも、お前が言えることじゃないだろう。

「あれをしたら駄目、これをしたら駄目、あれをしろ、これをしろって煩いし」

イルサの荒唐無稽な言動に、口を出してしまうクレサイダの気持ち
は良く分かるぞ。

「それに悪いことも一杯したと思うよ」

俺達の世界で二度も戦乱を起こした。

「でもね。クレサイダは本当はすごいいい人なんだよ。優しいんだよ。素直なんだよ。私にはクレサイダが必要なんだよ。いつまでも側に居てくれなきゃ嫌なんだよ。クレサイダが…」

また、泣き出すイルサ。何故、彼女がクレサイダを必要とするのか。イルサの発言からは、全く説明されてない。だから、イルサがクレサイダを求める理由は分からない。俺がクレサイダが戻ってくることを望んでしまう理由も分からない。

「…どう足掻いてももう遅い」

観測者が動くのを止めて誰に言うともなく話す。

「既にクレサイダが動き出している。今はこの身体を貸してやる。ただし、大切に使え、クレサイダ」

言い終えると力が抜け落ち、イルサにもたれかかる観測者。

「まあ、精々大事に使わせて貰うさ。観測者」

僅かな間が空いて出た言葉。

「クレサイダあゝ！」

今日のイルサは泣いてばかりだな。良く涙が枯れないものだ。

「ひつ姫！家来に抱き着くなど！駄目です！直ぐに離れて下さい！もう十分魔力は溜まりましたから！」

「駄目。もうちょっとこのまま」

「今は、このようなことをしている場合じゃ……」

「クレちゃん、嬉しそうだね。私もハグしちゃうかな？」

「ふざけてないで、君等もなんとかしろよ！」

クレサイダの胸に顔を埋めて泣くイルサ。いや、もう少しぐらい良い思いしても良いんじゃないのか、クレサイダ。別に俺はイルサにベッタリされるクレサイダに嫉妬などはしていない。

少し気が緩んでしまっただけだ。足の震えが酷くなってきた。

「リセス坊！イルサ嬢、リセス坊の手当てを早く！」

今度は俺が参る番か。

目が不鮮明になるなか、イルサの手が当たる感覚と痛みが引く感覚を感じる。

「傷は塞いだけど、血が足りないから、動けないよ」

聞こえ辛くなった声が耳を通り、回らない頭に届く。

「たくつ。無茶して！」

悪かったな。

誰かに背負われる感覚。翼が顔に当たる。

「すまん……」

まだ動いた口。

「良いから、寝てなよ」

礼ぐらい素直に受け取れよ。

この危険な状況の最中、俺は一人、足手まといにも寝るのか。
しかし、まあ、大丈夫だな。

なんと言っても、今の俺達には、異世界を跨ぐ大悪雄クレサイドがついているんだからな。こいつなら何とかしてくれるだろう。

何とも不思議な安心感だ。

イルサの中のクレサイダ（後書き）

という訳で、クレサイダ復活！

そうそう殺られませんよ。この男は！

長いアース編。後、二三話で終わる予定です。

もうちょっとアース編をお楽しみを！

強い人

いつかの夜。シーベル工城の一室のバルコニー。横に居る誰かと俺は興奮気味に話している。

「今日のアレンさんとカーヘルさんの試合凄かったね。僕も大きくなったら出たいな」

「まあ、リセスが大きくなったらな」

俺の頭を撫でる手のひら。

そうか、シーベル工第一回剣術大会の夜。父上達とシーベル工城に泊まったんだっとな。

「ねえ、何で父上は大会に出なかったの？父上なら優勝出来るのに」

「俺が出ても、絶対に勝ち残れないからな。不様に散るだけだつて」

我ながら子供は残酷だ。

父上の剣の腕前は見たことは無いが、流石の父上も魔法を禁止された上に剣術だけでは、世界二大剣士のアレンさんやカーヘルさんは倒せないだろう。

途中でアレンさんやカーヘルさんに当たらなければ、準決勝までは余裕で進めたとしても優勝は無理だと悟っていたのだろう。だが、そんなことを懂れの父親が勇敢に戦う姿を見たくてしょうがない息子の前では通用しない。

「父上、来年こそは出ようよ！きっと、父上なら優勝出来るよ」

まあ、父上の顔が俺の期待に困惑するのは分かる。しかし、アレンさん、カーヘルさんに負けたと言って、この頃の俺は父上を格好悪いと思うのだろうか。今の俺ならば、アレンさんやカーヘルさんと同じ舞台上に立てただけで尊敬に価するだろう。俺は第十一回大会で予選で早くもカーヘルさんに当たってしまい涙を飲んだからな。

「あのな、俺は剣はからつきし駄目なんだって」

「でも、父上は強いんでしょ」

父上のどうしようも無いと言つような笑顔。

「あのな。リセス、お前の父ちゃんはお前が考えるほど強くはねえよ。皆が言うほど偉大な人間じゃねえし、凄い力も持っていない。賢者だ、英雄だなんて言われるより、今やってる高学院の教師の方が性に合ってる平凡な男なんだ」

俺は煙草に火を灯しながら、何かを思い深げに顔を緩めながら言う父上。

「いじけるなよ。リセス」

おそらくこの時の俺は、いつも通りそうやって自分を卑下して表現する父上に顔をしかめたのだろう。

「強さってなあ、色々在るんだ。例えば、アレンやカーヘルみたいに剣が強い強さな。でも、それはあいつ等の強さの一つでしかない」

強さの一つ…。

「剣が強いだけなら、あいつらは強く無い。人の強さを継ぐ勇氣。だから、あいつらは強い」

人の強さを継ぐ勇氣。

「それだけじゃない。他にも強さはある。誰かを守ろうとする強さ。誰かの命を救う強さ。自分の仕事を果たそうとする強さ。自分の思いのままに生きようとする強さ」

「父上は一杯の強いんだね」

この時は分からなかった。今なら分かる。この時父上が仲間達の強さの話をしていた事が。

「違うな。俺はそんな強さは持って無い。弱虫で歴史馬鹿で微弱な男だ」

そう。今ならこの後父上に頭を擦られながら言われた事も分かる気がする。

「でもな、あいつらと旅して気付いたんだが、俺には誰にも負けない強さを持つてるんだぜ。これだけはこの世界で絶対に負けない強さだ」

俺の中で世界一強い父上の語る世界一の強さ。

「何でか知らないけど俺の周りには強い奴らが集まって来ちまう。アレンもユキもジンもエルもおっさんもニーセもカーヘルも。そん

な奴らが俺の周りに居る。なつ、そんな強い奴らに囲まれて負ける気はしねえだろ？だから、俺は強いんだ」

強い人を集める人の強さ。それがライシス・ネイストの持っている一番の強さ。

「僕も強い人が集めれば強くなれるの？僕も強い人を集められるかな？」

笑いを堪える父上は言う。

「そのうち勝手に集まって来るもんだぜ。お前はライシス・ネイストの息子だからな」

父上は煙草を加えながら、俺の肩を優しく二度叩く。この時の父上の言う勝手に集まって来る。今思えば、父上は俺がこいつらの中に居る事を予言していたのか。

「ライ、五才児にはまだ難し過ぎるぞ」

「ユキちゃん。お願いだから気配を消して背後に立たないでくれよ」

父上の隣に座っていた俺は後ろから、抱き抱えられ母上の膝に収められる。今思えば恥ずかしい事極まり無いが、まあ、母上の抱擁は、心地は良い。逆らいようの無い眠気が沸き上がって来る。

「でもさあ、ユキちゃん。ユキちゃんだってリセスに剣を教えるじゃない。まだ、早くないか？」

「私は五才の時から竹刀を握ったぞ。忍びの道を極める為に」

「いや、リセスはニンジャにならなくて良いの。俺は優秀な歴史家になって欲しいから」

「とにかく、何をするにしても身体を鍛えておいて損は無い。誰かさんも体力が少なくて困った事が多々あるだろ？」

「俺はある程度必要な分はあるから良いの」

俺はそんな父上と母上の仲睦まじい会話を聞きながら母上の腕の中で、温もりを感じながら眠りに着く。

しかし、夜にしては明るい。

いや、そうか。これは夢だ。今は朝なんだ。起きなければな。この父上との過去の会話を忘れないように、夢の中で母上の温もりをも少し味わいたいという十八にもなって恥ずべき感情を捨てて。

光りがぼんやりと映って来る。

おかしい。夢の中の母上の温かさがまだ抜けない。夢の母の温もりを忘れないほど俺は甘ったれ坊主だったのか？

いや、違う。夢では握られていなかった俺の手が握られている。固い地面に横向きに寝ている俺は後ろからも抱きすくめられている。

焦点が定まって来た。目の前に映るルクの寝顔。俺の手を握って、気持ち良さそうに寝息を俺の顔に吹きかけている。こいつは眠っている時が一番可愛いな。

首筋に当たる微風。その風が当たる度に俺の背中に密着して動く柔らかないもの。

回らない頭で、ルクを起こさないように首だけを回し後ろにある違和感を確かめる。

何だ。イルサが俺に引っ付いて寝てるだけか。

こいつらが俺にくっついて寝ているだけだ。

…ただだ？

急激に顔に血が昇ったせいで、回り始める頭。いや、頭が回り始めたから顔が沸騰し始めたのか？そんな事はどっちでも良い！

今の俺に重要な単語。クレサイド、ジンさん、殺される。

その三単語が頭に飛来して、身体を勢い良く起こす。周囲にはガラスの無い窓から入る光、所々ひび割れが目立つものの滑らかな灰色の石の壁。生活用具の一つも無い建物内に人影も無し。よし、クレサイドは居ないな。しかし、甘かった。

「やあ、リセス坊。若いつて良いねえ？おじさん、良いものを見せて貰ったよ」

クツ、今のうちにこの見物者を消して置くべきか。

「大丈夫だ。クレサイドとウエダ君は買い物と偵察に言ったよ。おじさんは口が固いしね」

断じて信用出来ん。

「リセス？起きたの！心配したよ〜！」

「リセ君！起きたの〜！良かったあ！」

引っ付いていた俺の突然の動作につられて起きた二人。そのまま俺を強く挟み込む。心配するなら、今すぐ離れてくれ。

「なあっ！リセス！何を！」

五月蝭い二人に掻き消された不吉な足音。

「…モテモテだな」

ウエダさん、そんな事より弁護を頼みます。

「ははは、姫をたぶらかしてるねえ、リセス？しかも、姫をたぶらかすだけじゃもの足りないんだね、リセス？そこまで君が軟派者だとは思わなかったよ？ところで、人生の最後に姫に抱擁してもらえるなんて良い思い出が出来たねえ、リセス？」

出来れば、こんな思い出を最後にしたく無い。

純粹に俺を心配して泣き付く魔王。

事態を把握してる癖に、面白半分で離れようとしてない魔女。

魔王様が離れた瞬間に俺を消し炭に変えようとしている魔王従者。

ただ、状況を楽しみ、楽な傍観者になる栗鼠。

俺を助けるか少し悩んだ末に、買ってきたものを袋から出し、整理

を始めるアース人。

父上、俺はこいつらが集まって、強くなれたのでしょうか。

強い人（後書き）

ということで、天見酒の中では、この冒険シリーズの最強人物はやっぱライシス・ネイストなんです。

そして、ネイストの血を引くリセスも最強になるかも。しかし、多大なる誤解と苦勞を背負うのも、ネイストの呪われた宿命。

これからも天見酒からの呪いをバンバンと。

6月下旬に書き始めたこの物語も既に中盤に。

ここまでの物語は天見酒と読者様の提供でお送りしました。
ここからは天見酒と読者様の提供でお送りします。

になったら良いです。まだまだ続きますが皆さんに読み続けて頂けたら幸いです。

ヘブヘルへの招待

俺が倒れた後、イルサにより魔力を注ぎ込まれたクレサイダにより、セレミスキーにより現界召喚を行われ、直ぐに窮地は脱したらしい。

ウエダさんの大まかな説明によると、同じ国の別の地域の捨てられた廃墟の中。

先のクレサイダの暴動が魔王イルサテカの名裁きで治まり、俺たちはかなり遅れた朝食へと移行する。コンビ二弁当というコンビ二という店で買った弁当。味は悪くない。しかし、この世界の料理は、俺には味付けが濃すぎる。調味料を入れすぎじゃないだろうか。そんなことを考えていた矢先にこの世界の新聞から目を離れたウエダさん。

「それで、これから俺達はどうするんだ」

ウエダさんが目を通してウエダさんの言う“俺”達。

「本当にご免なさい」

イルサが謝り、それに各々が続く。

「まあ、さっきも言ったけどよ。こうなっちまったら、もう仕方ねえよ。お前達が知らなかった防犯カメラのことを考えてなかった俺も悪いし」

ウエダさんが床に置いた新聞。白黒でなく色がついている一番大きな写真には、俺達が昨日強引に入ったビルが写し出されている。そ

して、その写真の下に貼られた俺達には全く撮られた覚えのない俺達の顔が連なる。カーム達も、そしてウエダさんも同様に。

字は全く読めないが事態は少し読める。俺達はこの世界で犯罪者になっちゃった。ウエダさんを巻き込んで。

「謝るのは止めろって。謝るよりは、どうにかしてくれよ。俺はテロリストとして首を吊られたく無いんからな」

ウエダさんはジョークを言っているつもりなのだろうが場は和まない。声の調子は明らかに可笑しい。内容も加害者な俺達が笑い飛ばせる代物じゃない。

「ヘブヘルに来れば良いさ。君の衣食住ぐらいは補償するよ」

「そう！クレサイダの言う通りだよ！ウエダさん、ヘブヘルに来て！リセスもルクちゃんもセルツもみんなヘブヘルで愉しく暮らそうよ！」

それはイルサの願望が混じり過ぎだろ。俺は生まれ育ったクーレで暮らすぞ。

イルサがどうしても俺と一緒に居たいと言っのなら…、そう、あれだ。お前がクーレに来れば良いんだ。

「それでそのヘブヘルとやらへはどうやって行くんだ？」

「召喚魔法の応用だよ。僕達自身を別の世界に召喚するんだ。理解出来るかい？」

「まあ、昨日みたいに魔法でどこかに行くって事だな」

俺にもその程度の知識に毛が生えたぐらいしかない。細かい事を知らなくても出来る事は出来るもんだ。

「そこで相談なんだけどね？一旦、ヘブヘルに行こうと思う。欠片の事を考えると既に姫が持っているから寄り道になるけど、まだ欠片の残るアール、フォートンは少し厄介な世界だ。僕の魔力の事やウエダのこれからの事を含めて、体勢を整えてから行きたいと考えてるんだけどさ？」

クレサイダの言い分は頷ける。俺達にも連戦の疲れはある。一旦は何処かで少し休息を取るべきだろう。しかも、昨晚、カームも観測者に深手を負い、その他の面子も少なからず疲弊しているだろう。俺達の競争相手も休息を必要とすることだろう。

しかし、ヘブヘルか。信仰心は高い訳では無いが、クーレで育った俺は、神居る世界アールと対極に魔王の居る危険な世界と言うイメージが強く、僅かな抵抗がある。クーレでは、悪い子は魔王にヘブヘルへ拐われて骨ごと食べられるというのが、大人達の子供への脅し文句になってる程だからな。

実際に魔王と対峙した父上が、駄々っ子を叱る親を見て俺に言ったのは、“あの魔王なら子供を拐つても、大事に可愛いがって育てそうだ”、だったが。

前魔王の人柄は分かり兼ねるが現魔王を見ていると父上の言い様も分かる気がする。

「ヘブヘルに帰るの！シユナアダやカリサペクは元気かな！」

口元をソースで汚し、ルクに拭かれながら喜色満面の魔王様が君臨する世界。案外平和な世界説が俺の中で強まっていく。

「皆を私のお城に招待するよ。一杯ご馳走食べさせてあげるね！」

「わぁゝなんか凄く楽しみだねえゝ！へブヘルではよろしくね、イルちゃん！」

そのご馳走のメインディッシュは俺達の丸焼きとか。それは無いよな。

まあ、少し頼り無いがへブヘルの王のイルサがついているし、それなりの地位についているのだろうクレサイダもいる。その二人の連れである俺達には安全な世界だろう。

「へブヘルのお肉を使った料理はすごーく美味しいんだよ！」

何の肉を使うかは聞かない方が身の為だろう。

へブへルへの招待（後書き）

次回から、へブへル編へ突入！
の前に、後一話アースでの話を。

最近、更新停滞気味で申し訳ありません。

明日からやっと取れた一週間の長期休暇なんで、張り切って書いちゃいますよ！

どうぞ、この機会に、御意見、御感想、御質問、御指摘、御文句、遠慮なくバンバンバンと送っちゃて下さい。

と、こんな作品を読んで下さる有り難き読者の皆様に、遠慮知らずに図々しい作者です。

変わる時

普通の交通事故でお袋と連れ立って死んだ親父殿。

『お前は本当に何がやりたいんだ？ どうせそんな物、今のお前には無いんだろ。だったら、とにかく動けよ。そうすれば、そのうち見えてくるもんだ。お前は動かないから何もやりたい事が無いんだ。アルバイトを繰り返すだけでなく世界旅行に出てみるとか、エベレストを制覇してみるとか、何か自分を試すようなことをしろよ』

親父が大学を出てフリーターになった俺に言っていた酒の席での決まり文句。親父の言っている事は分かる。だが、俺が一步踏み出す事は無かった。両親が居なくなっただけ。何かでかい事をやってみたい。そんな事を思いながらも過ごす小さな日々の繰り返し。

自分を変えたい。そんなことは、いつも望んでいた。でも、挑んでいなかった。挑め無いだろ。挑んでも俺は何が出来る訳じゃない。そんな葛藤の中の日常。

それが終わった。こいつらによってぶち壊された。

望まずして得た挑みへの片道切符。後戻りは死刑へ急行しかない。

枠だけの窓の外には、道幅の狭い名ばかりの県道。通る車の数は皆無に等しい。俺がこれから行こうとしている道を示しているように前にも、後ろにも人は居ない狭い道。

俺がこいつらについて行けば、俺のやりたい事やらは俺の前に出てくるのか？ 情けないことにいつも通り一歩が踏み込めない。

「ウエダさん。灰、落ちますよ?」

火を点けた煙草。煙は吸われることなく宙を泳ぐ。

それを指摘した青年。俺より若い奴。でも、こんな訳の分からない旅をしている。だから、聞いてみたくなった。

「なあ、リセスは何でこんな旅してるんだ」

俺の質問はそんなに難しいことだったのか? 真剣に考え込み始めたリセス。

「自分の世界を守りたいからだと思います」

大層な事をしている割には少し自信の無さそうな表情だな。

「目的とかはつきりしてねえのか?」

「はい…。いろいろと考える事がありますが、どれが正しいのか」

何とも模範的な奴だ。照れるクレサイダに魔力補給を目的に引つ付こうとしているイルサを僅かに見たのがバレバレだぜ、シャイボーイ。

イルサに何やら想いがあるようで。

「フム、中々面白い話をしているね、悩める若人達。そんな君たちにおじさんが助言をしてあげよう」

俺の肩にひょっこり現れた栗鼠。まあ、実は御年八百歳という栗鼠

に、その助言とやらを聞くだけ聞いてみようか。

「何かを始めるのに目的なんて初めから決まっている必要は無いのさ。何かをやっている内に見付かることもあれば、無くなることもある。そんなものを追い求めていると何も出来なくなってしまうものだよ」

この栗鼠、まるで俺の事を見透かしているように言ってくれるものだ。

「そんな幻想的なものについて考えるのはもっと後でも良いのでは無いかね？君はまだ若いのだからね。そうは思わないかい、ウエダ君？」

とにかく動けって言いたい訳か。このチャンスを生かして。

セルツに笑みで返す俺。笑えるな、栗鼠に諭されている俺は。

俺に何が出来るかとは分かんがまあ、やるだけの事はやってみますか。

そう思うと早いところへブヘルとやらへ行ってみたくなってきた。こんなに何かを楽しみなのは久しぶりだ。

俺は上手く乗せられたもんだな。

魔王の存在

太陽がさんさんと照る真つ青な空、白く綺麗に整えられた街並み。商人達が店を並べる坂道の先に見える壮健な城。

「微妙に場所がずれた。ま、城の近くだし良いか」

俺のクーレで培ったヘブヘルのイメージは完全に覆された。太陽の昇ることの無い万年の夜。廃墟の群れの中、雷雨にさらされるボロボロな古城。そんなイメージの欠片も無い、背中に翼を生やしただけの普通の人達が過ごす、普通な街並み。

「あつ、イルサだ!」

「本当だ!」

歩き出したクレサイダに続こうとした俺たちに聞こえる子供の声。その声に反応した大人達まで集まって来てしまう。

「タムス、レトカ! 元気だった?」

走ってよって来た二人の子供に抱き着くイルサ。ガキが三人だ。というか、お前は魔王なんだよな?

「イルサこそ、酷い風邪引いたんだろ? 大丈夫だったのかよ」

「タムス、魔王様にそんな口聞いたらいけないんだよ!」

「エ? 私は風邪なんか引いてないよ? だって、今まで異世界に…」

「待った！姫、待ってください」

クレサイダのいきなりの待ったに、クレサイダの存在に気付いた子供達がイルサから離れる。イルサに耳打ちを始めるクレサイダ。つまるところ、イルサの不在は風邪で寝込んでいることに処理されているという事だろう。

「とにかく、早く城に行くよ。ここではゆっくり出来ないから。姫、行きますよ」

クレサイダは瞬く間に出来た人混みを見ながら俺たちに告げる。その人混みの中心にはイルサ。『病気は治ったのですか』、『これを持って食べて下さい』、『イルサテカ様、どうぞ今日こそ私の想いを受けとって下さい』。

なんとも人気のある魔王様のような。この街の住人にとことん好かれていているらしい。魔王としてよろしいのかは分からないが。

「イルちゃん、人気者だねえー。羨ましいな」

「えっ、そうかな？私って人気あるかな？」

歩き始めてなお、四方から声を掛けられるイルサ。こいつが歩くだけでお祭り騒ぎだ。そして、俺には少し罪悪感が芽生える。ここまですで、民衆に好かれているイルサを無理にクーレに喚び出してしまったことに対して。

ふと、空から舞い降りて来る集団。その筆頭に立つ漆黒の鎧に身を包む男。

「パシクカダ、出迎えかい？ご苦労だね？」

「クレサイダ。そいつがイルサテカを召喚した野郎か？」

話が噛み合わないパシクカダが指を指した先には、ウエダさん。あまり友好的な態度では無い。機嫌も良さそうでは無い。

「俺がイルサを召喚しました」

自分の罪を人に擦り付ける気は無い。

「いい覚悟だ。なら、死ね」

俺の弁明を聞く気は無いらしく、剣を抜くパシクカダ。足が速い！こちらが抜く前に殺られる。居合いしか、選択肢は無い。カタナに手をつけた。

イルサが間に入らなかったら、どちらかが殺られていた筈だ。

「駄目だよ。パシクカダ。リセスは私の友達だからね」

「イルサテカ、お前は甘過ぎるぜ」

剣を収めるパシクカダ。その敵意ある物言いに、イルサに忠実と言う訳では無い事を感じる。

「まあ良いか。クレサイダ、シュナアダがイルサテカの帰りを首を長くして待つてるぜ。急げよ」

それだけ言い、俺を一睨みして、城へと部下を引き連れ飛び去って

行くパシクカダ。

「リセ君、大丈夫？」

「ああ」

ルクの声に冷や汗が垂れているのを感じる。イルサが止めに入らなければ、俺は確実に殺られていた。

「クレサイダ、何なんだ。あの野郎は？」

ウエダさんがクレサイダに訝しげに尋ねる。

「彼はカダ。軍隊の最高指揮官長つてところかな」

とんでも無い奴に目を付けられたものだ。

「カダって、名前の一部じゃないの？」

「違うよ。君達の世界では家名が名前に付くだろう。レッドライトとかネイストとか。ヘブヘルはその代わりに役職が付くんだ。僕なら名前のクレサに、魔導士長を意味するイダだ。これは職業によって異なる」

なるほど、家名の代わりに職業名が使われているのか。

「ヘブヘルは実力主義。君たちの世界と違って、どんな高貴なお家の出身だろうと実力が伴わない奴は上にいけない世界なのさ」

イストを名乗るには俺は力不足だ。決まった家名で引き継がれるよ

り、実力によって代わる名の方が確かに共感出来る。

「じゃあ、イルちゃんのテカってのは、魔王って意味なんだ」

「うん、そうだよ。世界で一人しか名乗っちゃいけない名前なんだよ」

イルサが無邪気に自慢する。

少し納得がいかない。テカがイルサに相応しいのだろうか。兄であるカームは何故テカを名乗れなかったのか？

敵ながらあいつの方が実力を伴っている気がするのだが？

クレサイダに聞きたいところでは有るが、今、聞くことでは無いだろう。

イルサの城は直ぐ目の前だ。

魔王の愉快な側近達

城の俺たちの背を遥かに凌駕する正面大扉がクレサイダが軽く手を触れただけで自動に開き出す。

その先はダンスホールだった。

外見が普通なら内装も普通だ。拷問器具が置いてあったり、不気味な悪魔の像が飾られていたりしない。シャンデリアや綺麗な装飾、歴代の魔王だろう肖像画。そして、何やら催しがあるらしく忙しく動く人々。イルサの凱旋パーティーでもやろうと言うのか？

俺たち、イルサやクレサイダの登場に動きを止める従者達。

「ただいま〜！」

イルサの大声に場は先程の五月蠅さを取り戻す。イルサへの歓声が凄い。大人気だな魔王様。

「時間がありません！全員、自分の仕事に戻りなさい！」

イルサに寄って来た従者達に鋭い喝が飛ぶ。

「やっとお戻りになれましたか。イルサテカ様」

緑髪が目付きが鋭い男。口調は優しいがにこりもしない、どこか叱責を感じる語感。

「えっと、ごめんなさい。シュナアダ」

あまりイルサを責めないでやってほしい。俺がイルサを連れ回してしまったのだから。

「まあ、良いでしょう。そちらの御仁も反省なされてようですしね」
シュナアダの目が俺を見抜く。鋭い洞察力だ。何もかも見透かされている気持ち悪さを感じる。

「名乗りが遅れました。私はシュナアダと申します。イルサテカ様の元で執政を執り行っております」

シーベルエのロントル執政官長はいつも笑顔を絶やさず捉え処がないが、このシュナアダは無表情で捉え処が無い。その表情の後ろに何を隠しているか分からず、此方がやりにくい事に関しては同等だが、執政官とはこういう人間こそが合っている職業なのか。どちらにしても、俺にはやりずらい相手である。此方も失礼にならない程度に軽く名乗るだけで良いだろう。

無表情に見つめられるプレッシャーの中、冷や汗を掻きながら俺が真っ先に、ウエダさん、ルクと続く自己紹介。

ルクが名前を告げた時だった。突然、僅かに見開かれるシュナアダの瞳。ルクの何かがこいつの無表情を打ち崩した事に俺は驚いた。何だ、この微妙な沈黙は？

「お久しぶりですね。セルツテイン殿」

どうやら、シュナアダはルクの肩に留まるセルツに驚いたようだ。俺はシュナアダとセルツが知り合っていた事に驚く。こいつはヘブヘルにも行った事があったのか？

「シユナアダ殿、済まないけど、私には君と会った覚えは無いね？
どうも年のせいかな近頃、記憶が曖昧でね」

帽子を深く被り直し、明らかな虚言を吐くセルツ。

「召喚者に似て、惚けるのが、御上手ですね。あの事を忘れた等と
…」

「イルサさまあゝ！」

耳をつんざく高い絶叫。凄い勢いでイルサに飛び付く女性。この女性
の出現で聞き出したい話は中断される。

「イルサ様あ、私を置いて危険なクーレへ行ってしまうなんて！イ
ルサ様、お怪我はありませんか。クーレの野蛮な男どもにあんなこ
とやこんなことをされたりしてませんか？」

「良いから、姫から離れるよ、カリサペク！」

イルサを頬擦りをしながらいとおしそうに愛でる女性。クレサイダ
の言葉は聞いていないようだ。かなり悦に入っていらっしゃる。

「カリサペク？あんなことやこんなことって何？」

イルサの純粋な質問に固まるカリサペクさん。

「イルちゃん、それはまだ知らなくて良いことだよ」

ルク、良いフォローだ。

「いえ、そろそろイルサ様もそういう事を知らなければいけない時かも知れません。僭越ながら私めが、今晚じっくりとお教え差し上げ……」

おい、据わった目が本気を表してるぞ。そして、今晚イルサが危ない。

「いい加減にして置け、カリサ」

カリサペクの翼を引っ張る手。鎧を脱いで、Ｔシャツとジーパンのラフな姿になったパシクカダ。

「ああ、イルサ様……。何をするんです、パシク兄様！私はイルサ様と久々の熱い抱擁を交わしているというのに！」

こいつら、兄弟だったらしい。

「カリサペク。客人の前です。落ち着きなさい」

パシクカダに抑えつけられなお、イルサに向かおうとするカリサペクにシュナアダが言い、正気を取り戻させる。

「イルサテカ様。お帰り早々ですが、お仕事があります。今夜、貴女様の御復帰の祝いを開きます。御準備の程を」

淡々と告げるシュナアダに首を傾げるイルサ。

「貴女様の不在は、ご病気で臥せていると言うことにしておきましたが、そろそろ地方有力者達が疑いを持ち始めた頃です。貴女様の

姿をお見せしませんといけません」

王の不在による反乱を防ぐ為の顔見せと言うことか。政治臭いな。

「貴殿達にも今回の件にご協力を願いたいのですが如何でしょうか」

丁寧な態度だが、要は口裏を合わせて置けと言うことだ。その表情からはお願いではなく、脅しの色が濃いな。まあ、イルサ不在の責任の一端を担う俺が断ることはしないが、こいつは少し気に食わない。

「では、カリサペク。イルサテカ様の晩餐会での準備を。クレサイダは異界からの殿方達を客室に案内してあげてください。パシクカダはそちらのお嬢様を客室に丁重に案内して下さい」

パシクカダへの“丁重に”が強調された。

「おい、俺が野郎どもを案内するぜ」

「駄目です。貴方なら『クーレの剣士の実力がみたいぜ！』みたいな事を言って、喧嘩を売りそうですからね」

図星だったのか、舌打ちをするパシクカダ。俺もこの人と剣を合わせてみたいが、今はやめておいた方が良さそうだ。

クレサイダの“行くよ”につられて、動き出す俺達。

そのクレサイダの背中に一言がかかる。

「クレサイダ、御苦勞様でした」

「君もね」

シュナアダの一言だけの労いに、振り向かずに一言で返すクレサイダ。

今まで言葉らしい言葉を交わしていなかった二人。この二人の僅かな信頼関係を会間見た気がした。

俺は少々羨ましく思ってしまう。

魔王の愉快的側近達（後書き）

これは全年齢対象小説です。十五禁にランクアップするべきなのか？本気で悩み始めた天見酒。

いけませんなあ。カリサペクは。悪い意味でニーセ様を超える存在を生み出してしまったかも。

もう遙か昔のこと

「セルツ、一つ聞いて良いか？」

そう言つて一つですむ人はそうそう居ないだろうがね。

「ハハハ、女の子の口説き方ならば、おじさんにいくらでも聞きなさい」

「そんなどうでも良いことでは無い」

リセス坊、君にとってはどうでも良いことでは無いと思うよ。ルク嬢が可哀想じゃないか。少し人生（？）経験豊富なおじさんに聞いておいた方が良いんじゃないかな。

「シユナアダさんと知り合いだったんだな」

やっぱり、そこをつつくのね。さてさて、どうするかね？

「頼む。教えてくれないか。そのあれだ。こういうのは何だが。セルツに不信を持ちたく無い」

弱ったな。名前だけじゃなく、その真剣な眼差しもあの坊やに似ているか。クレサイダ君はどうでも良いって態度か。リセス坊に、あなたが隠した真実を明かさないうに少しだけ教えても良いかね、主人？

「前を見たまえ。リセス」

私にウエダ君の肩から急に飛び移られて此方を見たりセス坊に言っ

ただけでは無い。あの方があの坊やに言っていた、私自身が心掛けた言葉だ。

「クーレの歴史にリンセン・ナールスやレクスター・シークスは記されているかね？」

久々に口に出す名前だね。本当に懐かしい。

「もちろん、知っている。魔王を倒した大英雄とその英雄を育てた男だ」

素晴らしき誤解に笑いが込み上げて来てしまうね。

あのはな垂れ小僧が大英雄とは傑作だね。しかも、主人にも誤解は生まれているらしい。まあ、遙か昔のこと、そんなものなのだろうね。

「という事は、彼等がクーレに召喚されたシールテカやシールテカの側近達と戦った事は知っているのだね」

「あ、ああ」

フッフ、鈍感なりセ坊も段々分かって来たようだね。

「おじさんは、クーレに召喚された事が在るって言ったよね。召喚者はレクスター・シークス」

何とか理解しようとするウエダ君と違って、話を聞きながらも止める様子なく無言で進むクレサイダ君の背を、ただ見ている君にはもう語る必要は無さそうだね、リセ坊。

「そ、それじゃあ、セルツはクレサイダ達と」

クレサイダ君に遠慮してか、声を小さくなるリセ坊。

「紳士ならば、人の事情を機敏に察してあまり深くは立ち入らないものだよ」

そろそろ昔話はお開きにしないかね。

君の動揺も分からないでも無いだろうけどね。

父上や母上が間接的に戦った君やルク嬢と違って、おじさんは当事者として、クレサイダ君の姿を見たのだからね。

クレサイダやシールテカがクーレで行った許されざる非道をこの眼で見た。

でもね、もう遙か昔の事なんだよ。そう、クレサイダや魔王は変わるぐらいに。だからね。

「リセス、前をしっかり見なさい」

これからの世界を変えるかもしれない若者達に、そう言い聞かせるぐらいしか私には出来る事は無いのだよ。

もう遙か昔のこと（後書き）

短いです。

初めてのセルツ視点如何でしたでしょうか。

書いていて、何故か渋めのミルクティーを飲みたくなってきた。天見酒です。

ヘブヘル編は視点がコロコロ代わる短い話が続きそうです。落ち着きが無くなりますがご了承下さい。

ただいま、私の場所

城の三階。主の居ないお父様やお母様の部屋とお兄ちゃんの部屋に挟まれた静かな私の部屋。この階に住む、誰も待っていない一人取り残された私。

「姫と二人きり、あのクレサイダも今は居ない。フフフ」

私の幼い頃からの世話係りのカリサペクがいるけどね。

「えっと、カリサペク？お留守番ありがとう？」

「ひつ、姫！もう大好きです！」

クレーに召喚される前と同じで塵一つ落ちていない部屋。カリサペクが毎日お掃除してくれてたんだろう。私も大好きだよ。

「それで、私はどうすれば良いのかな？」

「まずは、お風呂に入られて、お召し物を替えませんか。お背中をお流しします。さあ、お風呂へ！」

「えっと、一人で入るから良いよ。カリサペクはここで待っててね？」

カリサペクと入ると何故か凄く疲れちゃうから。

「ここでイルサ様の風呂上がりを待つ…。ハッ、ハイ！先にベッドの中でお待ちしておりますね！」

そろそろ日が暮れるのに、今からお昼寝したら、夜に寝れなくなっちゃうよ？

本当はのんびりお風呂に浸かりたかったけど、早めに出て、カリサペクが既に用意をしておいてくれた服を来てお風呂出る。魔王の正装だって言う黒を基調にした服。動き難くてあまり着たく無いんだよなあ。

「カリサペク。起きなさい」

私のベッドで本当にお昼寝してるカリサペクを起こそうとしているシュナアダが居た。私はシュナアダが苦手。お父様の時から仕えている優秀なアダなんだけど、笑ってくれた事無いんだもん。いつも私に仕事を持ってくるし。

「シュナアダ、カリサペク疲れてるんだよ。寝かせてあげてよ」

睨まないで、怖いよ。

「本当は解雇ですがね。まあ、彼女の主人が消えてから、彼女は毎晩殆ど寝ずに泣き明かしていましたからね？とにかく、起きなさい、カリサペク！」

シュナアダの声で起きるカリサペク、そんなに心配してくれたんだ。

「カリサペク、ごめんね」

「な、何がでしょうか！姫が私に何を謝る事が」

「カリサペク、私は忙しいので、用件を言いますよ。会場の準備が整いましたら鐘を鳴らしますので、イルサテカ様をお連れしてください。以上です」

それだけ淡々と告げると部屋を出ようとするシュナアダ。ドアノブに手をかけて振り返ります。

「イルサテカ様。お疲れと存じますが、今夜だけは頑張ってください。では、失礼します」

シュナアダは本当は優しいんだ。でも、とっても照れ屋さん。

「あの姫、申し訳ありません。姫を待つ間、姫のベッドで寝てしまふなど。在ってはならない事」

私に頭を下げるカリサペク困ったな。全然怒って無いのに。それに

「カリサペクは私の心配して夜寝てなかったんでしょ。ごめんね」

そう、私が悪いんだ。でも、嬉しいな、そこまで心配してくれてたなんて。カリサペクやシュナアダが居るヘブヘルに戻って来て良かったよ。私の大切な人達だからね。

「本当にご心配しておりました。姫があのカイムと同時期に姿を消し、異世界に喚ばれたのでは無いかとシュナアダ様が御推察なされた時は怪我等をなされないか…」

「大した怪我してないよ。ちょっと擦りむいたぐらいだよ」

リセスやクレサイダが守ってくれたもん。

「それだけではありません。全世界一の愛らしさを持つ姫が異世界でくそ野郎どもに捕まってあんな事やこんな事をされるのではと、されてませんよね！姫は汚されてませんよね！」

勢い良く詰め寄って来るカリサペクに一步後退。少し怖いよ。

「さっきも聞いたけど、あんな事やこんな事って何の事？」

ルクちゃんはまだ知らなくて良いって言ってたけど知りたいなあ。セルツさんが良いことも悪いことも知りなさいって言ってたもん。私の質問にカリサペクが言葉に詰まってるってことはかなり難しい事なのかな？

「良いですか、姫。男性に身体を触られてたり、過度に密着されたり、その一緒に寝たりしませんでしたよね」

「したよ。リセスとギュツとしたりとか一緒に寝たりとか。でも、お父様が言ったように身体が腐ったりしなかったよ？」

カリサペクが固まっちゃった。でも、私の身体に悪いところは無かったんだよ。

「イルサテカ様？」

カリサペク、眼が怖い、胃から捻り出したような低い声でフルネームで呼ばないで。昔、いたずらした時に見た本当に怒ったカリサペクだ。私、悪いことしたの？

「そのリセスとかいうクソ野郎は今日姫が連れて来た輩のどちらか

で？」

「そうだけど、リセスはクソ野郎じゃないよ。とっても優しくて、頼りになるんだよ」

「そうですか…、リセス様がそこまで…ね」

「な、何でそんなに、カリサペクは怒ってるの？私悪いことしちゃった？」

今のカリサペクは凄く怖いよー！リセス、クレサイダ、ルクちゃん、誰でも良いから助けて！

「いえ、姫は何も悪くありませんよ」

あつ、いつものカリサペクに戻った。

「ただ、そのリセス様には特別に丁寧なおもてなしが必要なようです。感激で息が出来なくなってしまうほどのおもてなしを…。後でご紹介下さいね？」

「うん、リセスにはお世話になったから宜しくね」

優秀な世話役カリサペクの丁寧なおもてなしかあ、是非やってあげて欲しいな。リセス、喜ぶかな？

他の皆にもこの世界を楽しんで欲しいな！

ただいま、私の場所（後書き）

いけませんな。カリサペクが俺の脳内で反乱を起こしました。ニ―セ様の動乱の危機を何とか乗り越えた天見酒政権は、またしても更なる脅威に曝されています。このままでは、サイト運営陣に抹殺されてしまう。

皆様の天見酒政権への応援を宜しくお願いします。

まだ15禁には入って無いですよ？

魔王の役目、俺の役目 1（前書き）

俺にしては長いので切ります。

魔王の役目、俺の役目 1

シュナアダの言う魔王の顔見せ会は確かに国を運営するために必要な行事なのだろう。衆目の前で、魔王の玉座に借りて来た猫の如く大人しく座っているイルサが引つ張られるのは仕方が無い。

しかし何故、他世界の俺たちまで引つ張り出されなければならないんだ！俺はこういう社交の場というのは苦手なんだ。勘弁してくれ。

「俺、晩餐会って初めてだわ…」

先程から、同じことを繰り返すウエダさんと、早く抜け出したい旨を瞳にのせて、元凶クレサイダを睨んでいるのだが、我関せずに徹するクレサイダ。くそ、涼しい顔しやがって。

「何かワクワクするねえ〜！イルちゃん挨拶とかするのかな〜」

胆が座っているのか、家系がらこういう場に馴れているのか、一人楽しむルク。

「恐らく、シュナアダなら魔王のスピーチは省くね」

『皆様、当祝いの席にお集まり頂きありがとうございます。本来ならここでイルサテカ様に歓迎の御言葉を頂きたいのですが、イルサテカ様はご病氣から復帰されましたが、未だ喉を痛められ、お声が枯れてらっしゃいますので、御挨拶の方は控えさせて頂きます』

クレサイダの言う通りだった。

「イルサに余計な事を喋るなってことね」

ウエダさんの解釈は正しいのだろう。クレサイダが言い訳を出す。

「スピーチの原稿を覚える時間が無かったし、姫の不在知られる訳にはいかない。当然の判断だよ」

俺はその当然の判断、イルサは人形みたいに黙って座ってれば良いと言う考えは気に食わない。

「心底気に食わないって顔だね？だから甘ちゃんなんだよ、君は」

久々に神経を逆撫でしてくれる発言だな。

「イルサは政治の道具だって言うのか？」

「僕は言った筈だよ。利用出来るものは利用するってね。それはシユナアダも一緒だ。ここはそういう世界なんだよ」

『それでは、乾杯の前に、皆様先程からお気になられていると思いますので、御紹介させて頂きたいと思います』

俺たちの小声での会話の間に淡々と話を進めるシユナアダ。注目が魔王の玉座と傍らに立つシユナアダから、クレサイダを筆頭とする俺たちへと集まる。

『異世界から、イルサテカ様に仕える為に馳せ参じられた方々です』

「俺達はそういう設定なのね」

ウエダさんが紹介に預かり、恭しく会釈をするルクを真似ながら呟く。俺も不承ながら、クレサイダに視線で促されて頭を下げる。

「私達、魔王の家来になっちゃったね」

弾む小声で喋りかけてくるが、お前はそれで良いのか？俺はかなり機嫌が悪化しているぞ。クレサイダの言うように俺は甘ちゃんだからか？

シユナアダの乾杯の合図で騒がしくなる宴会場。物珍しさで俺達に話掛けようと寄ってくる人々。

ウエダさんは早々に抜け出し、一人…、一匹だけ難を逃れた栗鼠の待つ部屋へ帰って行った。

俺もとっとと消え去りたかったのだが、こいつが俺には似合わないモーニングの裾を掴んで邪魔をする。

「離せ」

「駄目だよ、リセ君。こんな可愛いルクちゃんを一人置いてちゃうの？」

小声でそんな事をほざきやがる。一抹の迷いも無く置いて行くぞ。

「もし、こんな美少女がこんな場所に一人で居たら、物陰に連れ込まれてキヤーンな事になっちゃうよ」

連れ込んだ奴が銃弾や火魔法でキヤーンな事になるだろうな。

「…一人じゃ心細いんだよ。お願い」

そんな弱々しい眼と弱々しい声で頼むな。いつもの黒いローブじゃないヒラヒラ付きの赤いドレス姿も助長し、普段より少し可愛く見えるが、これはルクのいつもの男を操る卑怯な手段だ。分かっている。だから、引っ掛かった訳では無い。ただ、女性には優しくがネイスト家の家訓なのだから仕方が無い。

折れた俺に、ルクが露骨に勝利の笑みを浮かべる。やっぱりこいつは可愛くない。

近寄って来たヘプヘルのお偉いさん達に如何にも清楚な淑女という振る舞いで対応に切り換えるルクを眺めながら思ってしまう。

ルクは、真正正銘の淑女の鑑であるニーセさんから、淑女のたしなみを少しは受け継いでいるようだが、あの邪な精神は一体で誰に学んだんだ。

乾杯ようにグラスに注がれた葡萄酒を煽る。最高級品なのだろう。味は悪くない。しかし、俺としては、父上の好む麦酒か母上の好む米酒の方が良い。はつきりいつて、ルクの接待を眺めながら、酒の品評をするしかやる事が無い。

イルサは玉座を立ち、シュナアダやカリサペクを脇に控えさせながら、誰かの話を聞いている。彼処に俺が行くのは憚れるな。

クレサイダは誰も寄せ付けず、壁際に控えてイルサに目を光らせている。クレサイダと二人きりだとしても、俺もあそこの方が居心地が良さそうだ。

「リセス・ネイスト殿」

「何でしょうか？」

逃げようとする俺に、見知らぬ男から待ったが掛かる。機嫌は悪いが、当たり障り無い対応は心掛けておこう。

「貴方はどちらの世界からお越しになられたのですか？」

「クーレですが」

早く解放して欲しい俺の気持ちの所為かも知れないが、この男の声には、何処か俺を見下しているような響きを感じる。

「そうですか。わざわざクーレからね？ところでイルサテカ様は何処でお会いに？」

こいつが俺から聞き出したい事は分かった。やはり、シュナアダの虚言を完全に信じる者ばかりでは無い。さて、どうするか？

「失礼ながら貴方様は？」

情報線は焦ったら敗けた。まずは相手を焦らす。最小限の情報を与え、最大限の情報を引き出す。クーレ最高の諜報員の息子を舐めるなよ。

「これは失礼。私はラルシ地方を治めるラルシテキと言う者です。それで、イルサテカ様とは何処で？」

一地方の領主か、なかなかの大物らしいな。最も自分の聞きたい事を語尾を強くし、脅しめいて優先させる時点で器は大した物では無いだろう。

「さて、何処だった事やら」

下手に嘘を吐けば、答えを証すも同じ。最も既にこいつはその質問に確信を持って、俺に更なる確実を求めているのだろが。今さら、何を言っても状況は変わらない。ならば、わざわざ俺を苛つかせるな。

「つまり、クーレで会ったと考えて宜しいのかな」

勝ち誇った顔を浮かべる男。勝手に勝ち誇ってる。

「例えそうだとして、貴方はどうするのですか？魔王の不在に反乱でも企てると？」

ズバツと言ってやると表情を強張らせる男。少し軽率過ぎる発言だが、してやったりだな。

「私はシールテカ様に忠誠を誓った、魔王の忠臣だよ。そんな事を企む訳が無いじゃないか」

冷静を装おうと頑張ってらっしゃるが、指が震えてらっしゃいますよ？

「ならば、イルサには忠誠を誓っていないと言うことか？」

出過ぎた真似だとは分かっている。しかし、イルサはお前らのお飾りでは無いんだ。その点で俺はヘブヘルの奴等に、苛ついているのは確かだ。

「貴様こそ、イルサテカ様を呼び捨て等、無礼な事を！不忠では無いか！」

俺の鬱憤の捌け口になった男は、怒りを隠す事を止めたようだ。俺はイルサに忠誠を誓った事など無いからな。どうしようも無いイルサに紳士的に手を差し伸べているだけだ。

「そこまでしておこうか、御兩人。ラルシテキ殿、リセスはイルサテカの従者であると共に大事な客人でも在るんだ。余計なちょっかいは止めて貰おうか」

この男が馬鹿騒ぎをした所為で注目が集まった俺達の間、堂々と仲介に入って来るパシクダカ。感謝するべきなのだろうが、つい睨んでしまった。

「しかし、こいつは」

「一つ言っておこう。こいつは、俺の獲物だ。俺より先に手を出すなら覚悟しろ」

ラルシテキを黙らせるパシクダカ。

鳥肌が立つ寒気が俺の全身を覆う。これが、ヘブヘル將軍の凄味か。実力のほどが窺える。

有無を言えなくなったラルシテキは、踵を返し、城の外へ。

「リセス、ちよつと付き合え」

機嫌の悪いパシクダカは俺にも、有無を言わさせてくれない。黙ってついて行くしかないようだ。

俺が何をしたって言うんだ。イルサの為に言っ
てやったんだぞ！それとも、お前にとつても
イルサはお飾り魔王様なのか！

本当にここは最悪な世界だ。

魔王の役目、俺の役目 1（後書き）

予定していたより、大分長くなりそうです。

次の話で終わるのかな。

魔王の役目、俺の役目 2

歩く中、少し俺の餓鬼のような興奮が冷めて、代わりにイルサに間接的に迷惑を掛けてしまった罪悪感が生まれる。俺ごときが他の世界の国政に口を出してはいけなかった。

無言で俺の先に行くパシクダカ。まるで、死刑執行人に連れて行かれる罪人の気分だ。

連行された場所は他に誰も居ない城の暗い中庭。俺に向き合うパシクダカ。俺の処刑は執行される時が来た。

「坊主、この世界は力が全てだ。テメエの世界じゃどうだか知らねえがな。イルサテカがラシルテキに力で劣る様ならば、ラシルがテカになるだけの事だ」

パシクダカは静かに怒りを露にする。

「つまり、イルサがあいつに劣ると？そうじゃないだろう。イルサの方が王として」

「あめえよ、お前は。イルサテカにシルテカのような王としての器はねえよ。あいつはシュナアダやクレサイダ、カリサのお陰で玉座を護って貰っている奴だ。あいつは、政略も戦略も戦術も自分の世話すら出来ねえ奴なんだよ」

こいつもシルテカの娘と言うだけでイルサを利用する奴なのか？くそ、とつとつ、イルサをこの糞食らえな世界から連れ出してやる。

「…だがな」

俺から星空に眼を移すパシクダカ。

「あいつは、シールテカの野郎に似てるんだよ。まあ、シールテカに比べれば、全然弱えけどよ。でも、強えんだよなあ。何かが俺は敵わない。イルサを一瞬で殺れる俺がイルサテカから玉座を奪えない。何でだろうな？」

俺に聞かれても困る。俺には分からない。イルサの強さなんて。母上が父上の事を語る時に言っていた、弱いからこそ強い人間。イルサがそうなのだろうか。

「だからよく、まあ、お前はヘブヘルのルールでも正しい事をやったと思うぜ。まあ、少し過激だったが。ああ！もう難しい話は無しだ！馬鹿な俺のする話じゃねえ！後の御説教はクレサイダかシュナアダに聞け、以上！」

パシクダカの御説教には共感が持てた。少しだけ、心が暖まった気がした。イルサを尊敬しては居ないだろうこの軍隊長に。

「リセス、パシクダカ。ここに居たんだ！」

噂をすれば影が差す。現れたイルサ。パーティー会場と違って変わって、いつものイルサだ。

「おいおい、メインの魔王が抜け出して来て良いのかよ。シュナアダに怒られんぞ」

「病み上がりで体調が悪いって言い訳してきたから良いんだよ」

なかなか、抜け目のない奴だ。しかし、何だろう。イルサと普通にやり取りをするパシクダカ。何だか兄妹みたいに見えて、俺の中で先程までうなぎ登りだったこの人の評価が停滞する。

別にイルサとその家来が仲が良いのは良いことだ。少しだけ、イルサと仲良いパシクダカが微笑ましくて羨ましく思ってしまうのは、俺が甘い餓鬼だからだろう。

「俺はもう行くぜ。イルサテカの相手は任せた。ああ、後、明日練兵場に来い。クーレ剣士の实力を知りたいぜ。ああ、クソ、ナールスにリベンジしたいぜ」

俺にクーレ史上最強の剣士リンセン・ナールスの代わりが務まると思えない。彼を満足させられるのは、クーレ最強を競うアレンさん、カーヘルさんぐらいだ。でも、去り行くその人の背中には、自然と頭が下がる俺がいる。

「じゃあ、リセス、相手お願いね」

イルサが俺に満面の笑みを浮かべて来る。まあ、うん、あれだ。良く知らない奴の相手するよりはマシか。

魔王の役目、俺の役目 2（後書き）

まだまだ続いちゃいます。この話。でも、一端切るのが天見酒の低クオリティ。

今日中に投稿しますので、もうちょい、お待ち下さい。

魔王の役目、俺の役目、そして従者の役目

イルサが指で差す方。円形の花壇を四方に囲むベンチ。

「座ろうよ」

友人同士として普通の事だ。夜のベンチに唯の友人の男女二人並んで座った所で何が在るわけでは無い。全く問題は無い。俺がこういう状況に馴れていないだけで。

俺の右隣に腰掛けるイルサ。少し距離が近くないか。少し離れるべきではないか。

「久々の晩餐会で疲れちゃたよ。リセス、ごめんね。その、楽しめなかったよね…」

卑怯だな。そんな顔で懺悔されたら、神だって叱責出来ない。それにこいつの所為では無い。クレサイダやシュナアダに怒りを感じる。

「お前こそ、楽しめたか？」

「ウーン、あんまり楽しく無かったかな」

寂しそうに俯くイルサ。やっぱり、こいつに魔王は似合わないんだ。

「なあ、イルサ。クーレに住まないか？」

俺が側に居てやるよ、あんな奴等の代わりに。こんな利用されるだけの世界なんて嫌だろう。

「何で？」

イルサの為に勇気を出して言った台詞は、理解されなかったようだ。こいつは、分かっていない。どれだけ自分が最低な世界に居るのか！だから、声を荒げてしまった。

「お前は、利用されてるだけだぞ！魔王とか何とかで担ぎ上げられて！クレサイダやシュナアダに」

「そうかも知れない」

俺に言われる前に、薄々気付いていたようだ。俺を寂しげな瞳で見詰めるイルサ。しかし、イルサの眼は俺の遥か上を見る眼に変わる。

「でもね。クレサイダやシュナアダは、私の為に必死に頑張ってる。私みたいな情けない魔王に必死に利用されてくれているんだよ。私なんかの為に。だからね、クレサイダやシュナアダや皆の為に私は頑張らなきゃって思うんだよ。少しでも、皆の役に立ちたいんだよ」

幼稚な言葉を並べるイルサ。しかし、俺はイルサよりもお子様な考えしか持っていない。

「だからね、私はリセスやルクちゃんの為にも頑張るからね…フア」

嬉しい限りだ。しかし、そこで可愛らしい欠伸が入ってしまう所がこの魔王様なのだろう。

「眠いのか？」

「お酒飲んじやったから…、眠い…」

酒が入ると寝てしまうタイプらしい。普段、酒だけは口にしない奴だからな。少なくとも、酔うと暴走し出す奴よりはマシだ。

「部屋に戻って寝ろ」

「やだ、リセスともつと話すう…」

その気持ちは大変嬉しいが。おい、寝るな。人の肩を枕にして！俺が動けなくなってしまうたじゃないか！

くそ、このイルサの寝息を立て始めた顔が、肩の上に乗った状態の俺をクレサイダが見たら。

「こんな所で何やってるんだい。リセス？」

タイミングが良いな、クレサイダ。自分の登場場面をすっかり分かってるじゃないか、ハハハ…。

じつくり、じわじわと迫ってくる死の恐怖の象徴。

「姫を起こすなよ」

奇跡が起こる。クレサイダは空いている俺の左隣に腰掛けるだけ。お前、クレサイダだよな。また、観測者に乗っ取られてる訳じゃないよな。

「煙草」

クレサイダから不機嫌そうに吐き捨てられる一言。一瞬戸惑うが、イルサを起こさないように、細心の注意を払いながら、在庫が僅かになってきた貴重な煙草を差し出す俺。媚びを売るようで情けない。

「やっぱり、君はシュナアダのやり方が気に入らないかい？」

イルサの話聞いてなお、俺はやはりイルサを弄ぶ行為は許せない。声に出す自信は無い。だから、首を縦に振る。

「やっぱり、君は甘いよ」

自分でもそれを理解し初めている。でも、このイルサが可哀想で。

「君は、ライシス・ネイストが強いと思うかい？」

突然の質問。

「ああ」

肩に大切な荷物が乗っかって居なかったら、立ち上がって力を込めて言ってやる所だ。

「確かにあいつは強いよ。僕は本当にム力つくけどあいつに勝て無かったからしね」

当然だ。父上に敵う者など、どの世界にも存在しない。

「でも、あいつがアレンやラベルグのように剣を振れるかい？ニ―セのように、上級魔法が使えるかい？あいつにシュナアダのように政略が行えるかい？」

戸惑うしかない。父上は、ラベルグ氏は分らないが、アレンさんには剣で敵わないだろうし、父上と並んで、最強の魔法使いニーセさんに魔法で敵うのかは分かったものでは無い。政治などに関わる事を避けて来た父上の政略の実力を知る術は無い。

「シュナアダはパシクダカのように剣は振れない。魔法はそこそこだけど、僕よりも劣る。姫のように王の器も無い。でもね、執政をやらせたら、ライシスにも負けないね。最強だよ、絶対にね」

身内自慢だ。とは言えない。

「シュナアダは、あいつの力を最大限に引き出せるように姫を利用してゐる。君の持つてゐる下らない正義には反するかもしれないけどね。君にあいつの力を否定する事は出来るのかい？」

煙を吐きながら言うクレサイダ。俺は甘ちゃんだ。父上に憧れるだけの。イルサの為、頑張ったつもりだった。でも、シュナアダもイルサの為に自分の役目を貫き通している。俺が甘ちゃんだけなんだ。

「言い返す言葉も無いって？君は甘ちゃんだねえ」

クレサイダの嫌な笑みも今なら素直に受け入れられる。どうせ俺は、父上ばかりに憧れていただけの餓鬼だよ！

「でもね、それが君の強さだと…思う…よ。姫を少し甘やかせてあげられるし、君は甘ちゃんて良いんじゃないかな」

少し救われた気がして見ると、煙草に夢中なフリをしているクレサイダ。月や星の明かりしかない暗い庭園内でも分かるほど耳が赤い。この恥ずかしがり屋め。「クーレでも有名なヘブヘル最強の大魔導士殿も、人を励ますのは苦手なようだな」

少しからかいたくなつた。

「クツ、別に君を励ました訳じゃないさ。馬鹿な事言ってるって焼き殺すよ」

焼き殺すか。今は、その言葉が少し嬉しくなってしまう。俺の頭はそこまで変になつたらしい。

「リセ君何やってるの〜!」

五月蠅い奴が来た。クレサイダと話しているだけだ。

「イルちゃんをこんな暗がりにつれ込んで〜!」

俺の肩にある重みを忘れていた。大声を出すな。もう、遅いか。イルサが眼を擦り始めた。

「ホウホウ、なかなかやるね〜!リセス坊、イルサ嬢と雰囲気ばかりじゃないか。クレサイダ君、邪魔したら駄目だよ」

「いや、少し暇だから、散歩しようと思ったんだけどな。お邪魔したか?」

大幅の誤解を伴って、俺を裏切って逃げた一人と一匹も集まってきた。

「ウギアー！姫〜！そいつがリセスとか言うクソ野郎ですね！姫からとつと離れやがれクソ野郎！」

食事を乗せたお盆を持ちながら、全速力で駆けて来るカリサペクだったか？俺は何故、罵倒されている。イルサが勝手に俺に寄り添って、寝たのだ。そしてイルサ、寝惚け眼に俺に引付くのを止める。

「カリサ、五月蠅えぞ。別に良いじゃねえか。てめえらもイルサテカも、ろくに飯食ってねえだろうと思って、厨房からパクって来たぜ。まあ、最高級の酒じゃないが、これ無かったが、この酒はなかなか行けるぜ」

琥珀色の液体の瓶とグラスを乗せた盆を持ったパシクダカ。気が利いている。葡萄酒ではなく、麦酒を持って来てくれるとは。この人は確かに軍隊長としての素質がある。ジンさんにも劣らないだろう。

「イルサテカ様、こんな所に居たのですか！主役がこんな所で！」

シュナアダ。俺の少し楽しい気分には水を差すように現れた。

「ごめんなさい」

カリサペクの持つて来た料理の匂いに完全に覚醒したイルサ。さっきまで、極楽気分な表情から一変して、しょんぼりと頭を下げる。クレサイダの言った事は正しいだろう。シュナアダは執政者として正しく王をたしなめている。でも、イルサのその顔を見て、俺は密かにシュナアダに敵意の籠る視線を送ってしまう。

「…今回は許しましょう。一応、病み上がりと言うことで言い訳が立ちますからね。後は皆様と好きにしてください。しかし、あまり

騒がないで下さいね」

怒っているのか、笑っているのか分からない表情でそれだけ言う
と去って行くシュナアダ。

「ああいう奴なんだよ。シュナアダは」

クレサイダが俺だけに聞こえるように言う。ああいう奴なんだな、
シュナアダは。

「クソ野郎、そこをお退き下さいませ。姫のお隣は、姫の幼少の頃
からの世話役であるこのカリサペクと決まっています」

「えー、リセスともっとお話したいよ」

「カリサペク、姫にベタベタするなって言ってるだろ！殺すよ！」

「じゃあ、可哀想なりセ君と、このルクちゃんがあっちのベンチに
座ってあげよつかなく？うん、仕方ないからね」

「いやいや、青春だねえ〜？」

「おっ、アースの兄ちゃん、良い飲みぶり。イける口だねえ〜」

「そついうあんたもイける口だろ？ほれ、ご返杯」

ささやかで、騒がしい俺たちのパーティーが幕を開けてしまった。

先程までと正反対に翻して、少しこの世界の人々が好きになってし

まった俺は、やっぱり甘ちゃんなのだろうか？

魔王の役目、俺の役目、そして従者の役目（後書き）

長い！と思うのは、天見酒が天ちゃんなせいかも知れません。

他の作者さん達と違って、普段は一話を二千字程度で済ませる墮落つぶりですからね。

どうぞ、少しは長い文を書けるように成長したと、生暖かい目で見守ってやってください。

世界を観た男

ヘブヘルへは、休暇として立ち寄った筈だった。だからと言って、俺はダラダラと過ごす気は無かった。

しかしだ、俺はアースで負傷し、イルサの治癒魔法では、どうにもならない血液不足な身体を労るつもりであつた。身体を鈍らせ無い程度の軽い運動のつもりだった。

「もうへばってるのかよ。情けない」

地面に手を突き、空気をしきりに吸う俺のそんな事情を考慮しようとしてもしない鬼教官。最も俺の身体が万全を期していても、こいつには敵わないということは手合わせをして、はつきりと分かった。くそ、パシクダカにせめて一太刀を浴びせたい。このまま、終わらせたくない。悲鳴を上げる身体を持ち上げる。

「ヘブヘルじゃあ中々居ねえ、良い根性だぜ」

俺と違い大して疲れていないパシクダカ。その余裕な笑みに父上譲りのクーレの根性を叩き付けてやる。

「君は何やってんのさ？少しは身体を休めるって事を考えられないのかい？」

せっかく復活した俺の闘志に水を差すクレサイダ。

「うるせえ！男の真剣勝負に口を出すんじゃない！」

全くだ！さあ、次こそはパシクダカから一本取る。

「君達のチャンバラどうでも良いけど、リセスに用があるんだよ。後にしてくれない？僕も結構、真剣な話んだけど」クレサイダとしては、陳情な態度だ。世間話では無いだろう。

いつの間にか俺の先生になっていたパシクダカに一礼をしてクレサイダとその場を去る事にする。

「それで、話とは何なんだ？」

城の一室。おそらく軍議を行う部屋に集まった俺たち。

全員がこれからクレサイダが語ろうとすることに集中しようとしている。机に突っ伏しているイルサ以外。朝食後シュナアダに執務室に引っ張られて行って、まあ、色々と大変だったのだろう。

「それで、話とは何なんだ？」

イルサを何とか起こす事に成功したクレサイダに俺が代表して開口する。

「いい加減に君達も知っておくべきだと思ってね。世界の欠片について詳しく」

イルサの隣に座るクレサイダ。辺りに満ちる重々しい空気。そして、一つの欠伸。魔王様、頼むから空気を読む事を覚えてくれ。

「まあ、僕が話しても良いんだけどね。ここには、もっと詳しく知

つてる奴が居るからね。そいつに喋って貰うことにしようと思う」

クレサイダ以外の視線がイルサの後ろに立っている男に向かう。

「私はクレサイダよりは世界の欠片については知りませんよ」

シユナアダの否定に一同クレサイダへ目を戻す。一番博識に見えるシユナアダが違うなら、言うまでもなく俺たちの中にクレサイダ以上の知識を持った人間は居ないぞ。俺たちの顔の動きを見て、したり顔で自分の胸に指を向けるクレサイダ。

「ここに居るじゃないか」

いや、クレサイダが詳しくを知っているのは知っている。お前より、詳しく知ってる奴が居ると言うから…。

「伯父さん？」

イルサの発言でクレサイダが自分を指した意味が分かった。どうも俺にとってはその身体はクレサイダの物であるという意識が根付いてしまっているらしい。

「えゝ、でも、大丈夫なの？イルちゃんの伯父さんに意識を与えるんでしょう？また暴れちゃたりしない？」

「大丈夫さ。今回は僕も魔力が残ってるし、全てを明け渡す訳じゃない。こういう事も出来るしね」

クレサイダの背中から出る黒い霧状の物体。刃のように鋭い形に姿を変えて、自分の喉の前で止まる。

「クレサイダ、伯父さんにそんな事しちゃ駄目だよ！」

「姫、これは仕方ない処置なのです。こいつが暴れないとも分からないですから」

イルサも見たはずだろ。観測者の実力を。しかも、奴は必ずしもこちらの味方では無い。

「伯父さんはいい人だよ。話せば分かるもん」

まあ、イルサにはな。いや、クレサイダの処置は正しい。あの観測者は姪のイルサにとって危険思想者だ。

「まあ、あの観測者とか言う奴には、イルサが一番の抑止力になるじゃねえか？何か合ったら、またイルサが泣き付いて懇願すれば良いじゃんか」

ウエダさんの言うことが正しくもあるのだが。それは駄目だ。何か駄目だ。そうだろ、クレサイダ。

「心配しなくても、姫にそんな事は僕が絶対させないよ」

ウエダさんに睨みを効かせるクレサイダ。全くその通りだ。及ばずながら協力するぞ。

「じゃあ、そろそろ出てきて貰うか」

クレサイダの首が力を失い落ちる。そして、直ぐに上がる。

「ふむ、クレサイダ、こういう風の吹き回しだ」

声質は変わらないが口調は変わった。観測者が現れたのだ。

「ちよつと君に世界の欠片についてご講義願おうと思ってね」

観測者の身体の何処からか聞こえるクレサイダの声。少しその声に安堵した。シャプトとは中々便利な生き物だな。

「世界の欠片だと？何故、そんな事が知りたい。お前達の知って良い事では無い」

クレサイダと同じことを言う。確かに世界の欠片の存在など知らなければ、俺がこんな事態に巻き込まれる事はなかった。

「ところがね、観測者君。マスナーがカイクを使って集めているのだよ。世界の欠片をね」

セルツが突然発言をする。それは明らかにマスナーについて何かを知っている事を示している。この栗鼠にはまだ俺たちに隠し事があるらしい。

そして、その内容に観測者は眉をしかめる。

「成る程な。あの介入者はまた良からぬ事を始めたか」

「その良からぬ事を止めたいんだよ、僕らは」

自らの身体から聞こえる声に、しばらく無言で俺たちの顔を見ながら考え込む観測者。

「伯父さん、お願い。私たちに教えて下さい」

「クツ、分かったからそんな捨て犬のような眼で私を見るな。シルビーに似て可愛いと思ってしまっただろう」

「あんた、重度のシスコンだな。イルサ、こいつには気を付けろよ」
ウエダさんの言うシスコンの意味は分らないが、イルサが気を付けないといけないのは確かだ。イルサ、あまり近寄るなよ。

「まあ、まずはだな。私はクレサイダとシルテカにより、長期間眠らされ、近況に疎い。情報を整理したい。まずはそちらから何が起こっているか話して貰おうか。私が話すかはその後に決める」

中々用心深い。こちらが情報を提供しても情報を出してくれるとは限らないと言うことか。ここの判断はクレサイダに委ねるとしよう。

「じゃあ、私たちが話したら、話してくれるんだね。ありがとう。伯父さん」

イルサ、お気楽に微笑みかけるな。此方は試されてる訳であつてな…。

「ウツ、まあな。観測者として話してはならない事だが、姪に頼まれたのだ。少しは無理をしよう」

姪の笑顔は観測者の職務より強いらしい。
って、おい、今、イルサの頭を撫でやがった！

「貴様、姫に気安く触れるなんて、その腕切り落とすよ！」
よし、問答無用でやってしまえ。

「なっ、少し触れただけであろう。第一、実の姪に適度なスキンシップをして何が悪い！」

絶対的に悪い。くそ、イルサも嬉しそうに眼を細めてるんじゃない。

「とにかく駄目なんだよ！今度やったら、只で済むと思うなよ」

そうだ。とにかく駄目なんだ。

「何かよ、同じ身体で喧嘩するって面白い光景だよな」

ウエダさんが暢気な事を言い出し、場が静まる。

「取り敢えず、クレサイダ君。観測者君に現状を話さないかね」

セルツの大人な発言で場が収まる。

「その前に、一つ言っただけで起きたい」

落ち着きを取り戻した観測者。

「観測者は私だけを指す名前では無い。私の名前はクラフだ。まあ、好きに呼んで構わんが」

此方も自己紹介をした方が良さそうだな。それにしても案外、イルサの言った通りに言葉が通じる奴だった。

「アツ、私はイルサテカです。よろしくね、クラフ伯父ちゃん」

太陽のように眩しい笑顔付きで即座に返すイルサ。その返答に僅かに頬が緩むクラフ。

「…クラフ伯父ちゃん。あつ、いや、イルサに呼ばれて気に入った訳では無くてな。まあ、好きに呼べ」

俺の中で狼狽して訂正する男の評価は急流下りだ。いい加減に真面目に話し合わないか？後、クラフ伯父ちゃん。イルサの頭をまた撫でようとするな！

世界を観た男（後書き）

次回こそは、シリアスに世界の欠片について迫っていきます。

何かこの話はキャラ崩壊しまくりのような。きっと気のせいですよ
ね。

1 / 6の世界

「成る程な、マスナーめ。好き勝手にやってくれているものだ」

一つの身体で話し合う二人の会話は終盤を迎え、一人不機嫌そうに
呟くクラフ。

「一人漫才を見てるような気分だぜ」

ウエダさん、その一人漫才とは何ですか？

「さて、この状況、お前達を信用して話すべきかどうか迷う所だな」

「話しが違うんじゃないかな」

「クレサイダ。お前もある程度は世界の欠片について知ってるのだ
ろう。これが本当はどういうものなのかを。だから、お前はこいつ
らに黙っていた。違うのか？」

さすがに易々と話してはくれないか。中々口が固い奴だな。職務に
対して堅実なのだろう。クレサイダが話さなかった真実とは何なん
だ。マスナーは何をやるうとしている。

「クラフ伯父ちゃん…」

「クツ、分かったある程度は話してやろう。そんなつぶらな瞳で私
を見るな」

前言撤回だ。愛すべき姪に対しては、腐った木の皮よりも口が軟ら

かいようだ。愛妻愛娘家のジンさんと良い溺愛勝負できそうだ。

「何処から話すべきか。まずは、世界の欠片が出来た理由。いや、この6つの世界が出来た理由を話すとするか」

イルサの切ない瞳に崩された顔の締めりが戻ったクラブ。やっと、本題に入れるようだ。

「最初はこの世界は一つだった…」

衝撃のカミングアウトから始まるクラブの話。

これは、千才になる私が生まれる遙か昔の話だ。

大まかに6つの種族の住む一つの世界。科学を力とする種族。魔法を力とする種族。自然と共存し、自然の力を借りる種族。肉体を無くし、精神だけで生きる種族。全ての力を僅かに力とする種族。そして、全ての力を最大限に持つ種族。

この6つの種族間での争いの続く世界だったらしい。

その世界を変えたのが、オシリス。彼は全ての力に優れた種族の中でも全ての能力に優れている人物だ。

彼はまず、世界の球を創った。それは手のひらに収まる球。しかし、それはその世界そのものだった。世界の形を変える代物だった。

次に創ったのは、世界の原理を封ぜし杖。オシリスの杖。そして、全てを切り裂く剣、ペグレシャン。

オシリスはペグレシャンにより、世界の球を六つに分けて、オシリスの杖で六つの世界を創った。そして、六つの種族は六つの世界へ

と別れた。争いを起こさないように。そして、いつかの日か、また世界を一つになる日を目指して。

「ハイハイ！クラブおじ様に質問です」

ルクはいつもながら、度胸があるな。話をぶち壊して、クラブさんにおじ様をつける度胸はお前かイルサぐらいだぞ。

「つまり、その世界の球を割った後が、世界の欠片で、オシリスの杖がドウーチの杖なんですよ。何でそんな重要な物が各々の世界にあるの？後、セレミスキーがクーレに來た理由やペグレシヤンがヘブヘルの魔王様に渡った理由も知りたいな？」

俺の持つセレミスキー。アールからセイン・セレミスが召喚したものだと聞いているが、セレミスキーが今回の件と関係有るのか。

「セレミスキー？オシリスの鍵の事だな。それに関してはこれから話そう。それにしても、これだけの話でそこまで読めるとは、中々賢い淑女だな」

クラブに褒められて、それほどでも無いですよと、笑って誤魔化すルク。こいつは、普段何も考えていないように振る舞っているが、実は考えが深い。普段の振る舞いから誤解され易い奴だがな。少しだけそんな根は真面目なルクを見つめてしまふ俺が居た。

「リセ君。そんな私の事を尊敬し直した眼で見ないですよ。私はいつも尊敬出来るレディだよ」

どこがだ？

「あゝ、二人ともそういうあれは後でやろうか。クラフさん、この二人のやり取りは無視して続けてくれや」

ウエダさん、今、ルクを見直さなければ、いつこいつを見直せて言うのだ。

クラフさんが話し出すのを止める気は無いがな。

まずは観測者の説明だ。私達の役目だ。端的に言えば、他世界を争いの無い世界に最低限の介入で導く事。直接的には手を下さない。その世界の統率するに値する人間に知識や力、世界の欠片を与える事。それを行うのが観測者の役割。アールから各々の世界に一人だけ送られる存在。私はヘブヘルの現観測者：だった。

しかし、二千年前のことだ。アールに介入者達が現れた。現世界を否定し、現世界を原初世界に今すぐ戻そうと、各々の世界に裏で糸を引き、動かす奴らがな。その代表がセルジオ、そいつに従う一人がマスナーだ。

まず奴らは各々の観測者に配られる異界への道を開き易くするオシリスの鍵と杖、ペグレシヤンを奪った。それは用いて、観測対象者に世界の欠片を集める為にそれを配ったのだ、各々の世界の力ある者に。

しかし、誤算だった。ペグレシヤンと世界の欠片を得たヘブヘルのシールテカは、他世界に興味を持たず、ヘブヘルの統一に尽力を注ぎ、クーレのセイン・セレミスは有能であったが、有能故に、そのオシリスの鍵を困窮する人の為にだけ使った。介入者は使い方を間違った。セレミスに世界を統一しろと催促する介入者の代表格セル

ジオに対して、セレミスはオシリスを召喚すると言う最善の判断を取り、セルジオはオシリスの創りし異世界の牢獄へと封じられた。

それで、終わった筈だった。クーレの観測者だったマスナーが裏工作を始めなければな。

六百年前のクーレの動乱。クレサイダやそのシュナアダは良く覚えていだろう。あれはマスナーがクーレ人を唆し、魔王を喚ばせ、その魔王に欠片を集めさよとした事に起因する。結果はクーレ人の知る通り、その愚かなるクーレ人、リンセン・ナールスによって失敗に終わったがな。

「そして、最後に二十年前のクレサイダが勝手に起こしたクーレでの争乱。まあ、上手く利用しようとしたらしいが、ヘブヘルの観測者だった私の妹が仕事を放棄して、魔王シールテカが、あのクソ野郎が！まあ、手を出しててだなあ、うむ。その色々と合って失敗したのだ」

最後の話でかなり重い話しが軽く感じてしまう。

「えっと、お父様とお母様がどうしたの？」

「ソツ、それは、まあ、観測者として話す訳には如何のだ」

イルサ、クラフさんも伯父として大変なんだ。そこは突っ込んだ話を聞かないでやってくれ。

「取り敢えず、マスナーの意図は分かっただろう。世界を統一する事だ。カームだったか？あいつらがマスナーに操られる理由は分らん。まあ、シールテカの血を引いて、全世界の王になるうとして

いる辺りだろうが」

「お父様もお兄ちゃんもそんな事しないよ！」

クラフさんの言葉を隣である程度清聴していたイルサが急に机を叩く。

「イルサテカ様。現にカイムはシールテカ様やシルビーテラ様を殺害しました。もう貴女の兄では無いのです。そこをわきまえて下さい」

シュナアダが魔王を諫める。それで顔を雨模様に変らせて席に着くイルサ。シュナアダの言っている事は最もだと感じられる余裕が俺には生まれてはいる。しかし、それは魔王に対してだ。イルサの兄に対して想いへの配慮は無い。こんな時に俺はイルサに何て声を掛けてやれば良いのか。

「イルサ。まあ、今までのクラフさんの話が、召喚とか、異界の争乱とか半分も分からねえ俺が言うのもなんだけどよ」

微妙な沈黙状態を破って話し出すウエダさん。

「俺みたいに色んなバイトをやったりやあ、嫌でも知るんだけど、人には、立場ってものがあるわけよ」

俺もヘブヘルに来て学んだ。と、思っていた事。

「クラフさんにやあ、観測者として観測者の立場が在るし、シュナアダさんにやあ、魔王様の補佐官としての立場が在る。だから、お前の兄ちゃんにその立場から見ちまって、判断しちまうんだよ。そ

れが立場つてもんだよ。だから、この人の言う事は間違っちゃいない」

ウエダさんの大人な意見に素直に納得出来ないのは、俺が子供で甘ちゃんだからか？その立場上、正しいから従えと言うのか。

「でもな、お前にはお前の立場があるんだぜ。カイムの妹って立場がな。だから、無理にお前だけが意見を押し込める必要はねえよ。俺はこの人の立場も尊重するし、お前の立場も尊重する。ただ、それはこいつらの立場を汚して良いもの訳では無いぞ」

ウエダさんが、あれだ。あれなんだ。凄く大人らしく見えてしまう。そして、俺がとても子供みたいだ。

「いやあ、ウエダ君。成長したねえ。おじさん、育ての親として嬉し涙が出て来てしまうよ」

「茶化すな。第一、お前に育てられた覚えはねえ」

世界の欠片についてよりも俺の立場でイルサの為に何が出来なのか。そんな事を考えてしまう俺が居る。

1 / 6の世界（後書き）

少し説明文が長くなっちゃいました。

まあ、真相はこんな感じです。深く無い真相でしたが。

次話こそはリセスに語り部を外れて貰いましょう。

「若いつて良いね」

夕食を堪能して、俺は部屋で食後の一服を楽しむ。先程から俺の同室者は、落ち着きなく、刀を弄ったり、道具の整理を行っている。俺みたいにド力つと構えてりゃあ良いのに。色々と頭の中を整理したい気分なのは分かるが、焦り過ぎんなよ。

「少し振つてきます」

刀を掴んで、部屋を出て行ってしまう。少しは腰を落ち着けて、身体を休めるという考えには至らない年頃らしい。いや、あいつが苦手なだけか。

「若いつて良いね」

どこぞの栗鼠の口癖が移ったのか、そんな爺臭い事を呟ってしまう。

「君も十分若いがね」

「まあ、そうなんだけどさ。あそこまで、純粹に行動は出来ねえ」

俺の身体は既にピークを越えて、老いる一方だしな。昨日のパシクダ力と飲んだ一瓶ほどで酒が頭痛に代わるのも年を喰った証拠だ。

「ウエダ君、心掛け次第で人は若くなれるものだよ。おじさんだつて、まだまだ若いんだから」

八百歳以上の栗鼠は、まだまだ若いのか。まあ、心が燃えていても身体が着いていかない年なのよ、俺は。

リセスは良い。若いし、実力がある。だから、考えに答えを求めず、身体で答えを求められる。

嫌だね。二十代でこんな事を考えるなんてねえ。どうやら、俺はセルツの言う様に、身体よりも頭の中の方が年寄りだな。

「それじゃあ、人生経験豊富なセルツおじさんに若作りの仕方をお聞きしようか？」

まだ寝るには早いからな。リセスの様に身体を動かす気にならない俺は頭を動かして置くとしますか。

「フム、そうだねえ。まずは楽しむ事じゃないかな？」

「ホウホウ」

分かりやすい心構えを簡単に言いますね。

「例えばだよ。君の今吸っている煙草はどんな状態だい？」

「この銘柄が一番上手いと感じる。ってことで良いのか」

そう言えば、アースに帰れない俺はこの銘柄を手に入れる機会も無いんだよな。リセスも吸っているから煙草事態はあるらしいが、愛着あるこの銘柄が無いと少し寂しくなってくるな。

「ちよっと、違うんだよ。おじさんが言いたかったのは、煙草の長さだよ」

煙草の長さ？もう半分ほど燃え尽きているが？

「まあ、そろそろこの一本ともお別れだな」

「でも、まだ吸えるよね？そこで何を思うかで君が楽しく過ごせるかどうかが決まるのだよ」

まあ、確かにまだ吸えるが、俺は煙草を楽しんでるぜ？

「その半分になった煙草。もう、半分しか残っていないと思うか、まだ半分も楽しめると思うか。どちらが楽しめると思うかい？」

子供の為の単純な真理だな。しかし、こういう事をスラスラと口から出るところがセルツの認めらる点なのだろう。

「ウエダ君、何においても同じなのだよ。楽しむ心構えが出来ていれば、残り物ですら楽しめる。楽しむ心構えが無ければ、どんな素晴らしい物ですら楽しめないのさ」

帽子を布で拭きながら楽しそうに言うセルツ。俺がこの栗鼠に脱帽したいぜ。

まあ、俺は教えに従い、今はこの残った煙草を楽しむ事にしよう。今を楽しむこの栗鼠に負けない様に楽しまないとな。

半分になった煙草か、後どれだけ楽しめるものか。俺の後五十年そこらの人生も。

若いって良いね（後書き）

人生は楽しく生きましょう。

おっさん達のほのぼの？とした会話でした。

俺のするべき事

世界の事、観測者の事、介入者の事、カイムの事、イルサの事。そして、俺自身の事。

何から考えれば良いものか。俺はまず、そこから考えなければいけない。

ウエダさんは立場によって見方が異なると言った。それを考えれば、クラフ達観測者の見方は、世界を平和へ導こうとする正しくある。しかし、マスナー達介入者は元ある世界に戻そうとしている。これにどういう意味があるのかはクラフは語ってくれなかった。介入者の立場から見てもみないとその理念は分からないのだろう。

同じくカイムが何を目標しているのかは分からない。イルサにしてみれば、不良兄貴の乱行を止めたいところだろうが、シュナアダやクレサイダからしてみれば、只の国家犯罪者でしかない。

この一連の騒動を俺の立場からは、どういう見方が出来るのか？そもそも、俺の立場ってなんだ？シーベル工騎士団員、賢者ライシス・ネイストの息子。ジンさんや父上の存在しない世界では全く無意味な立場だ。

つまり、今の俺には立場が無い。そう考えると俺は何故にここに居るのが分からなくなってしまった。

振り上げたカタナが空を斬る。空に見えない直線を描くつもりが、実際に空に消えた線は明らかにぶれて曲がってしまった。

「大分心が乱れてますなあ。女の子の事でも考えてるのかなあ。いけませんなあ」

間延びした声。月明かりで暗闇の背景から浮き出てくる見辛い黒いロープ。代わりにはつきり見えるのは、意地の悪い笑顔の貼り付いた白い顔。

「いつから、見てたんだ？」

こちらは寝小便を見られたような気まずさだ。

「ついさつきからだよ」。リセ君が部屋を一人で抜け出したから、イルちゃんを夜這いしないように見張らないとね」

カタナを収めた俺に歩み寄りながら、生き生きとした笑顔で生き生きと抜かすルク。

「俺がするとそんな事を思うか？」

「思っていないよ」。だって、リセ君は据え膳があっても手を出せないヘタレだもん」

更に苦湯を飲まされた。俺はヘタレではなく、お前と違って節度を弁えているんだ。未婚の女性と過度な接触は避けるべきだ。それが節度で有ってだな。まあ、こいつと言いつても、理解されないだろうし、言い負かされるのが関の山だ。

「それで、リセ君は何を悩んでるのかなあ」。ルクお姉さんが相談に乗ってあげるよ？恋の悩みなら任せなさい」

「別に大したことじゃない」

ルクはたまに、お姉さんぶるが、たった三月俺より早く産まれただ

けだろうが。そして、ルクにだけは恋の悩みとやらは、絶対に相談したくない。何処に漏れるか分かったものじゃないからな。

「嘘が下手だなあ。リセ君は。どうせ今日の話を聞いて、俺の立場ってなんだとか、俺はこれからどうすれば良いんだとか、生真面目な堅物が考えそうな事で悩んでたんでしょ。ルクお姉ちゃんにはお見通しなのだ。」

確かに見透されていた。ローブに土が付くのも構わず、地面に座るルク。俺も隣に座れと手で土を叩く。

「そんなに俺は分かりやすいか？」

「私にはリセ君の心が手に取るように分かりますよ。付き合い長いしね。ほら、その、結構、リセ君の事見てるんだよ、私は」

そつだな。昔からの家族ぐるみの付き合いだ。この世界では、一番俺を見てきた人間だろう。しかし、

「俺もルクを同じ時間だけお前を見ているが、お前の心は一向に見透かせそうに無いぞ？」

「なあっ！乙女の心の中は覗かなくて良いの！特にリセ君は…。この話は無し。本題に行こー！」

そんなに焦らんでも、俺には覗けやしないぞ。

「えーと、あれだね。リセ君の立場だね？はつきり言って無いね、リセ君の立場。ここに居なきゃいけない理由も」

すつぱりと言ってくれる。俺を落ち込ませたいのか？

「でも、私だつて無いんだよ」

「だから俺もルクのように悩むなと言いたいのか？」

「違うよ。立場なんか必要なら、自分で作っちゃえば良いって言いたい」

立場を作る？自分自身の立場を作っても虚しく無いか？

「あのね、リセ君はさあ、イルちゃんの事、どう思ってるの？可愛いなあとか、その、恋人にしたいなあとか」

「お、おい。話が跳びすぎだぞ！」

何で急にイルサが出てくる。イルサを恋人にしたいかだと？有り得ないな。

「良いから答えなさい！」

ルクの眼がかつて無いほど真剣味を帯びている。気迫に圧されそう。何故、話さなければならぬ俺より前に、ルクの方が顔を赤らめているんだ。

「まあ、あれだな。うん。イルサは恋人とかじゃなくて、妹みたいな感じだな。見ててそのどうしようも無くほっとけ無い奴だ」

そう、あいつを一人にはさせたく無い。面倒を見てやりたい。そんな奴なんだ。

「じゃあ、あれだよ。リセ君は、カイムの代わりにイルちゃんのお兄さん役割をしてあげれば良いんだよ。だから、イルちゃんを全力で守る。それがリセ君の立場になるでしょ？」

「ああ」

俺が兄代わりに妹を守る。そうか、そんなものだな、俺の立場なんか。そんな即席な立場に全力を尽くせる。俺のやるべき事が出来た。

「どうかな？ ルクお姉ちゃんに相談して良かったでしょ？」

「ああ、ありがとう。ルクお姉ちゃん」

今回は素直に感謝して、お姉さんぶらせてやろう。

そのお姉さんは俺の感謝の言葉に照れて俯く。弟に照れるぐらいなら、お姉さんぶるには甘いな。

「えつとね、私の今の立場はね、リセ君のお姉さん代わりだからね、リセ君は強制的に私の弟と言う立場でも在るわけなのですよ」

俯いたまま、喋るルク。茶色い髪の間から見える朱い耳。横顔がこちらを少し向き、茶色の瞳が下から遠慮がちに俺の顔を捉える。おねだりをするときのルクの可愛い視線。俺はこの卑怯な視線には甘い。

「だからね、弟のリセ君には私を守る義務があるんだよ。うん、だから、私も守ってね？」

「ああ、任せろ」

俺は平心だ。今のルクの普段見せない姿に惑わされてなどいない。そう、立场上守ってやるのだ。

「じゃ、じゃあ、私はもう寝るね。お休み」

真つ赤に顔を見せないように頭を下げて走って行くルク。恥ずかしいなら言わなければ良い事だろ。全く訳の分からん奴だ。さっきのルクを見て、俺まで恥ずかしくなって来てしまっただろう。

俺は顔の熱冷ましにもう少しカタナを振ることにしよう。

俺のするべき事（後書き）

当初の予定では、この話はルクに視点を置こうと思っていたのですが、天見酒の書けない病が再発しました。

予定変更、やっぱりリセス。そしたら書ける書ける。主人公は偉大だなあ。

番外編 悪魔と天使

用意に背中を盗れてしまうものだ。盗らせたと言うのが正しいのだろう。翼の生えた背中が緩やかに振り返り、我を視認する。

「カイル様、何かご用命でしょうか？」

底の知れない素直な笑顔を向けてくる。その顔の裏は本当に底が知れん。

「特に用は無い。こんな何も無き岩場に、一人で何をしているのかと思ったただけだ」

他が寝静まった後に、一人で夜営地を脱け出すその行為の真意も知りたいがな。

「羽根を伸ばしていただけでございます」

文字通りと言うことか。マスナーは羽根を出せる穴の空いた袖の無いシャツから、急いでその純白の羽根を畳み、いつもの象牙色の口ブを着込む。

「そんな物を着なければいいでは無いか？」

「翼と髪を隠すのは、クーレの観測者としての習慣でしたものでして」

この世界の人間には翼が無いのだったな。翼を有するアール人を天使と崇め、ヘブヘル人を悪魔と蔑む。我はそんな愚かな視線など気

にはならないがな。

その天使がこのクーレに戦乱を起こした元凶だと言うのに、それを知らずに崇める。そんな輩に己の姿を偽るなど、下らな過ぎる。

「では、カイル様、皆様のところに戻りましょう」

羽根をしまい込み、フードで髪を隠したマスナーが立ち上がる。

「まあ、焦るな。我にはお前に聞きたい事が幾つかある」

「何でしょうか？」

マスナーと二人で話せる機会はどうそう無い。私の配下共は必要以上に関わりたくない奴ばかりだ。だからこそ、この機会にその笑顔の張り付いた裏側に何が在るのか見極めさせて貰うぞ。

「まずは、何故お前は世界を統一したいのか、だ」

ウニロに関して我に仕えているだけの事。ハシユカレは想い人の為だと聞いている。マバタについてはハシユカレに目的無く付き従い、今はあのリセスとか言う坊主を殺れば別に構わないらしい。

マスナーからは、我々と同じ目標は聞いた。しかし、その背後の目的は聞いていない。いや、明らかに目的を隠している。

「……そうですね、何故世界を統一したいのか。忘れてしまいました。そんな昔のことは」

その諫言でこの世界を動かして来た女、簡単に口を割るような奴ではない。

「理由も無く、こんな大それた事を続けられるものなのか？」

お前はその理由を見せないから、我の中に不信を生んでいるのだ。

「私は観測者を抜け、介入者になりました。しかし、セルジオ様を始め、主な介入者はゼロランドに送られ、私は残されました。クーレの観測者に戻れる訳もなく、故郷のアールに戻る筈がありません」

マスナーの語る口元と声の抑揚は普段のように穏やかだ。だが、深々と眼元を隠しているフードを取り払ってやりたい。その中でこの女の眼は何を思っているのか？

「寿命も姿も違う私はクーレ人に紛れる事も出来なく、長い時を過ごすしかない私に残された物。それが、世界統一計画だけなのです」
目標無き計画の実行を進める女。哀れな人間だな。

「愚かだな。お前はせっかく自由を得たのだ。更にお前にはオシリスの杖という力がある。この世界の一国を乗っ取るほどの能があるのだぞ。何故、介入者で在ることに縛られる必要がある？何故、我のような童に仕えるふりをする？」

我より力を持つお前が、我の下で在ることが可笑しいのだ。

「それはカーム様の買い被りです。私は宿り木のように、誰かに寄生してしか、生きて行く術が無いだけの事です。誰かの養分を奪いながら、ですね」

唯一見える感情の指針である口が更につり上がる。我はマスナーと

言う宿り木に絡まれた大樹と言うことか。

やっと本性をさらけ出したか。

そうでなければ面白く無いではないか。笑いが込み上げてくる。それならば、此方は逆に宿り木の養分を吸い付くしてやるのみよ。

「あら、私の冗談がお気に召されたようですね？カイム様」

おどけた口調で抜かすマスナー。

「ああ、凄く気に入った。我はお前みたいな従者を持てて幸せだぞ。お前に吸い付くされて捨てられないよう努力するでしょう。お前も我にその身体を引き剥がされないように必死に絡みつくる事だな」

マスナーからも笑い声が洩れる。

「私は決してカイム様を捨てたり致しませんよ」

「ホオ、信用に値しない言葉だな」

マスナーが急に我に顔を近付ける。フードの下に隠れていた黒い二つの眼が我の眼を映しているのが、分かる距離に。

「だって、私はカイム様の事をとても気に入っていますもの」

我の顔に付くかの距離で妖艶に動く唇に、赤面して腰を退いてしまった。マスナーからの溢れる笑い声が音量を増す。

「フッフ、カイム様も色事に初な御様子で」

我は純情な青年のように、年上の女性の色香で遊ばれたらしい。

我ながら、情けない。

「さて、そろそろ戻りましょう。私は久しぶりに楽しい会話が出来て嬉しいのですが、楽しみ過ぎて少々疲れました」

我は少々不愉快だぞ。しかし、足取りがいつもより軽いマスナーを見ているとそんな不愉快さも薄れて行く。

今はまだお前の手のひらで動かされてやろう宿り木よ。

しかしな、我は欲しい物はどんな手を使っても、全てを手に入れる。全ての世界の全ての物を。

だから、我はいつかお前の全てを手に入れて見せるぞ。心から我に仕えさせてやる。

番外編 悪魔と天使（後書き）

純情な二十歳青年が年増な二千歳越えのお姉様に玩ばれるお話でした。

少しスピノフでカーム達の冒険も連載で書いてみたくなってしまいました。

まあ、今やると今後の魔冒のネタバレが続出しそうなのでやりません。やるとしたら、魔冒終了後ですね。

魔王の我が儘、執政官長の諫言と友の脅迫

休暇として与えられた五日間も、パシクダカ隊長の勝手な計らいにより、魔王親衛隊特別隊員なるものに任命されてしまった俺は、ヘブヘル式軍事訓練という名の鬼隊長の扱きに耐える日々だった。しかし、この鬼隊長の扱きに耐え、少しは強くなれたと実感とともに、充実した休暇だったと思える。

しかし、ヘブヘルに休暇で寄ったことは、思わぬ問題を引き起こす。それは次の世界へ渡る直前の現在に到って発生する。

シュナアダが無表情で見る先には半泣き半睨みのイルサ。

「とにかく魔王ともあるう貴女が、職務をほったらかして、他の世界に行く等、認められません」

俺たちの出発に水を差されたのだ。主にイルサに。しかし、シュナアダも正論である。一国の王が国をそう簡単に開けて良いわけではない。

「何で！私はちゃんと仕事を片付けたよ！」

確かにイルサはこの五日間ほとんど執務室に籠っていた。食事と寝る時以外。このイルサの努力を評して許してやってくれないか？

「それが魔王として当然です。それに国の宝で魔王様を危険な地にこんな少数な護衛だけで送り出す訳には行きません。カイムの事はクレサイダに任せて下さい」

確かにな。イルサは国にとって大事な存在。そいつを前線に引っ張り出す訳にはいかない。それにここに残った方が安全だろう。

シュナアダの口を挟まないで頂きたい、の一言で発言を封じられた俺と異世界の余所者たち。俺としては、心の底ではイルサと一緒に来て欲しい、という想いまでシュナアダの正論で封じられてきている。非常に気まずい場面に立ち尽くすしか出来ない。

同じくイルサの半泣き顔に一度は心を折られたクレサイダも、イルサへの肩入れを止めさせられ、苦い表情で俺の渡したセレミスキーを指で弄っている。

見送りに来てくれたパシクダ力隊長は我関せずで腕を組み欠伸をしている。その隣で笑顔満開の妹さん、カリサペクは、愛しい主を引き留めるシュナアダを心の中で大応援している事だろう。

戦況はイルサが大劣勢。援護をしてやりたいところだが、俺が口を挟んでも、この戦況はひっくり返らない。

「でも、クレサイダもリセスもルクちゃんもセルツさんもウエダさんも行っちゃうんだよ。私だけ……」

「我が儘も程々にして下さい！」

相変わらず表情を変えずに声を荒げるシュナアダ。イルサの見開く眼から、普段怒鳴る事がない奴なのだろう。

「……失礼しました。しかし、イルサテカ様が我が儘を仰る所為で皆様の出発が遅れています。貴女の立場を弁えなさい。皆様と違うのです。貴女は魔王なのです。それを弁えずに、皆様の足を引っ張るのですか？」

俯くイルサの眼からは大粒の涙が地面へと落ちていく。そのイルサを置いていくのは、すごく心苦しい。しかし、これがイ

ルサの為でもある。わざわざイルサが、実の兄と戦う必要もなくなる。そう己に納得させるつもりだった。雌雄は決した…。

「シュナアダさん、ちょっと良いかな？」

いや、俺の早計だった。イルサにはまだシュナアダの正論なんて叩き捨てて、己の邪論を押し通す強い味方がついていた。

「イルちゃんが行きたいって言うなら私はイルちゃんを連れて行くよ」

「…ルクちゃん」

ルクには纏まりかけた結論なんて何の意味も持たないらしいな。イルサの眼に期待が浮かぶ。

「イルサテカ様はこの世界の王です。勝手な事を抜かさないで頂きたい」

「だから？」

ルクに視線を移したシュナアダの言っている事は常識的に正しいのだが、こいつには正しいだけでは勝てない。常識的に正しい事なんて、ゴミ箱に捨てるような奴だからな。

「イルちゃんが魔王なのは知ってるよ。でもね、イルちゃんは私の大事な友達なんだよ？その大事な友達を泣かせて自由を奪う。そんなこと、このとっても友達想いなルクちゃんが見過ごすと思う？」

ルクがとっても友達想いだっただとは知らなかったぞ。俺は可愛がるを名目に友達を遊ぶ奴だと思ってた。

「ルク・レッドライト様、この世界の事やこの国の事に口を出すのは……」

「そう私は異世界の人間だよ。だからね、どうでも良いんだよ、こんな世界。イルちゃんの為に私が出来る事なら何でもしてあげちゃうんだ。この世界を敵に回しても、ね？」

ウエダさんが、生でそのセリフをしかも少女から聞く事になるとは、と眼を見張っている。確かに、なんか格好良い。イルサがルクをうつとりとした感じで見詰めている。少し俺も言っただけでやりたくなった。

さておき、形成逆転だったか。

「本当に貴女の実力で我々の相手が務まるとお思いですか？」

そう簡単には勝てない。

シユナアダは恐らく怒っているのだろう。パシクダ力隊長も不穏な空気に剣に手を掛ける。おい、力付くでは勝てないぞ。

「シユナアダさん。甘いよ。私にはリセ君がついてるんだよ？」

おい、俺に丸投げるな！無理に決まってるだろ！

「リセ君は、セレミスキーを持ってます。つまり、どの世界からモイルちゃんを喚びたい放題なんだよ。さらに、今すぐに色んな世界から、色んな生物を喚べるんだよ。何か、凶悪なのを喚んで

みるゝ？」

成る程な、ルクの脅しの材料は俺ではなくセレミスキーか。良く考えれば俺はイルサをいつでもどこでも喚び出せたのだ。

「ルク嬢の勝ちだね、シュナアダ君？まさか、リセ坊からセレミスキーを取り上げる為に、我々で無駄な血を流す気は無いだろう？イルサ嬢は我々が守る。どうか任せてくれないかね？」

鶴の一声ならぬ栗鼠の一声。

大きくため息をつくシュナアダ。

「ルク様を相手にしていると、同じクーレ人だからでしょうか、セルトテイン様の主人を思い出しましたよ。分かりました。私の敗けです」

シュナアダの敗北宣言。ルクとイルサから歓喜の声。カリサペクからは悲観の声。

「イルサテカ様、リセス様、旅立つにあたってこれをお持ち下さい」

シュナアダが差し出す二つのペンダント。丸い板に埋め込まれた石。

「これは魔鉱石か？」

クーレで、魔具に使われて、魔法を増幅、蓄積する性質のある石に似ている。

「魔鉱石と似たようなものですが、それは伝想石です。伝想石は、

一つの石から欠片に分けると、どんなに遠くに離れて居ても、その欠片同士が惹かれ合い、使用者の声を送る事が出来るのです。世界を跨いでも使える事は六百年前に実証されています」

「フアンタジーな携帯電話ってところか？」

ウエダさんの解釈にケイタイデンワと首を傾げるシュナアダ。俺もアースに行つて初めて知つた物だからな。

「まあ、とにかく。私が、もう三つ目の伝想石を持っていますので、何かあつたらお知らせ下さい。本当はクレサイダの分なのですが、イルサテカ様は一日一回は連絡してください。リセス様はセレミスキーで喚ばれる時は一報をお願いします」

つまり、セレミスキーで喚び立てても良いって事か？それは心強い。

「エツと、シュナアダ。ゴメンね」

「先代から魔王の我が儘に耐えるのが私の仕事のようなものです。イルサテカ様、行くからには堂々と行きなさい。お氣をつけて」

いつも何だかんだとイルサの自由を奪うシュナアダ。しかし、イルサがシュナアダを嫌いになれない理由が分かる。何だかんだ言つても、シュナアダは根は良い奴だからだ。

俺には嫌な事が多かった。でも、良い人達に会えた。

このヘブヘルを離れるのも嫌に感じてしまう。ここが第二の故郷という感じだろうか。

魔王の我が儘、執政官長の諫言と友の脅迫（後書き）

この話を書きながら昔の缶コーヒーだったけかのCM思い出してしまった。

男が女性に向かって

「お前の為なら世界を敵に回しても良い」

って言ったら、急に自衛隊のヘリが飛んできて包囲されたり、テレビでその男の顔写真と共に米大統領が世界の敵〇〇とか言う。汗だくになる男。

実力の伴わない奴が言っても格好のつかない台詞なのですね。

死の精神世界フォートン

眼が痛くなる光景と言おうか？目の前に広がるのは白と黒を交互に並べたタイル張りの地面。空は一面の白で塗り潰され、太陽どころか雲一つ浮かんでいない。直ぐ近くに見える、黒い建物の群れ。

「自然感の全く感じねえとこだな」

地面に敷き詰められたタイルを足で叩いて確認しながらばやくウエダさん。

「この世界の住人には必要が無いからね。取り敢えず、向こうに行こう」

クレサイダが元気が無い？何か今日は厳肅な空気を背負っているみたいだ。いや、何かに緊張しているのか。

「そう言えばクレちゃん、この世界の事全然話してくれなかったよね？歩きながら話してよ」

「シユナアダに口止めされてたんだよ。姫が絶対に同行したいって言い出すからって」

「何で？ここはそんなに良い世界なの？」

イルサにとって魅力的な世界。食い物が只で食い放題とかか？

「この世界には肉体を持つ生物は全く居ないんだ。いや、正確には生き物が全く居ないんだけどね」

「じゃあ、この家はどちらさんのなんだ？」

ウエダさんの質問はごもつともである。目前に迫った黒い建物群。生き物の住処らしき物があって生き物が居ないとはどういう事だ。

「ここに居るのは精神だけ。この世界は他の世界で死んだ者の精神を集めて閉じ込め、その精神を長い時をかけて、浄化する世界なさ」

そう言いながら、集落の中へ一歩踏み出すクレサイダ。

道を行く人達。道端に座り込む人達。服装に統一感がなく、クレーで見るとような服を着ている者もいれば、アースの服もいる。人種もバラバラで肌、髪、瞳の色、翼の有無等も異なっている。しかし、一様に同じなのは活気とは無縁な街。静かに歩く生氣を感じられ無い人達。死んでいるのだから当たり前なのだろうが、まるで影だけが動き回っているように。この世界の人達は、何もする事無いのだろうか？

「つまり、死人の住む世界って事なのだね？とても寂しいところだね。ところで聞きたいのだがね……」

セルツがイルサからクレサイダの肩に移って聞く。

「僕も詳しくは知らないよ。浄化されてなければ会えるかもね。君の昔の仲間たちにね」

リンセン・ナールスやレクスター・シークスに会える可能性があるのか。父上が知ったら大喜びしそうだ。

「ちょっと待って！お父様やお母様に会えるのクレサイダ！」

イルサが期待を込めた瞳でクレサイダを見る。死んだ家族に会える。イルサにとっては魅力的な世界だな。

「浄化されていなければ可能性はあります。しかし、この世界は広いです。会えない可能性の方が大きいでしょう。当初の目的を忘れないように」

クレサイダが淡々と言って聞かせ、項垂れるイルサ。人生そう上手くはいかないってものだ。

「姫、死んだ人間はもう会えない。それが常なのです。僕は会うことが必ず良いことだとは思えません」

そう言いながら歩みを進めるクレサイダ。

「とにかく、欠片を探して、さっさと帰…」

「表に出やがれ！今日こそ決着を着けてやるぜ！それともなんだあ？ テメエは取り巻きが居なきゃあ、末端軍人一人にも勝てねえてか？」

「身の程知らずが。我に対するその愚弄は高く付くぞ！」

その時だった。静まりかえる閑静な街に響く覇気のある二つの声。

扉を蹴破り勢いよく出てくる大男。クーレの軍服。しかし、カーヘルさんの軍服に似ていることから旧ガンデア出身なのだろう。声の張りといい、体格といい、死とはかけ離れた健康そうな男だ。

その男の後から追って出てきた男。羽が生えているから、ヘブヘルかアールなのだろうが、その男を見た瞬間に全身の毛が逆立つ思いをした。思わずカタナの柄を掴んだ手が震えている。その男の顔を見ただけだった。俺がそいつに勝てないと悟ったのは。何なんだ、こいつは。こんなに俺の身体が震えるのはカイルと対面して以来、いやカイル以上の恐怖の存在。何なのだ、こいつの纏う怒りの雰囲気は。

隣に居る怖いもの知らずのルクの顔にさえも怯えの表情が見え、イルサは…。泣いてる？

「おとおさまー！」

泣き声で崩れ、良く聞き取れなかったが、お父様と言ったのか？えっ、お父様って？

死の精神世界フォートン（後書き）

出てきちやいますよ。あんな人やこんな人が！

死せし英傑達との悲しき再会

勢いを付けてハグしようとするイルサと亡くなった父親との感動の再会。そうはいかなかった。父に全体重を預けるつもりだったイルサは、父の身体をすり抜けて、白黒の地面へ前のめりに倒れる。その触れぬ父がなければただ道端で転んだ女。

「…そうか、我に触れぬと言うことは、イルサはまだ死んで居らんと言うことだな？安心したぞ」

顔が涙で酷い状態のイルサの頭を撫でるふりをする前魔王。先程の見る者を畏怖に包み圧倒する雰囲気は既に無く、安心したの言葉とは裏腹に寂しそうな顔の父親と泣き続ける娘がその場に居た。

その親子に近寄りながら、俺の心に甦るクレサイダの先程の言葉。

『必ずしも会える事が良いことだとは思いません』こんな悲しき再会があるのだろうか。

「んなあ！ニーセか！」

イルサの突然の登場で影となっていた前魔王の決闘相手の大男が、近寄る俺たちを見て驚きの大声をあげる。まあ、誰を見ての事だかは分かる。かの聖女様と容姿だけはそっくりだからな。しかし、聖女であり、国の重鎮であるニーセさんを平気で呼び捨てにする人が、父上達の他に居たとは驚きだ。

「えーと、母に似て美人ですが、私はニーセ・P・レッドライトの娘のルク・レッドライトです」

「ハア〜！ニーセ・P・レッドライトって！あいつ、嫁に行けたのか！」

いや、このおやじさんは何故にそんなに驚くんだ。ニーセさんと言ったら、クーレで知るものは居ない世界を代表する淑女だぞ。嫁にするなら聖女様のような人にしなさいと親が息子に言われるぐらいの女性だ。俺は両親にニーセのような女には引つ掛かるなど意味不明な事を言われたが。

「しかも、レッドライトって！敵軍の親玉格じゃねえか！何がどうなってそうなった？」

一人大混乱をきたすおやじさん。まあ、シール工騎士団で一番の紳士な男性と旧ガンデア軍で一番の淑女な女性が出会った事は奇跡に近いのだろう。しかし、出会ってしまったからには当然の結果。そういうものではないのか？

「あゝ、一体世の中どうなってやがんだ！おっと、悪い。色々聞きたい事はあるんからよお、取り敢えず中に入ろうぜ。なあ、魔王さんよお！お？お前、その坊主！学者に似てんな？もしかして学者の息子か？」

…学者って。誰の事を指すかは何となく分かるが、俺は父上を学者と呼ぶ人間は初めて見た。

外観の全て真つ黒とは異なり、中身は全て真つ白な建物内。ここで生活したら目がおかしくなりそうだ。

「ミシャがシール工騎士団であの坊主の隊に居るとはねえ。まあ、ある意味安心出来るちゃあ出来るがよお。ミシャは絶対ルーシヤに

似て、美人になってる。シーベル工の野郎共、手出してる輩は居ねえだろうな」

父上が英雄と称えるニーセさんの元上官ケルツク・ラベルグさん。ミシヤさんとレクス兄さんが密会しているのを目撃してしまった事は、やはり胸の内にしまっておいた方が良かったらうな。

「まさかあのジンサに嫁の貰い手が出来るとは思いませんでしたよ。しかも、こんなに可愛い姪まで作って」

ジンさんの兄にして、シーベル工最大の反逆者として歴史に名を残すウオッチ・レッドライト。何と言うか、ルクを見る目は噂とは違い感じが良さそうな人だ。

「あのアレンが、第3独立遊撃隊隊長になったか。こいつは面白れえ！なあ、ハヤセ？しかも、お前の想い人捕られちまってるぞ？リセス君、実はなここに居る堅物君はな、生前君のお母さんに…」

「ラス隊長！当人の子息の前でそう言う話をするべきでは無いです！」

アレン・レイフォートを育てたのは俺だと豪語するラスウェル元第3独立遊撃隊隊長と、その少し興味をそえられる話を顔を真っ赤にして遮るハヤセ副隊長。

その母上にまつわる話を聞きたいところではあるが、イルサ達の話の方が重要である。

「…そうか。カイクがな。取り敢えずクレサイダ、ご苦労だな」

シールテカの言葉に恭しく頭を下げるクレサイダ。

「全く、不良息子になってしまった者ね。あつ、セルツも娘を守ってくれてありがとね」

「いや、私はそこまでのことはしてないよ。彼ら若い者が頑張った結果だよ」

魔王妃でイルサの母にして、観測者クラフの妹、そしてセルツの知り合いらしい女性。何とも様々な立場をお持ちだ。

秘密多きセルツとの関係を聞いておきたいところだった。

質問は急に高笑いし出したこの男に遮られる。

「済まぬな。フッフッフ、しかし、全世界征服とはカイクも立派になったものよ」

何でこいつは至極楽しそうに笑える？お前を殺した奴だぞ。

目の前で笑う男、元魔王シールテカ。こいつの語る意味は俺より深いところにあるのは、まだ俺には分からない。元魔王と元王妃の話を聞くまでは。

魔王の妃の語る名言

「心底我が気に入らないという面だな。小僧よ」

ああ、気に入らない。イルサの傷心も知らずに、カイク等を誉めるあんたは。

「申したい事があるなら、言ってみよ」

未だに高笑いの余韻を残しながら、俺に挑戦的に言ってくる。その喧嘩、買ってやる。

「カイクはあんた達を殺して、イルサから魔王の証を力尽くで奪おうとしているんだぞ。あんたはそのカイクを認めるといふのか？」

「認めんな」

そら見る！へらへらと笑える事では無いだろ。

「我に力が有ればの話だ。カイクは我に力で勝った。既にあいつは我を制して認めさせたのだ。全てをな」

「ならば、あんたは力が有れば何をやっても良いと言つのか！」

「ああ、その通りだ。力が有れば何をやっても良い。それが真理であらう？」

また、愉しそうに笑い出すシルテカ。何故か、その笑いはラベルグさん、ラスウェルさん、シルビーさん、そしてセルツにまで伝染

する。ここまで、年上達に囲まれて笑われるとさすがに立場が無い。

「申し訳ありません、シールテカ様。リセスはこういう奴なのです」

「まあ、良い。我は中々楽しませてもらってる」

クレサイダの酷い物言いに、シールテカはご満足に頷く。

「どこか貴方は私の知り合い彼に似てるわ。ねえ、セルツ？」

「君もそう思うかい？ いやあ、私にも常々そう思ってた楽しくリセ坊を見ていたのだよ」

おい、栗鼠公。俺は見せ物じゃないぞ。俺は見えてそんなに楽しいのか？

「昔、貴方と同じ事を言った男が居たわ。武力で、世界を取るなんて許せないってね。それをたしなめた人が居た。ならば、お前はそこから世界を護るために、武力を使わずして護れるのかってね。彼はその人に返す言葉は無かった。貴方には有るのかしら？」

俺を優しい眼で見詰めて来るシルビーさん。カイクにカタナを振るわずに、世界を護る方法が浮かぶはずもない。

「その人は、続けて言った。私達は力がなければ何も得られない。私達を選ぶのは、その力で何を得るのかだ。お前はその力を持って何を得たいのだ？ ってね。どうかな、リセス・ネイスト君？」

シルビーさんの眼は昔のその人達を見ながらも、俺をしつかりと見据えている。シルビーさんの問に答えられない。その代わりに自然

とイルサの顔を素早く眼だけで確認してしまった。

「フッフ、それで良いの。イルサをよろしくね？」

あつ、いや、そういう訳では決して無いのだ。俺の十数年鍛えた剣技を何に使うか考えたら、勝手に眼がイルサの方に向いただけであつてな？

「イルサ？この男はお前の只の従者であろつな？」

先程までの笑みが消えた元魔王様。“只の”に微妙なアクセントを置いて、イルサに鬼気迫る顔で聞く。

「違つよ、お父様。リセスはとつても仲の良い友達なんだよ。私達と一緒に御飯食べたり、一緒に寝たりするほど仲が良いんだよ」

イルサは両親に意気揚々と友人の事を自慢する餓鬼。

イルサの言っている事に虚実は全く無い。無いのだが。

「あら、もうそこまで？重ね重ねイルサをよろしくね。もう分かつてると思うけどこの子は結構、初だから」

いや、貴女の勘違いする意味でイルサを任されても困ります。

「おおー！あのヘタレな学者に似ずに、手が速いこつて」

いえ、ラベルグさん、父上はヘタレでは無いです。俺も父上に似て女性とは清く正しい付き合い方をする人間です。

「クレサイダよ？この小僧を焼き殺せ。今すぐに。くそ、我に肉体

があればこんな小僧にイルサを…」

俺の隣のクレサイダの耳に近付き囁くシールテカ。俺にはその殺意に満ち足りた声のはつきりと聞こえてるぞ。

「いやあゝ、若いって良いね？そう思わないかね？リセ坊？」

俺がそんな年寄りの達観した考えに至るにはまだまだ遠いようだ。

魔王の妃の語る名言（後書き）

久々の更新です。しかもいつもにまして、短い。ちびっとシルビーさんに活躍して貰いました。

最近、戦闘書いて無いっす。でも、まだ戦闘シーンまで二、三話挟んじゃいます。戦闘お待ちの方々暫しお待ち下さい。

ウエダ精神分析論

寝れる訳がない。知り合いが多く積もる話も有るだろうと一泊していく事になったのだが、外は一向に日が暮れる様子も無く、日すら無い。時間と言う概念が無い世界なのだと、レッドライト元北方騎士団長は語った。我々はただただ、存在するだけの存在だとも。

此処での再会の無い事とシールテカの睨みが酷い事で、俺とウエダさんが居辛い空気から散歩に駆り出したのだが、目の前には何をするでも無く漂う存在達。

「俺も死んだらこうなるのかと思うとわびしいもんだな。酒も食い物も煙草も望めば簡単に手に入る。だからこそ、やる事、やりたい事が無いってな。死にたくないもんだな」

ウエダさんの呟きに黙って首を縦に振っておく。

「ウエダと言ったな、その通りだ。此所には進歩は無く、過去に存在する者しか居らん。死んでいるのだよ、我々は」

「あんた、居たんかい！」

死んだ人間に気配と言うものは無いのか、いつの間にか俺たちの背後を取っていたシールテカに、ウエダさんが恐るべき素早く応対。

「ハハハ：良いのだよ。どうせ我は娘と再会しても、妻に女同士の秘密の話と言われ追い払われ、そのやるせなき気を晴らす為に出た先で声を掛けたら、存在を否定される言葉を投げ付けられる…。そんな存在なのだよ、どうせ」

妻子に冷たくされて拗ねてやがる。

「まあまあ、落ち着けよ、お父さん」

「貴様にお義父さんと呼ばれる筋合いは無い！」

ウエダさんの付け足した親切の一言に敏感に激怒する元魔王。俺には思春期の娘を持つ敏感な心の父親の相手は務まりそうに無いので申し訳ないがここはウエダさんにお任せしよう。

「昔は、私の姿を見ると、羽根を喜びにはためかせながら、世界の笑顔で飛び付いて来たのに、今はシルビーばかり。あれか、我が仕事ばかりでイルサに構ってやらなかったのが悪いのか？私は、家族を守る為に精一杯働いていたのだぞ！その結果がこれなのか！ちよっと眼を離れた隙にどこの馬の骨か分らん男を作って、久々に顔を合わせたなら避けられる……」

父上のお得意の冗談だと思っていた。嫁を貰ってマイホームパパになっちゃった魔王など。何だかカッコ悪いと言ったら、父上に、そんなことは無い、夫兼父親は偉大な職業だと力説された。

「まあ、シルテカさん。年頃の娘なんてそんなもんだって。まだクソオヤジとか、近寄らないでとか言われただけマシだと思うぜ」

「イルサからそんな事を言われたら我は…死ぬ」

心配するな。イルサはそんな事を言いつこ無いし、あんたは既に死んでいる。

「そうそう、あんたはまだ娘さんに愛されってるって」

「そっそうか、本当か？ 適当な慰めでなかるうな？ 現に我はさつき、イルサを妻に持ってかれたんだぞ」

ウエダさんに詰め寄るシルテカ。その勢いにウエダさんが一步後退る。

「ああ、えーと、俺の住んでた世界に心理学って学問が有ってな、そこでエレクトラコンプレックスって概念がある」

「シンリガク、えれくとらこんぷれっくす？ 何なのだ、それは」

慌てて考えたように語り出すウエダさん。娘に溺れる者は藁では無く、ウエダさんの襟を掴もうとする。

「ちよっ、落ち着け。あれだ、女の子は父親に無意識に惚れちゃうもんだってことだよ」

「適当な事を言っな！ 現にイルサは我よりもシルビーを選んだぞ。我は納得せんぞ！」

今回は俺の身近な女であるルクは父親に惚れてるようには決して見えんぞ。

「ああ、面倒くせえ！ 良いか、エレクトラコンプレックスには段階つてもんが有ってだな。幼い頃は父親の気を惹こうと娘はベツタリ。でも、その内に無意識に気付いちまうんだよ。父には既に母という最愛の人が居ることに。そうすると娘は次なる父を愛する手段を無意識に取る。母親のような人間になれば、父に好かれるではないか

？そうすると、母と仲良くなり、父に辛く当たってしまった。これは、父を愛する気持ちが大きければ大きくなる。万人に当てはまるとはいかねえけど。どうだ、シルテカさん、イルサの行動に思い当たる節はあるだろう」

「ある！そうか、イルサは我を愛するが故にシルビーのような女性になろうと、まったくイルサはしょうがない奴だな」

ウエダさんに丸め込まれて、浮かれる魔王。ルクにも当てはまる節がある。遙か昔はジンさんにベツタリだったからな。

「それでウエダ、イルサはシルビーのような美女に育って我の元に戻ってくるのだな」

眼を期待に輝かせ聞くシルテカ。

「ああー、うん、言いくいんだけどね。その頃には実の父と付き合う事が出来ないってのを知るって言うか」

ウエダさんの歯切れの悪い答え。

「なっ！はつきりと言え！我はどんな結果にも……」

「父親への愛を諦めて、別の父親と似た所のある男性を愛するようになる」

元魔王、異世界人の学問の前に、地にひれ伏す。

つまり所、イルサはこの魔王のような男に惚れ、ルクはジンさんのような男性に惚れるってことか？眉唾物だな。だが、どこことなく当たるような気がしないでも無い。

「あー、シールテカさん。子供は親を離れて行くもんだからさ。あんたもそろそろ子離れしないと。ああ後、これは類型論、大体の人に当てはまるだけでイルサがそうやって成長するかはだな…」

ウエダさんの最もな提言を耳に入れず、シールテカは白黒の床を眺めながら何やらぼやいている。と思えば急に立ち上がる。

「つまり、我はその小僧と似ていると言うことか！どこが似ておる！そうだ、これはでたらめなのだ」

いや、俺とあんたが似ても似付かないことは認めるが、別にイルサは俺に惚れている訳では無いからな。

しかし、もしもイルサが惚れる男性はこういう情けない男なのか？

イルサの兄代わりとしては、こんな男との付き合いは絶対に認めん！

ウエダ精神分析論（後書き）

二週も開けてしまい申し訳ない。

さらに今回はコメディに。

ちなみに、エレクトラコンプレックスの男の子バージョン、エディプスコンプレックスってのがあります。母親を愛し、その内に父親に似ようと努力するようになる。誰かさんの事ですね。

これって無意識の中の作用で誰でも起こっているらしいのですが、どうなんでしょう？

元魔王の恩返し

果たして、見るも無惨にウエダさんの前に屈服を喫したシールテカ。

「で、あんた、まさか俺たちに愚痴を溢しに来た訳じゃないんだろ」

「ああ、そうだ。その小僧に話が合ったのだ」

ウエダさんの呆れ混じりの声に顔をあげるシールテカ。俺に言いたい事、大体は想像が付いてしまうところだが。

「じゃあ、俺は外すわ。未来の親子同士仲良くやってくれ」

「我にはイルサとカйм以外の子は居ない！未来永劫、これ以上息子はいらん」

俺にこの男を押し付けて元来た道に戻るウエダさん。嫌な気の回し方をしてくれる。こっちは既に話す事など何も無い。

「さて、小僧。じっくり腹を据えて話そうではないか？」

シールテカは地面に胡座を掻き、俺を見上げている。俺も肩を並べて座った方が良いのだろうか？

「率直に聞くぞ」

そんな俺の考えは余所に、俺に見下ろされる事も気にせず、話し出す。

「お前はイルサはカイルより弱いと思うか？」

単刀直入過ぎる問い。その鋭き言葉は俺の脳を深く貫き声を出させない。ふざけている訳では無い。シールテカの瞳は鋭く俺を捉えている。

「お前は我に言った。カイルはイルサに敵わん。カイルはイルサに戦うのは不当だと。我にはそう聞こえたぞ」

俺の中で否定の言葉を述べる事が浮かぶ。だが、俺の外にそれは出ない。

「我が娘を嘗めるなよ、小僧。イルサはカイルに勝る力を持っている。貴様はそんな事も分かんのか？」

怒りでも嫌味でもない。シールテカは俺に諭すような語感を用いている。しかし、こちらが怒りを覚えるのは代わりがなかった。

「我はイルサに我の全てを譲ったのだ。カイルより弱い筈がなからう」

「そのあんたが譲った力。魔王の証、魔王の地位がイルサを苦しめているのが、あんたには分からないのか？」

ここで、此方が激情しては負ける気がする。煮えたぎる思いを抑える。

そして、元魔王はまた楽しそうに笑う。この男が笑う種が何なのか全く分からない。

「小僧、お前はあの小僧に考え方が良く似ている。本当にな」

シールテカは本当にその小僧がお気に入り様で、その俺に似ている小僧の話を嬉しそうに語る。

だが、俺にはどこがどう似ているのか分からないのがつまらない。

「リセス・ネイスト。お前は弱いかな？」

「ああ」

卑下ではない。俺は父上やアレンさん達には到底勝てない、この魔王の知るクレサイダ、パシクダカ先生にも勝てず、カймやイルサにも勝てない。

「いや、お前は十分に強い。それが分かっていない。クレサイダが認め、イルサが認める者なのだぞ？」

「今度は慰めのつもりか？俺は、俺の実力がイルサやクレサイダに認められているとは」

「そう思うのは、お前はお前の実力を認めて無いからだ」

また俺に反論の術は無くなった。何故だかは分からない。シールテカに、俺は俺の中で何か怖いものに触れられた。

「己の力を侮る奴は他人の力を侮る。お前がイルサを強いと侮りながらも、イルサを弱いと侮るのは、お前が自身を強いと侮り、弱いと侮るからだ。それ故、側に居てもイルサの強さも分からない」

今ここでシールテカに反抗も出来ないという事は、俺は己の力量すらも計れていない。それを自分で感じていたのだろう。誰かに言われなければそんな事にも俺は気付けない。

「まずは、己の力を知れ。上に見ることも無く、下に見ることも無く、己の持ち得る力をな。そうせねば、カイムには勝てん。カイムは己を知っているからな」
それだけを言うのと立ち上がり、満足そうに俺の顔を眺める魔王。

「ライシス・ネイストに伝えておけ。シールテカ、息子に借りを返したとな」

踵を返す元魔王。そのまま、呆然と立ち尽くす俺の前から悠然と去っていく。父上を知っていて然るべき。この元魔王は父上と死闘を繰り広げたのだから。

しかし、宿敵に借りた物とは何だったのだろうか？ニーセさんの言う命乞いの話か？この元魔王が命乞いをする輩には見えんが……。

「一つ言っておくが、イルサは貴様に渡す気はない」

前に進むのを止め、背中を見せながら語るシールテカ。俺も別に渡される気は無い。

「欲しければ、我から力尽くで奪ってみろ。そしたら、イルサとの仲を認めてやる。今のお前では無理だと思っがな？」

歩きを再開するその顔は見せない。ただ、シールテカは笑っている。そんな気がした。

元魔王の恩返し（後書き）

お久しぶりです。

大変お待たせしました。

次の更新もまた遅くなるかもしれません。

我が職場では、死走しわすと呼ばれる12月が迫っております。本当に死
人が出ないか心配です。

せめて、週一更新は出来るように頑張りたいところです。

また、長くお待たせしてしまうかもしれませんが、どうぞご了承ください。
さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474m/>

魔王との冒険記

2010年11月24日11時49分発行